

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第111集

押出シ遺跡

(遺構編)

平成8・9年度東駿河湾環状道路建設
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第111集

押出シ遺跡

(遺構編)

平成8・9年東駿河湾環状道路建設
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



押出シ遺跡全景

序

押出シ遺跡は、戦前から、その存在が知られている縄文時代の遺跡である。駿河湾が一望できる箱根西麓の丘陵上に位置し、日当りが良く、山や海の幸にも恵まれた、当時の人々にとって生活しやすい環境であったと考えられる。実際に近年の調査では、箱根西麓一帯に数多くの縄文時代の遺跡が分布していることが明らかになってきている。

この遺跡は、東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘業務の一環として、建設省中部地方建設局の委託により、平成8年から9年度にかけて現地調査を実施した。

調査対象区域は、尾根の頂上的一部分とそれに隣接する谷部であり、遺跡の西側部分であったが、調査の結果、尾根上では、後世の耕作などの擾乱を受けているものの、住居跡が多数確認され、縄文時代中期の中規模集落跡が存在することが判明した。幾度も建て替えられた住居跡や、谷部から出土した勝坂式・曾利式・加曾利E式を中心とする夥しい量の土器は、この遺跡が、永きに渡り人々が生活を営んだ場であったことを窺わせる。

今回は、遺構編として、検出された数多くの住居跡と関連遺構を整理し、個々の状況を明らかにすることを目的として編集作業を行ってきた。押出シ遺跡の遺構が縄文時代中期の新たな資料として検討されることを切に願う次第である。

最後になったが、押出シ遺跡の現地調査ならびに本書の作成にあたっては、建設省中部地方建設局沼津工事事務所をはじめとした関係機関各位に多大なる援助、協力を得た。厚く御礼申し上げる。また、この場をお借りして、現地調査、資料整理に参加した調査員、作業員の労をねぎらいたい。

平成11年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

1. 本書は、三島市谷田字押出シ1772他に所在する押出シ（おんだし）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、「平成8・9年度東駿河湾環状道路建設埋蔵文化財発掘業務」として、建設省中部地方建設局沼津工事事務所の委託を受け、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 現地調査は、平成8年4月から平成9年10月まで行い、整理作業は、平成11年度まで行う予定であるが、この内、遺構編については、平成10年9月まで行った。
4. 調査の体制は、次の通りである。

平成8年度

所長 斎藤 忠 副所長 池谷和三 常務理事 三田村昌昭 調査研究部長 石垣英夫
調査研究四課長 橋本敬之 調査研究員 瀬戸俊昭 中川律子 木崎道昭（5・6月）

平成9年度

（現地調査）

所長 斎藤 忠 副所長 池谷和三 常務理事 三田村昌昭 調査研究部長 石垣英夫
調査研究四課長 橋本敬之 調査研究員 朝比奈剛 林由美子 岩名建太郎

（整理作業）

所長 斎藤 忠 副所長 池谷和三 常務理事 三田村昌昭 調査研究部長 石垣英夫
調査研究四課長 橋本敬之 調査研究員 濱田（旧姓林）由美子 岩名建太郎 望月由佳子

平成10年度

（整理作業）

所長 斎藤 忠 常務理事 伊藤友雄 調査研究部長 石垣英夫 調査研究部次長心得
兼調査研究一課長 佐野五十三 主任調査研究員 前嶋秀張 調査研究員 岩名建太郎

5. 本書は、静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して執筆した。

第Ⅰ章 望月由佳子
第Ⅱ章 望月由佳子
第Ⅲ章 濱田由美子
第Ⅳ章 岩名建太郎 水上綾子
第Ⅴ章 岩名建太郎
付編 第3節 望月由佳子
第4節 森鶴富士夫

6. 埋蔵の内容物の理化学分析、住居跡内検出の炭化材についての炭素14年代測定法分析と樹種同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、分析結果については、それぞれ付編第1・2節に掲載した。

7. 本遺跡についての資料は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

8. 現地調査にあたり、謹谷昌彦氏（島田市博物館）に御教示及び御指導頂いた。

凡　　例

本書の記述、図示については、以下の基準に従っている。

1. 遺構の実測図は、遺構全体図を1/250、土層図を1/50、1/250、住居跡実測図を1/50、1/60、1/100、炉実測図を1/30、埋甕実測図を1/20、土坑実測図を1/30、ピット配置図を1/50、1/60の縮尺で作成した。

2. 推図に記入されてる方位は、すべて方眼北であり、方位が記入されていない挿図については、本文中に特に記述が無い限り、図の上方が北（方眼北）である。

3. グリッドは、国土方眼に基づき、10m四方の方眼を設定した。南西の隅の杭番号を以てグリッド名としている。

4. 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に基づいている。

5. 本書における遺構表記（略号）は、次の通りである。

SB 住居跡 SL 炉跡 SU 埋甕 SD 壁溝 SP ピット 小穴 柱穴 SF 土坑
SN 柱穴並び（柱穴として矛盾の無い小穴の並び）

6. 遺構の一覧表に於いて、〔 〕は推定値を示している。

7. 遺構実測図については、焼土集中層をスクリーントーン  で示した。また、平面的に新旧の焼土集中層が重なる場合、古い層をスクリーントーン  で示した。

8. 土層図については、谷部の遺物包含層をスクリーントーン  で示した。

目 次

巻頭カラー 押出シ遺跡全景

序

例言

凡例

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
(1) 押出シ遺跡周辺の遺跡	4
(2) 繩文時代中期の様相	4
(3) 箱根山の開墾	7
第Ⅲ章 調査の方法と経過	10
第1節 調査の方法	10
第2節 調査の経過	10
(1) 現地調査	10
(2) 整理作業	12
第3節 土層	15
(1) 箱根西麓ローム	15
(2) 押出シ遺跡の土層堆積	15
(3) 各調査区の堆積	15
第IV章 遺構について	21
第1節 遺構の概要	21
第2節 住居跡	21
第3節 その他の遺構	71
第V章 まとめ	108
第1節 埋甕の堀り方と埋設状況	108
第2節 炉の形態	108
第3節 住居の配置状況	109
付編	
第1節 押出シ遺跡の縄文時代中期埋甕内容物に関する調査	112
(パリノ・サーヴェイ株式会社)	
第2節 押出シ遺跡の1区で検出された竪穴住居跡(SB-8)の年代観と構築材について	115
(パリノ・サーヴェイ株式会社)	
第3節 押出シ遺跡踏査記録について	118
第4節 押出シ遺跡検出の炉石・敷石の石材産地について	122

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 東駿河湾環状道路予定路線	1
第2図 三島市の地形と押出シ遺跡の位置	3
第3図 繩文中期の遺跡分布図	5
第4図 押出シ遺跡周辺遺跡分布図	8
第5図 押出シ遺跡グリッド配置図	11
第6図 試掘トレンチ及びテストピット設定図	18
第7図 押出シ遺跡土層堆積概念図	18
第8図 押出シ遺跡土層図	19
第9図 遺構配置図	23
第10図 SB-1	25
第11図 SB-2	25
第12図 SB-3・4・5・6(1)	28
第13図 SB-3・4・5・6(2)	29
第14図 SB-7	30
第15図 SB-8・9・10(1)	33
第16図 SB-8・9・10(2)	34
第17図 SB-11	36
第18図 SB-12・13・14・15(1)	39
第19図 SB-12・13・14・15(2)	40
第20図 SB-12・13・14・15(3)	41
第21図 SB-16・17(1)	43
第22図 SB-16・17(2)	44
第23図 SB-18・19・20(1)	47
第24図 SB-18・19・20(2)	48
第25図 SB-21・22(1)	50
第26図 SB-21・22(2)	51
第27図 SB-23・24(1)	54
第28図 SB-23・24(2)	55
第29図 SB-25	55
第30図 SB-26・27・28(1)	58
第31図 SB-26・27・28(2)	59
第32図 SB-29・30	61
第33図 SB-31・32・33	63
第34図 SB-34・35	67
第35図 所属住居不明炉	73
第36図 所属住居不明埋甕	76
第37図 所属住居不明壁溝(1)	79
第38図 所属住居不明壁溝(2)	80
第39図 その他の遺構配置図	82
第40図 SN-1・2	84
第41図 SN-3・4・5	85
第42図 SN-6・7・8・9・10	87
第43図 SN-11	88
第44図 SN-12	88
第45図 SN-13・14・15	90
第46図 SN-16	91
第47図 柱穴並び配置図	92
第48図 土坑	95
第49図 3区検出ピット	96
第50図 炉形櫛変遷図	110
第51図 埋甕 試料採取位置図	112
第52図 SB-8 炭化材試料採取位置図	115
第53図 押出シ遺跡周辺の河川 及び岩石試料採取実施地点	125

挿表目次

第1表 東駿河湾環状道路路線内遺跡 及び調査状況	1
第2表 繩文時代中期住居跡検出遺跡	6
第3表 周辺遺跡地名表	8
第4表 押出シ遺跡調査工程表	13
第5表 住居跡計測表	68
第6表 爐計測表	74
第7表 埋甕計測表	77
第8表 壁溝計測表	81
第9表 柱穴並び一覧表	91
第10表 土坑計測表	94
第11表 柱穴一覧表	97

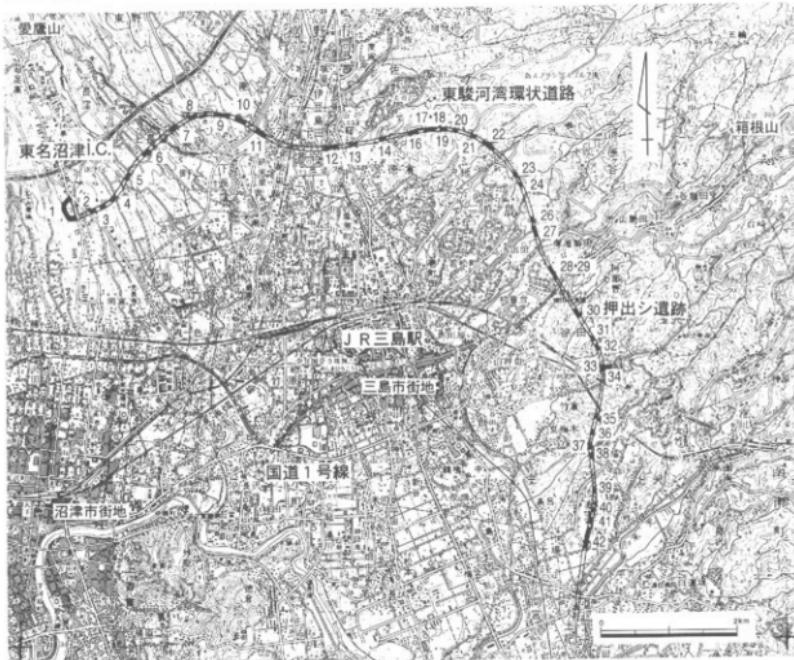
写真図版目次

図版1 押出シ遺跡遠景(北より)	1
図版2 1. 1区北半部全景(西より) 2. 1区南半部全景(西より)	6
図版3 1. SB-1 SD-1 全景(西より) 2. SB-1 遺物出土状況(西より) 3. SB-2 全景(西より)	13
図版4 1. SB-6 SL-7(西より) 2. SB-4 SU-2(北より) 3. SB-5 SU-31・32(北東より) 4. SB-6 SU-4(北西より) 5. SB-7 SU-35(南西より)	99

- | | | | |
|------|---|------|---|
| 図版5 | 1. SB-8・9・10全景（南より）
2. SB-10 SL-24（南より）
3. SB-8 SU-24（西より） | 図版15 | 1. SB-31・32・33（西より）
2. SL-11（南西より）
3. SL-16（東より）
4. SU-21（西より）
5. SU-28（北より） |
| 図版6 | 1. SB-11全景（西より）
2. SB-11 SL-20（東より）
3. SB-11 SL-20断面（北東より） | 図版16 | 1. SB-34 敷石検出状況（東より）
2. SB-34・35（南より）
3. SL-5 半裁状況（北東より）
4. SL-5（南より） |
| 図版7 | 1. SB-12・13全景（東より）
2. SB-12 SU-23（北より）
3. SB-12遺物出土状況（北より）
4. SB-13 SU-27（北より）
5. SB-12・13 SL-17（東より） | 図版17 | 1. SL-22（西より）
2. SL-19（西より）
3. SL-10 断面（西より）
4. SL-10（西より）
5. SL-3（西より）
6. SL-27（北より） |
| 図版8 | 1. SB-14・15全景（東より）
2. SB-14 SU-26（南西より）
3. SB-14 SU-23（北より）
4. SB-15 SL-25（南より）
5. SB-15 SL-18（北東より） | 図版18 | 1. SU-5（西より）
2. SU-10（東より）
3. SU-20（南より）
4. SU-3（南より）
5. SU-19（南より）
6. SU-34（北より）
7. SU-9（北東より）
8. SU-18（南より）
9. SU-22（南より） |
| 図版9 | 1. SB-12・13・14・15・16・17全景
（東より）
2. SB-16・17全景（東より）
3. SB-16 SL-21（西より）
4. SB-16・17 SU-7・8（南西より） | 図版19 | 1. SF-1（北東より）
2. SF-2（北西より）
3. SF-3（西より）
4. SF-4（南より）
5. SF-5（西より）
6. SF-6（南より） |
| 図版10 | 1. SB-18・19・20（西より）
2. SB-18・19・20（北東より）
3. SL-11（北西より）
4. SL-2（南より） | 図版20 | 1. F-4・5、G-4・5、H-4
ピット群（東より）
2. E-7・8、F-7・8 ピット群
（北西より） |
| 図版11 | 1. SB-18・19・20（左）と
SB-21・22（右）の重複（西より）
2. SB-21・22（北東より）
3. SL-1（南より）
4. SU-12（左）・13（右）（東より） | 図版21 | 1. E-7、F-7 ピット群
(北東より)
2. G-4 ピット群（北東より） |
| 図版12 | 1. SB-23（右）・24（左）（北より）
2. SU-17（東より）
3. SL-4（南東より）
4. SL-12（南より）
5. SB-25（南より） | 図版22 | 1. G-4 ピット群（北西より）
2. G-4 ピット群（北より） |
| 図版13 | 1. SB-26（南より）
2. SB-27・28（南より）
3. SU-15（南より）
4. SU-14（南より）
5. SU-16（北より）
6. SL-32（西より） | 図版23 | 1. SD-32 SN-12（西より）
2. SD-36 SN-16（西より）
3. 3区検出ピット（西より） |
| 図版14 | 1. SB-29・30（西より）
2. SL-14（東より）
3. SL-15（南より）
4. SU-1（南より） | | |

第Ⅰ章 調査に至る経緯

押出シ遺跡のある沼津・三島地域は静岡県東部地域の中心として発展してきた都市である。この地域には東西を結ぶ東名高速道路、国道1号線、国道246号線が通り、また伊豆半島へ向う国道136号線、国道414号線、伊豆中央道等が連結する交通集中地域である。渋滞解消のために道路の改良工事等の努力が続けられており、東駿河湾環状道路はこの一環として昭和62年（1987）に計画された。この道路は沼津市から沼津・三島市街地を大きく迂回して伊豆中央道に向かう総延長15km、片側2車線の広規格道路である。路線用地の買収は平成元年度（1989）より開始された。建設予定地内の愛鷹山麓・箱根西麓には、周知の遺跡があり、周辺にも縄文時代・旧石器時代を中心として数多くの遺跡が存在する。平成2年8月に三島市教育委員会が道路路線内における埋蔵文化財包蔵地の調査依頼を受け、30箇所を超える地点が包蔵地・可能性のある地としてあげられた。平成3年（1991）に静岡県教育委員会文化課・三島市教育委員会社会教育課・静岡県埋蔵文化財研究所の三者で、長泉町との境から国道1号線までの三島市内17箇所についての現地踏査を行い、協議を行なった。この結果、路線内の各地点については、周知の遺跡を含めて確認調査および本調査の必要があると判断された。これを受けて平成3年12月より確認調査、平成5年（1993）7月より本調査を開始した。以後、用地買収状況により、順次確認調査を行い、遺構・遺物の確認された地点においては本調査を行なっている。また、本調査終了後は記録類を整理して保管



第1図 東駿河湾環状道路予定路線

に努め、調査結果について報告書を作成し普及をはかっている。

押出シ遺跡は古くからその存在が知られ、踏査が幾度となく行なわれてきた遺跡である。昭和12年(1937)発行の『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』第12集には「押出し」の名が見え、戦前より知られる周知の遺跡であった。その大部分が東駿河湾環状道路の路線内にかかるため本調査を実施し、記録保存を行なうことが必要となつた。今回の調査は建設省中部建設局沼津工事事務所の委託を受け、指導機関静岡県教育委員会文化課、調査機関静岡県埋蔵文化財研究所の体制で実施された。平成8年4月よりテストピットとトレーニングによる遺跡範囲の確認調査を行ない、引き続き本調査を実施した。

第1表 東駿河湾環状道路線内遺跡及び調査状況

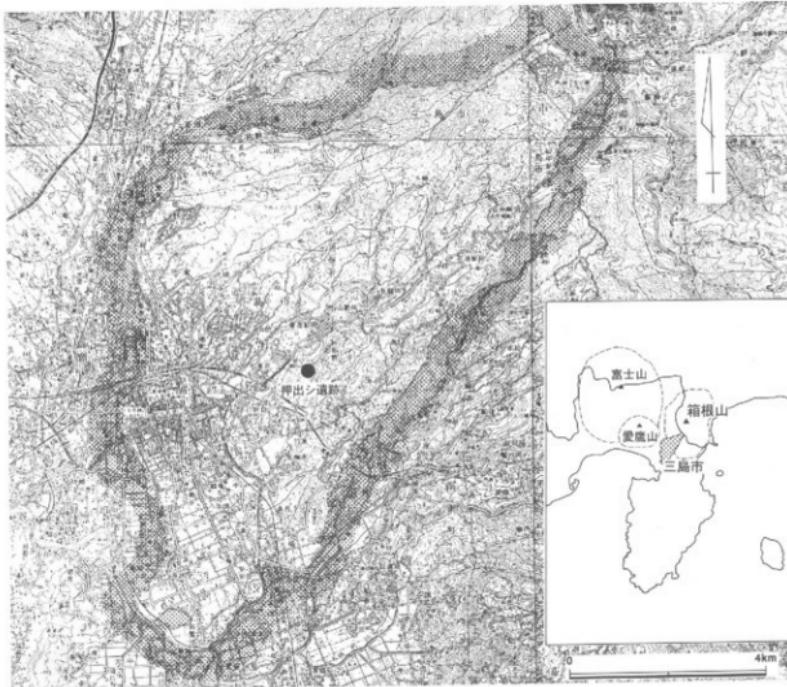
番号	各市町村整理番号	遺跡名	面積(m ²)	内 容	備 考	報告書
1	沼津市4	上松沢平	16,440	調査予定		
2	沼津市3	虎杖原1号墳	4,150	調査予定		
3	沼津市2		2,650	調査予定		
4	沼津市1	丸尾北	6,160	調査予定		
5	長泉町14	柏久保B	800	調査予定		
6	長泉町54	坂畠上	6,200	調査予定		
7	長泉町53	山岸A	4,400	遺跡なし	H9試掘調査	
8	長泉町42	木戸	4,800	遺跡なし	H9試掘調査	
9	長泉町37	池田B	5,812		H10本調査、H11調査予定	
10	長泉町38	鉄平	14,400		H10本調査	
11	長泉町48	大平	12,000	中・近世	H8本調査、H9整理	『大平遺跡』1998
12	三島市0		12,000		調査予定	
13	三島市1	萩B	2,000		調査予定	
14	三島市2	北ノ入A	1,440		H10本調査、整理	『北ノ入A遺跡』1999
15	三島市4	長平衡平	1,040	旧石器	H8本調査	『長平衡平遺跡』1998
17	三島市5	小池	5,310	旧石器～縄文	H9本調査、整理	『小池遺跡』1998
18	三島市6					
19	三島市7	徳倉B	2,370	旧石器～縄文	H8本調査、H9整理	『徳倉B遺跡』1998
20	三島市8	上ノ池	1,320	旧石器～縄文	H7-H8本調査、H9整理	『上ノ池遺跡』1998
21	三島市9					
22	三島市10	八田原	14,000	旧石器～縄文、中・近世	H7本調査、H8整理	『八田原遺跡』1997
23	三島市11	加茂ノ瀬B	1,000	旧石器～縄文	H6本調査、H7整理	『加茂ノ瀬B遺跡』1996
24	三島市12					
25	三島市13				市道につき調査対象外	
26	三島市14	五百司	1,140	集石	H5試掘調査	『焼場遺跡B地点・五百司遺跡』1996
27	三島市15	焼場	5,600	旧石器～縄文、中・近世	H4・6本調査、H5・6整理	『焼場遺跡A地点』1994 『焼場遺跡B地点・五百司遺跡』1996
28	三島市16	下原	14,375	旧石器～縄文	H5・9本調査	『下原遺跡I』1995
29	三島市17				H6・7・9整理	『下原遺跡II』1996 『下原遺跡III』1998
30	三島市18	押出シ	7,250	縄文中期集落	H8・9本調査、H9・10・11整理	『押出シ遺跡』1999
31	三島市19	生糸沢	6,750	旧石器～縄文	H9・10本調査、H10整理	『生糸沢遺跡』1999
32	三島市20	中峯	2,750	旧石器～縄文	H9本調査、整理	『中峯遺跡』1998
33	三島市21	檜林A	7,440	旧石器～近世	H8・9本調査、H9整理	『檜林A遺跡』1998
34	三島市22		1,870		H10試掘調査	
35	三島市23		1,190	遺跡なし	H9試掘調査	
36	三島市24	妙ヶ谷B山	4,310	遺跡なし	H9試掘調査	
37	三島市25		1,940	遺跡なし	H9試掘調査	
38	三島市26	田頭山	5,750		調査予定	
39	三島市27	大明神洞	5,000		調査予定	
40	三島市28	長命洞B	2,120		調査予定	
41	三島市29	大場向山	1,060		調査予定	
42	三島市30		19,845		調査予定	

第II章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

押出シ遺跡のある三島市は伊豆半島の入口、箱根へ通じる交通の要衝として発展してきた町である。古くからの宿場町が発展して現在の三島市街地の中心を形成している。これに周辺の村落が合併し、現在の三島市となり、沼津市とならんで静岡県東部の中核都市として発展している。

三島市の面積は、 62.19km^2 で71.6%を山地が占めている。市の東半分は箱根山が占め、芦ノ湖付近で神奈川県に接する。箱根山西麓は約5万年前に箱根山の楯状火山の形成に伴う多量の軽石流の流下により形成され、その後、富士山の火山灰が厚く堆積した。西半分は裾野市に接し、箱根山と愛鷹山の裾合谷にあたる。約14000年前に富士山より流下した三島溶岩流によって溶岩台地が形成され、その上に黄瀬川によって運ばれた土砂が堆積し、扇状地となっている。その縁辺部は湧水帯となっており、西隣の駿東郡清水町はその湧水量で全国に知られる。この扇状地縁辺の湧水や山地に源を発する河川と、伊豆半島に源を持つ狩野川が西の駿河湾に流れ込んで三角州を発達させ、市の南西部は低地となる。南は田方郡函南町に接し、伊豆半島へ通じる。このように三島市は南西に向かって開ける地形となっている。



第2図 三島市の地形と押出シ遺跡の位置

人口は約11万人で、西半分の台地上や、河川の自然堤防上などに住宅地が営まれている。また、東海道（現在の国道1号線・246号線）・下田街道（現在の国道136号線）など主要な街道の通っていた地区にも古くから集落が多い。近年、市街地周辺の箱根山麓の開発が進み、新興住宅地として人口が増加している。新幹線や東名高速道路の開通によって、首都圏に近い都市として今後も人口増加が見込まれている。

気候は年間の平均気温が15～16度と比較的温暖で、県内の他地域に比べると最高気温と最低気温の差が大きく、内陸性気候の傾向が見られる。降水量は年間平均1900mm程度である。風向きは年間を通じて東寄りと西寄りの方向が多い。

押出シ遺跡は、三島市の市街地より、東へ約6kmにある。眼下に三島市街地を見下ろし、西側に沼津市街地、さらに駿河湾を臨む箱根山西麓にあり、標高は約110mである。国道1号線のすぐ南側に枝状の尾根があり、押出シ遺跡はこの尾根の一つに存在する。尾根の東側は箱根山より延びており、押出シ遺跡の手前でやや低くなる。そして再びやや高まり、独立丘陵状を呈する。この頂部の平坦面が押出シ遺跡の集落域であったと推定されている。周囲を浅い谷が巡り、西に開ける地域であるため、1年を通じて西からの風が比較的強く吹くことが多い。大きな河川は近くには存在しないが、谷部分に沢の跡が見られ、周辺の字名に「一の滝」「滝の上」等があり、大正頃までは、滝が存在したことが記録に残る。

押出シ遺跡の東側には阿倍野という小集落があり、以前は畑作が盛んであったが、近年では養豚業が盛んとなっている。周辺も豚舎建築のため昭和50年代頃より急速に開発されている。阿倍野から箱根山麓を通って、南の竹倉という村落へ至る狭い農道があり、押出シ遺跡はこの道から西へ分岐して尾根に登る道を上がる。周辺は雑木林や畠地となっている。

第2節 歴史的環境

（1）押出シ遺跡周辺の遺跡

箱根西麓は、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が多く、押出シ遺跡周辺にも第4図に示したように多数の遺跡が存在する。遺跡は、ほとんどが緩やかな尾根上に立地し、間に浅い谷を挟む。

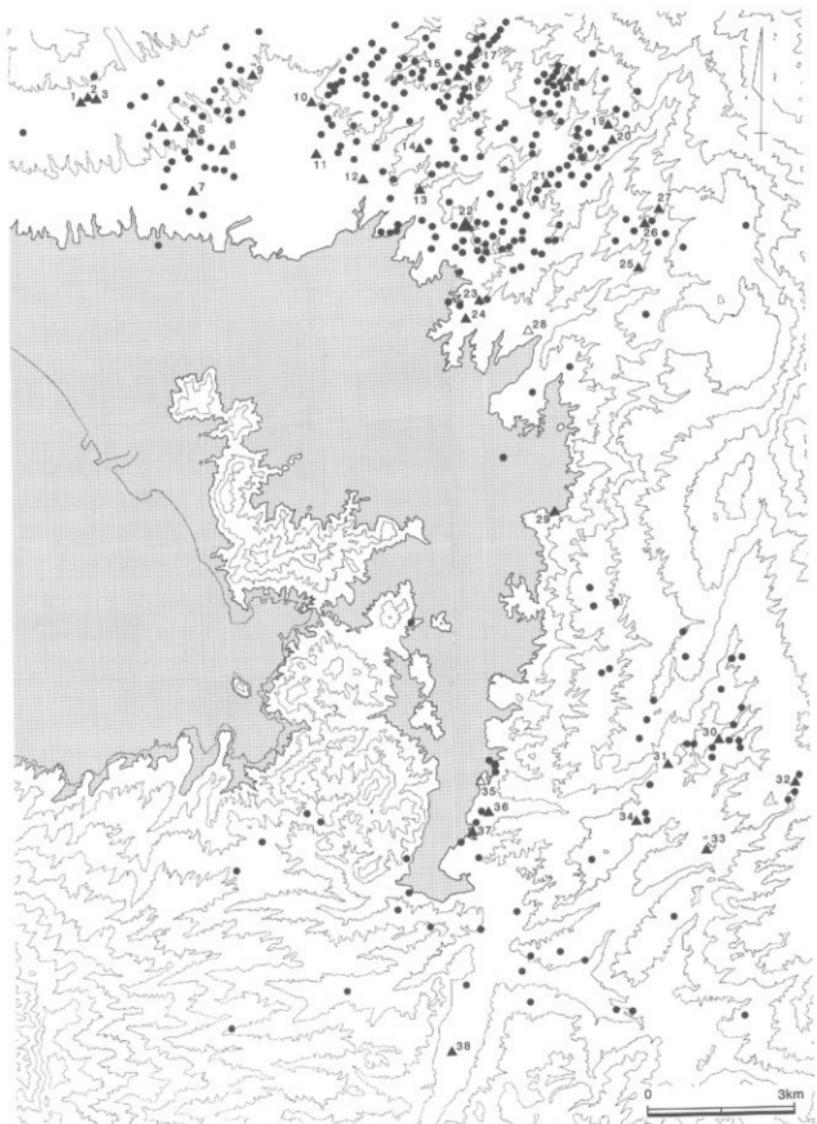
押出シ遺跡の西の谷を挟んで向い側には押出シA遺跡があり、縄文時代中期から後期の土器が採取されている。また、南から東の尾根にかけて奥山I・奥山H・奥山K遺跡があり、縄文中期の土器が採取されている。また、さらに南側の奥山M遺跡からは縄文前期から後期の土器が採取され、生茨沢遺跡からも縄文土器が採取されている。これらは押出シ遺跡からごく近い距離にあり、通行も容易であることから、縄文中期において押出シ遺跡との関連性が考えられる遺跡群である。発掘調査の行われていない遺跡がほとんどであるため、遺跡の内容について詳細が明らかとなっていない。

このほか、昭和40年代の小野真一氏による踏査によれば、東側の阿倍野集落周辺において押型文の土器が採取されている。

地元住民の話によると、押出シ遺跡と生茨沢遺跡の間の低い尾根には、かつて古墳があったが、土採りによって削平されたとのことである。また、生茨沢遺跡の北西部にも7基の古墳が存在したと伝えられ、開墾と土採りによって削平されたとのことである。平成10年に当研究所の調査により、この内1基が確認されている。

（2）縄文時代中期の様相

愛鷹山山麓から箱根山西麓は、静岡県内において旧石器時代～縄文時代の遺跡が多いことで知られる地域である。第3図は縄文時代中期の遺物が発見された遺跡に限定して取り上げてみたが、その数は200



第3図 縄文中期の遺跡分布図（現在の標高30mを海岸線として作成）

第2表 繩文時代中期住居跡・検出遺跡

No.	遺跡名	所 在 地	住居跡数	年 代 期	文 献 等
	大芝原遺跡	沼津市鳥谷	1	縄文中期後半	沼津市誌下(1958)
	大鄭遺跡	沼津市柳沢	2	縄文中期	沼津市誌下(1958) 歴史科学20(1970)
1	中見代II遺跡	沼津市足高尾上	1	縄文中期前半	土手上・中見代Ⅱ・第Ⅲ遺跡発掘調査報告書(1988) 静岡県史資料編1(1990)
2	広合遺跡	沼津市足高尾上	3	縄文中期中葉	広合遺跡b・c・d区・広合南遺跡発掘調査報告書(1990) 広合遺跡c区・ニツ洞遺跡a区発掘報告書(1991)
3	ニツ洞遺跡	沼津市足高尾上	1	縄文中期中葉	広合遺跡c区・ニツ洞遺跡a区発掘報告書(1991)
4	中峰遺跡	駿東郡長泉町上長峰	24	縄文中期後半	上長峰遺跡群報告書(1971) 静岡県史資料編1(1990)
5	桜畠上遺跡	駿東郡長泉町上長峰	1	縄文中期	上長峰遺跡群報告書(1971)
6	板畑下遺跡	駿東郡長泉町上長峰	2	縄文中期	上長峰遺跡群報告書(1971)
7	大谷津遺跡	沼津市岡一色	1	縄文中期後半	沼津市文化財発掘調査報告書第27集(1982) 沼津市文化財発掘調査報告書第50号(1989)
8	西願寺遺跡	駿東郡長泉町南一色	1	縄文中期前半	西願寺遺跡B地区(1975) 西願寺遺跡A地区・長保城址二の丸(1978) 静岡県史資料編1(1990)
9	上山地B遺跡	駿東郡長泉町南一色	27	縄文中期前半	上山地遺跡(1988) 静岡県史資料編1(1990)
10	中林山遺跡	三島市佐野中林山	1	縄文中期初頭	昭和55年調査
11	反畑遺跡	三島市反畑	2	縄文中期後半	三島市反畑遺跡発掘調査概報(1975)
12	千枚原遺跡	三島市一丁田	8	縄文中期～後期	三島市誌上(1958) 三島市千枚原遺跡(1967) 東洋古代文化総覧(1948) 貝塚78(1958) 日本大学考古学通説(1963) 静岡県史資料編1(1990)
13	十石洞遺跡	三島市川原ヶ谷十石洞	1	縄文中期後半	十石洞遺跡(1990)
14	加茂・向山遺跡	三島市加茂	1	縄文中期	三島市埋蔵文化財発掘調査報告書(1992)
15	ソノエンサレB遺跡	三島市佐野片平山	2	縄文中期後半	三島スプリングスC、Cゴルフ場内埋蔵文化財調査報告書I(1990)
16	中村C遺跡	三島市佐野片平山	3	縄文中期前半	三島スプリングスC、Cゴルフ場内埋蔵文化財調査報告書II(1992)
17	徳倉片平山B遺跡	三島市佐野片平山	4	縄文中期前半～後半	三島スプリングスC、Cゴルフ場内埋蔵文化財調査報告書III(1992)
18	觀音洞B遺跡	三島市五輪觀音洞	5	縄文中期後半	五輪・觀音洞・元山中・陸岡遺跡II(1994)
19	橋道遺跡	三島市大字原新田	2	縄文中期後半	昭和56年調査
20	天台B遺跡	三島市谷田台崎	2	縄文中期中葉	三島市文化財年報第6号(1994)
21	笠原後F(奥山)遺跡	三島市谷田台崎	4	縄文中期	一般道1号三ツ谷バイパス理藏文化財発掘調査報告書(1983) 三島市埋蔵文化財発掘調査報告書IV(1994)
22	押出シ遺跡	三島市谷田押出シ	35	縄文時代中期後葉	本書
23	猪追面遺跡	三島市谷田山間猪追面	2	縄文中期後半	夏木木遺跡群発掘調査概報(1991)
24	源平山遺跡	三島市夏梅木	7	縄文中期前半～後半	夏梅木遺跡群発掘調査概報(1991)
25	上黒岩遺跡	田方郡函南町桑原上黒岩	1	縄文中期	函南スプリングスゴルフ場用地内理藏文化財発掘調査報告書I(1989)
26	柳沢D遺跡	田方郡函南町桑原柳沢	1	縄文中期前半	函南スプリングスゴルフ場用地内理藏文化財発掘調査報告書I(1989)
27	柳沢B遺跡	田方郡函南町桑原柳沢	6	縄文中期	函南スプリングスゴルフ場用地内理藏文化財発掘調査報告書I(1989)
28	下人原遺跡	田方郡函南町上沢下人原		縄文中期	中郡の大集落と推定されている
29	神崎遺跡	田方郡垂山町奈古谷	2	縄文中期後半	田方郡垂山町神崎遺跡緊急調査概報(1972)
30	上ノ田遺跡	田方郡大仁町田原野	3	縄文中期中葉	上ノ田遺跡発掘調査報告書(1984)
31	茅野B遺跡	田方郡大仁町浮橋	7	縄文中期後半	茅野B遺跡発掘調査報告書(1979)
32	大平C遺跡	田方郡大仁町長者ヶ原	2	縄文中期中葉	長者ヶ原大平遺跡群発掘調査概報(1980) 長者ヶ原大平遺跡群第2次調査概報(1986) 長者原大平遺跡群発掘調査報告書(1993) 静岡県史資料編1(1990)
33	入谷平遺跡	田方郡修善寺町年川	11	縄文中期前半～後半	修善寺町入谷平遺跡緊急調査概要(1969) 静岡県史資料編1(1990)
34	出口遺跡	田方郡修善寺町大野	16	縄文中期後半	伊豆修善寺町出口遺跡(1964) 静岡県史資料編1(1990)
35	公藏免(段)	田方郡大仁町田京		縄文中期	昭和51年・52年調査。調査部分は土器捨て場に当たる。中期の大集落と推定されている。
36	仲道A遺跡	田方郡大仁町三福	11	縄文中期中葉～後半	仲道A遺跡(1986) 静岡県史資料編1(1990)
37	向原遺跡	田方郡大仁町三福	3	縄文中期前半～中葉	三福向原(1971) 静岡県史資料編1(1990)
38	大塚遺跡	田方郡修善寺町大平	19	縄文中期～後期	修善寺町の古代文化(1962) 修善寺大塚(1982) 静岡県史資料編1(1990)

箇所を超えて、この他にも未発見の遺跡がまだ存在するであろうと思われる。

縄文時代の遺跡は、概ね箱根西麓の標高20m～450mに分布している。ほぼ全域にわたっての分布が見られるが、尾根上の日当たりの良い南向きの緩斜面に集中する傾向がある。

縄文中期海進時の海岸線は、土地の隆起のため、三島市周辺では標高30mにあたるとされている。これを復原したのが第3図であるが、これをみると海が愛鷹山～箱根山の麓まで迫り、現在の狩野川沿いに大きく内陸部まで入り込み大きな湾を形成する。海の傍まで山が迫り、入り組んだ地形は現在の伊豆半島の海岸線を思わせるが、湾の入口を香貫山と鷲頭山で塞がれているため、浅く波静かな海であったと考えられる。押出シ遺跡は、海進期には海まで300m余りの距離にあり、海辺へ至るには容易であったと思われる。

しかし、箱根西麓の遺跡分布は縄文時代前期～後期にかけて、海進・海退に伴って集落が移動したという様子は見られない。縄文時代前期に比べて中期の遺跡数は非常に多く、後期になると遺跡数は激減する。

縄文時代中期の住居跡を検出した遺跡と大規模な集落跡と推定される遺跡を第2表に示した。愛鷹山・箱根山山麓では、集落が現在の標高100mから250mの間に分布し、縄文時代中期の遺跡分布とほぼ重なっている。住居跡が検出された遺跡は1.3～2kmの間隔をおいて分布する。多くの住居跡が検出され、拠点的集落と考えられる遺跡は3～4kmの間隔をおいて分布する。大仁町周辺では低地と山間部に集落の分布が別れる傾向が見られる。

(3) 箱根山の開墾

江戸時代、箱根山は東海道が通り、江戸防衛の要衝として箱根関所が置かれ、厳しく旅人の取締りがなされ、一帯が天領として支配されていた。押出シ遺跡周辺の大字谷田と呼ばれる地区一帯は、伊豆国君沢郡の谷田村となっていた。谷田村は江戸初期には天領で、天明年間に幕府領と旗本6家の相給とされ、寛政から天保年間には幕府と旗本7家の相給、幕末には沼津藩と旗本6家の相給と支配が移り変わった。

三島宿の『鈴木家文書』の『矢田郷御郷打水帳』によれば、箱根山一帯はほとんどが天領で、雜木や茅等の繁る山林であった。三島・沼津周辺の村々は、三島代官所へ山手役として米7升を納め、株札(箱根山籠札)の下付を受けて入山し、薪炭・茅(屋根葺材)・株(肥料や飼料となる野草)などを採取していた。元禄年間以降、一部が大名領や旗本知行地となつたが、山手役は三島宿役人が取りまとめ上納していた。宝暦9年(1769)三島代官所が廃止され、並山代官所へ移転した際に、三島宿の2名を山守役に任命し、山中の密行者の監視にあらせた。登山者は株札の携帯の義務があり、携帯していない場合は密行者と見なされた。

また、押出シ遺跡の東側にある阿倍野という小集落は、山番のために麓の谷田村より人を移住させた集落であることが『豆州志稿』に見える。阿倍野新田と名付けられているが、V字谷の地形では水田を作る場所は少なく、阿倍野では畑作が中心であったと思われる。

明治に入り、明治6年の地租改正により、天領は官地編入と決まったが、三島・沼津の村々は入会地として入会者によって管理されて来た経緯から入会権を訴え、明治19年によく権利が認められ民有地となった。所有権についても明治20年に村々の間で示談が成立し、入会権が確定した。村々は箱根山管理組合を作り、明治22年組合から個人に対して土地を貸し付けるという形で土地が分割された。江戸時代より一部の土地は畠となっていたが、これ以降、広い範囲で開墾が進められた。昭和13年に三島に野戦重砲兵連隊が置かれた際には、軍馬数百頭の飼葉を箱根山から供給したと伝えられ、草木の茂る株場もまだ多く存在したことがわかる。しかし、一方で太平洋戦争に伴う食料確保のため山地の開墾が進



第4図 押出シ遺跡周辺遺跡分布図

第3表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	山神社横穴群	古墳後期	9	押出シA遺跡	縄文中期・後期
2	下原遺跡	旧石器、縄文早期～中期	10	押出シ遺跡	縄文中期
3	塙原南原遺跡	縄文～古墳	11	奥山I遺跡	縄文中期
4	塙原初音原遺跡	旧石器	12	奥山H遺跡	縄文中期
5	初音ヶ原A遺跡	旧石器、縄文早期～後期	13	奥山M遺跡	縄文前期～後期
6	初音ヶ原B遺跡	旧石器、縄文早期～中期	14	奥山K遺跡	縄文中期
7	船久保遺跡	旧石器、縄文早期	15	生茨沢遺跡	旧石器・縄文中期
8	枝洞山遺跡	旧石器、縄文早期	16	生茨沢古墳群	古墳後期

められていた。

昭和21年、農地法定の制定により、貸し付けられていた土地は、すべて耕作者に売り渡され、箱根山管理組合は、昭和27年に解散した。昭和38年に農地開放により政府が買い上げた農地に対して、旧地主に保証金が支給され、この保証金と三島市の援助を受けて開墾地を通る農道のコンクリート舗装整備が行われた。近年は農業の機械化と農業経営の転換により、箱根山麓の農地は減少しつつあり、植林や原野化が目立つようになっている。

このような経緯から押出シ遺跡周辺は、明治22年以降に開削を受けたと考えられる。調査区西側の谷は斜面を切り盛りして段状の畑となっているが、このような状況は箱根山麓では、現在も多く見られる。

〈参考文献〉

- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 『下原遺跡Ⅰ』 1995
静岡県埋蔵文化財調査研究所 『焼場遺跡（A地点）』 1994
静岡県埋蔵文化財調査研究所 『八田原遺跡』 1997
静岡県埋蔵文化財調査研究所 『加茂ノ洞B遺跡』 1996
三島市 『新三島市総合計画 第2期基本計画』 1993
錦田郷土研究会 『谷田山沿革誌』 1994
三島市 『三島市誌 増補（資料編II）』 1992
三島市 『三島市誌 上巻』 1958
三島市 『三島市誌 下巻』 1959
三島市教育委員会 『三島市遺跡地図・地名表』 1988
土屋寿山・福木久男 『ふるさと三島 歴史と人情の町』 1989
小野真一 「静岡県の縄文文化について」『地方史静岡』創刊号 1971
辻 真澄 『沼津・三島・清水町 町名の由来』 1992

第III章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

現地調査に先立ち、調査区相互の位置関係を明示するため、10m×10mの方眼グリッドを設定した。グリッド基軸線は、国土平面直角座標系VII系を用い、X = -97170.000、Y = 40809.000をA-1とし、南から北へ1・2・3…の数字、西から東へA・B・C…のアルファベットを付した。後に用地買収が進み、調査区が拡張されたため、Aの西側の列は、A'’とし、1の南の列をイとして南に向かってイ・ロ・ハ・ニとカタカナで付した。(第5図参照)この組み合わせにより、グリッドの南西隅の点をもってグリッドを呼称した。

重機は、排土の積込み・搬出入と埋戻し及び整地、一部の伐採、掘削等に用いた。調査区内の土砂の運搬には、ベルトコンベアを用いた。

遺構・遺物の検出状況は、平面実測と写真撮影により記録を行った。遺構実測図は、縮尺1/20を基本とし、必要に応じて、縮尺1/10の図面を作成した。写真撮影は、6×7判(白黒)、35mm(カラーネガ・カラースライド・白黒)の組み合わせで記録を行い、遺構写真等は、適宜ローリングタワーを使用して撮影した。また、遺構出土地区の全景と調査区全景の写真は、ラジコンヘリを用いた空中写真撮影を実施した。

遺物の取り上げについては、1区は、遺構単位で行い、土器・石器・礫に分けて遺物台帳に登録した。2～4区については、土器は、グリッド毎に一括して、石器は、1点ずつ遺物番号を付して取り上げた。遺物の取り上げ、地形測量には、トータルステーションを用いた。

現地調査と並行して、三島整理事務所において、遺物の洗浄を実施した。洗浄後、土器は、出土グリッド毎に、石器は、取り上げ番号順にコンテナに入れ、仮収納した。また、遺構とその周辺、覆土中より出土した遺物は、遺構毎にコンテナに分けて仮収納した。

調査で実施した自然科学分析は、脂肪酸分析、炭素14年代測定分析、樹種同定分析であり、それぞれパリノ・サーヴェイ株式会社に分析を委託した。脂肪酸分析は、1区の住居跡SB-29より検出された埋甕SU-1の土器の内部の土を、炭素14年代測定分析と樹種同定分析は、同1区の住居跡SB-8内より検出された炭化材を試料として行った。自然科学分析の結果については、付編第1・2節を参照されたい。

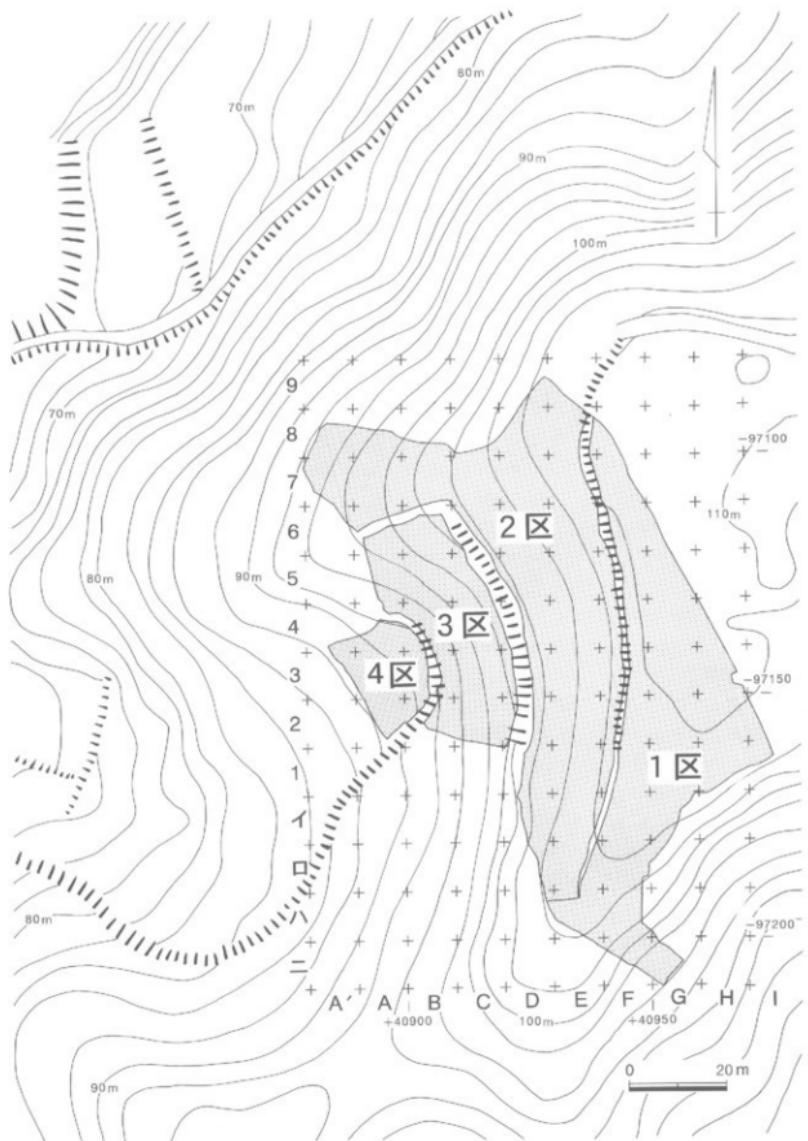
第2節 調査の経過

(1) 現地調査

押出シ遺跡は、戦前からの周知の遺跡(付編第3節参照)であり、現地踏査の段階で、繩文土器が多く表面採取された。このため、東駿河湾環状道路建設予定地内の調査が必要であるとの判断がなされた。また、東南部・南西部・北西部の地形が丘陵部から谷部へと急激に落ち込んでいる箇所については、用地内であるものの、調査対象区域から外した。

今回調査対象となった区域は、もともと、昭和50年代まで耕作地として利用されていた場所で、U字形に落ち込む谷の傾斜面を掘削して開墾された畑であった。畑は、斜面を切り盛りして階段状にに作られ、これが用地境ともなっていた。このため、地形に沿って、尾根の上を1区、そこから一段下がった畑地を2区、2区より一段下がった部分を3区、さらに一段下がった部分を4区と呼称した。

調査は、本調査に先立って、確認調査から開始された。調査区内の樹木等の伐採を行った後、土層堆



第5図 押出シ遺跡グリッド配置図

積の確認のため、1区G-2グリッドと2区E-5グリッドに2m×2mのテストピットを設定した。1区のテストピットでは、地表下40cmまで攪乱が及び、表土の直下には、ペアスコリアが検出され、中部ローム層が堆積していることが判明した。表土には、遺物が含まれていた。2区のテストピットでは、地表面下50cmまで攪乱が及び、三島バミス等が検出され、表土直下は、中部ローム層が堆積していた。遺物は、ほとんど出土しなかった。このため、もう1箇所、E-5グリッドより北西寄りの2区D-7グリッドにテストピットを設定した。このテストピットからは、縄文土器が多く出土する暗褐色を呈する遺物包含層の堆積が確認された。

3・4区は、B-5グリッドとB-2グリッドに2m×2mのテストピットを設定し、それぞれ、表土直下に遺物包含層の堆積が確認された。

1区の本調査は、テストピットの確認調査から遺構や上部ローム層の堆積が確認されなかつたので、3・4区の確認調査と並行しつつ、そのまま表土内の遺物取り上げを目的として、南側より掘削を開始した。しかし、H-1グリッドの中部ローム層上面で焼土粒の集中、埋甕、ピットが検出されたので、作業内容をトレンチ調査に切り替え、G列の西側に幅1mのトレンチを南北方向に設定した。この結果、中部ローム層上面に石囲い炉や焼土粒の集中が検出されたため、平坦な地形の1区には、住居跡が多数存在する可能性が認められ、1区全面について、調査が必要であると判断された。

また、谷部の堆積状況を調査するため、1区から2区にかけて4列の南側に幅1mのトレンチを東西方向に設定した。この結果、2区の東側の表土直下は、中部ローム層が堆積するものの、谷を下る西側には、遺物包含層が堆積することが確認された。2区の北側は、西へ小尾根状に張り出し、その中央に東西方向にトレンチを設定したが、表土直下は、中部ローム層が堆積し、遺物は、表土から出土するのみであった。引き続き2区は、本調査に備え、表土除去を行った。

平成8年9月に1区の南側と2区の西側で用地買収が進み、調査範囲が拡張された。このため、1区では、拡張された部分について速やかに樹木の伐採を行い、G列西脇のトレンチを南側へ延長し、遺構の有無の確認を行った。

調査の本格化による排土置場の確保のため、一番下段にある4区の調査を2・3区に先んじて行った。狭い斜面地で重機の進入路が確保できないため、掘削は、全て人力で行った。排土処理の関係上、南北に二分し、片方ずつ調査を行った。表土除去後、遺物包含層を精査し、遺物の取り上げを行い、4区は、平成9年1月に調査を終了した。

一方、2・3区においては、それぞれ南北方向にトレンチを入れ、遺物包含層の分布範囲の確認を行った。2区から3区にかけて広い範囲で分布が確認された。これより、2区の中央部と3区全面において、調査の必要があると判断された。本調査は、遺物の取り上げを中心に実施し、2区は、平成9年4月に、3区は、平成9年9月に終了した。

1区は、平成8年度後半より、本格的な遺構の検出作業を進めた。この結果、1区のほぼ全面に渡りピットをはじめとする多数の遺構が検出され、住居跡は、二桁に上ることが予想された。平成9年4月より、個々の住居跡の調査に入り、9月まで精査・図化等の作業を行った。10月初旬に重機により埋戻し・整地を行い、現地調査を終了した。

(2) 整理作業

現地の土層の残存状況が劣悪で、遺構の検出が困難であったこと、住居跡の重複・建て替え等が多く見られることから、住居跡とこれに伴う諸施設を検討する必要があった。このため、炉・埋甕・壁溝が検出された残存状況の比較的良好な住居プランの幾つかを透明なOHPシートに写し取り、これを現地で作成した平面図に当て、施設の配置位置の妥当性を検討した。また、この作業と並行して、同等の底面

第4表 押出シ遺跡調査工程表

平成8年度

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1区 伐採			テストピット調査・トレシ調査					トレシ調査				
			表土除去	精査			伐採	表土除去	拡張区精査		精査	
2区			テストピット調査・トレシ調査								包含層掘削・遺物取上げ	
			表土除去		表土除去							
3区			テストピット調査		トレシ調査					トレシ調査		
										表土除去		
4区			テストピット掘削		トレシ掘削					包含層掘削・遺物取上げ 埋戻し		

平成9年度

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
1区	精査		遺構査定・固化				埋戻し
2区			包含層掘削・遺物取上げ				
3区	表土除去	包含層掘削・遺物取上げ					

の標高値を持つピットが住居の柱穴として機能する位置に存しないかを確認した。これにより、平面、立面共に位置的に矛盾しないことを確認しつつ、住居プランを確定し、遺構の切り合いや残存状況から新旧関係を割り出した。また、住居跡の年代観を得るために、埋甕に使用されていた土器の復原を行った。

洗浄の終了した土器の注記には、パソコン制御による機械（インク・ジェットマーカー）を使用した。石器や色調の暗い土器については、手書きでポスターカラーのホワイトによる注記をおこなった。

土器の復原は、前述のように1区で検出された埋甕から開始し、終了後、残存状態の良好なもののみの復原を順次おこなった。

復原した土器は、実測用のスリット写真を撮影し、外形と断面を手取りで実測した後、写真をもとに文様を写した。



遺構の検討



インクジェットマーカーによる注記作業



埋甕の復原作業



縄文土器の写真実測

第3節 土層

(1) 箱根西麓ローム

箱根西麓の土層は、古期富士火山を主な供給源とする火山灰が厚く堆積している。この土層は、「箱根西麓ローム」と呼ばれ、供給源の似る愛鷹山麓に見られる「愛鷹ローム層」と対比されている。重鉱物組成などにより、上から腐植質火山灰層、上部(U1)ローム、中部(U2)ローム、下部(M+L)ロームに分けられている。

腐植質火山灰層は、縄文時代から現代までの層で、表土直下には、「黒ボク土」と呼ばれる伊豆北部に広い範囲で分布する中世の包含層が見られ、縄文時代の遺物包含層である栗色土層(KU)・富士黒層(FB)などが見られる。天城山のカワゴ平バミス(約3000年前)や、鬼界カルデラのアカホヤ火山灰(約6300年前)が鍵層として検出される。

上部ロームは、旧石器時代の遺構・遺物が検出され、関東ロームの立川ロームに相当する。上部の褐色土を「休場(YL)層」と呼びし、以下は、スコリアの密集帯(SC)と腐植質の黒色帶(BB)の互層となる。始良丹沢火山灰(AT)が上部ロームのほぼ中央にある「ニセ・ローム(NL)層」と呼ばれる黄褐色土に含まれる。愛鷹ローム層に比べ、箱根西麓は、供給源の富士山から少し離れるため、スコリア層が部分的に検出されない場合もある。

中部ローム層は、赤味を帯びた褐色の層で、関東ロームの武蔵野ロームに相当する。上部にペア・スコリアと呼ばれる固いスコリア層が2、3枚あり、中央部に三島バミス(約3万年前、関東ローム層のCCP-4)と呼ばれる層が検出される。また、下部には、箱根新期軽石流(約5万年前)が数回に渡って、流下し、厚い層を形成している。

下部ロームは、紫灰色の粘土化の進んだローム層で、関東ローム層の多摩ロームの上部に相当する。下部には、箱根火山噴出物を含んでいる。

(2) 押出シ遺跡の土層堆積

押出シ遺跡の土層堆積の概念図を第7図に示す。丘陵頂部の表土下は、直接中部ローム層の上面に当たり、腐植質火山灰層、上部ロームの堆積は、ほとんど確認されなかった。耕作等による擾乱や西側谷部への流出で失われたものと見られる。西側は早くとも中部ローム堆積後に開析を受け、谷地形が作られたと見られる。この谷斜面部に縄文時代中期の遺物包含層が堆積するが、これは、上からの流れ込みと見られ、3・4区でこの下に堆積する暗褐・褐色の無遺物層もまた、上部ロームの流れ込みと推定される。

(3) 各調査区の堆積状況

谷部の土層は、場所毎に少しづつ、色調、土相を変えて堆積しており、各々の調査区間で同一の土層と特定させる要素が著しく乏しかったので、各調査区毎に土層番号を設定して説明を行う。尚、第8図押出シ遺跡土層図でスクリーントーンの掛る土層は、遺物包含層である。

1区の堆積

表土は、畑の耕作土であり、黒褐色を呈するが、基本的には、中部ローム層が腐植により、暗い色調となっていると考えられる。その下は、褐色の層で、赤色スコリアを含み、2~3枚の硬い赤褐色のスコリア層(ペアスコリア)と互層になっている。遺構は、このペアスコリアを掘り込んで作られている。さらに下部の地表面下約2.5mには、橙色の三島バミスが検出される。

第1層 表土

第2～10層 赤褐色のスコリアを多量に含むローム層とスコリア集積層の互層。

2・4・6・9層 赤褐色土層

赤褐色スコリア層（ペアスコリア）の集積層。粘性無し、しまり強い。

3・5・7・10層 褐色土層

多量の径2～3mm程度の赤褐色スコリアを含む。第7層中に一部集中して第8層が検出される。第10層において、下層からの巻き上げと見られる橙色バミスを検出する。粘性弱い、しまり有り。

第11層 橙色土層

橙色バミス（三島バミス）の集積層。粘性無し、しまり強い。

第12層 褐色土層

橙色バミスと赤褐色スコリアを含む。粘性有り、しまり有り。

第13層 暗赤褐色土層

赤褐色スコリア層の集積層。径2mm程度の白色バミスを含む。粘性無し、しまり強い。

第14層 褐色土層

橙色バミス、径1～2mm程度の赤褐色スコリア、黒色鉱物を含む。粘性有り、しまり強い。

第15層 褐色土層

径1～2mm程度の赤褐色スコリア、黒色鉱物、白色バミスを含む。粘性弱い、しまり強い。

第16層 箱根新期軽石流層上面

2区の堆積

東半部は、1区と同様に表土下に中部ローム層が検出される。西半部は、上から流れ込むような形で、土層の堆積が見られる。表土下に縄文時代中期の土器が多量に出土する遺物包含層があり、色調、含有物の大きさ、土相などの差異により、4層に分けられる。その下は、橙色・青灰色スコリアを含む褐色土層があり、特に下部は、箱根新期軽石流から巻き上がったと見られる多量の青灰色スコリアを含む。

第1層 表土

第2層 褐色土層

遺物包含層。径2～3mm程度の橙色スコリアを含み、炭化物を検出する。粘性無し、しまり弱い。

第3層 暗褐色土層

遺物包含層。径2～3mm程度の橙色スコリア、径1mm程度の白色粒子を含む。粘性無し、しまり無し。

第4層 褐色土層

遺物包含層。土相は、第2層に準ず。炭化物は、第2層に比べ、若干大形（10mm程度）のものが検出される。

第5層 暗褐色土層

遺物包含層。少量の径2～3mm程度の黄褐色スコリアを含む。粘性無し、しまり有り。

第6層 褐色土層

径2～3mm程度の橙色スコリア、極少量の径2～3mm程度の青灰色スコリアを含む。粘性有り、しまり有り。

第7層 褐色土層

第6層と箱根新期軽石流との間層。多量の径2~20mm程度の黄色・青灰色スコリア、上部で、少量の径1~2mm程度の橙色スコリアを含む。包含物は、全体的に下層からの巻き上がりと考えられる。粘性有り、しまり有り。

3区の堆積

表土下に縄文時代中期の遺物包含層があるが、2区に比べ色調が暗い。微妙な色調の差異によって2層に分けられる。

第1層 表土

第2層 暗褐色土層

少量の径2~3mm程度の橙色スコリアを含み、炭化物を検出する。粘性無し、しまり弱い。

第3層 暗褐色土層

遺物包含層。土相は、第2層に準ず。

第4層 暗褐色土層

遺物包含層。土相は、第2層に準ず。第3層に比べ、ほんのわずかながら色調が暗い。

第5層 暗褐色土層

径2~3mm程度の橙色スコリア、極少量の黒色粒子を含む。粘性弱い、しまり弱い。

第6層 にぶい黄褐色土層

多量の黄色スコリアを含む。粘性無し、しまり有り。

4区の堆積

4区の遺物包含層は、2・3区に比べ、固くしまり、色調が明るく、土相がまったく異なる印象を受ける。

第1層 表土

第2層 にぶい黄褐色土層

遺物包含層。径1~2mm程度の橙色スコリア、黒色粒子、少量の灰白色スコリアを含む。

粘性有り、しまり有り。

第3層 暗褐色土層

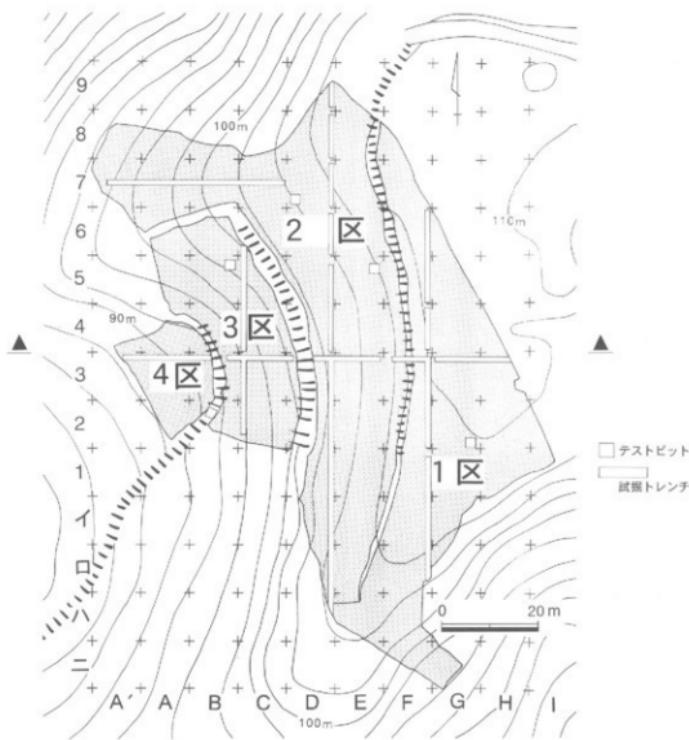
径2~5mm程度の灰白・黄白色スコリア、径1~2mm程度の橙色スコリア、黒色粒子、径8~10mm程度の軽石粒を含む。粘性強い、しまり有り。

第4層 褐色土層

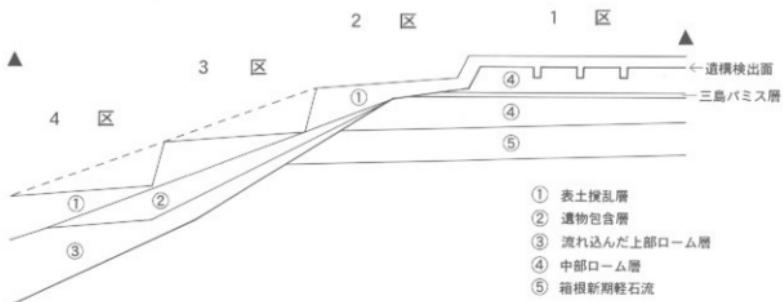
径2~20mm程度の黄白色スコリア、径1~2mm程度の灰白色粒子を含む。粘性有り、しまり有り。

第5層 褐色土層

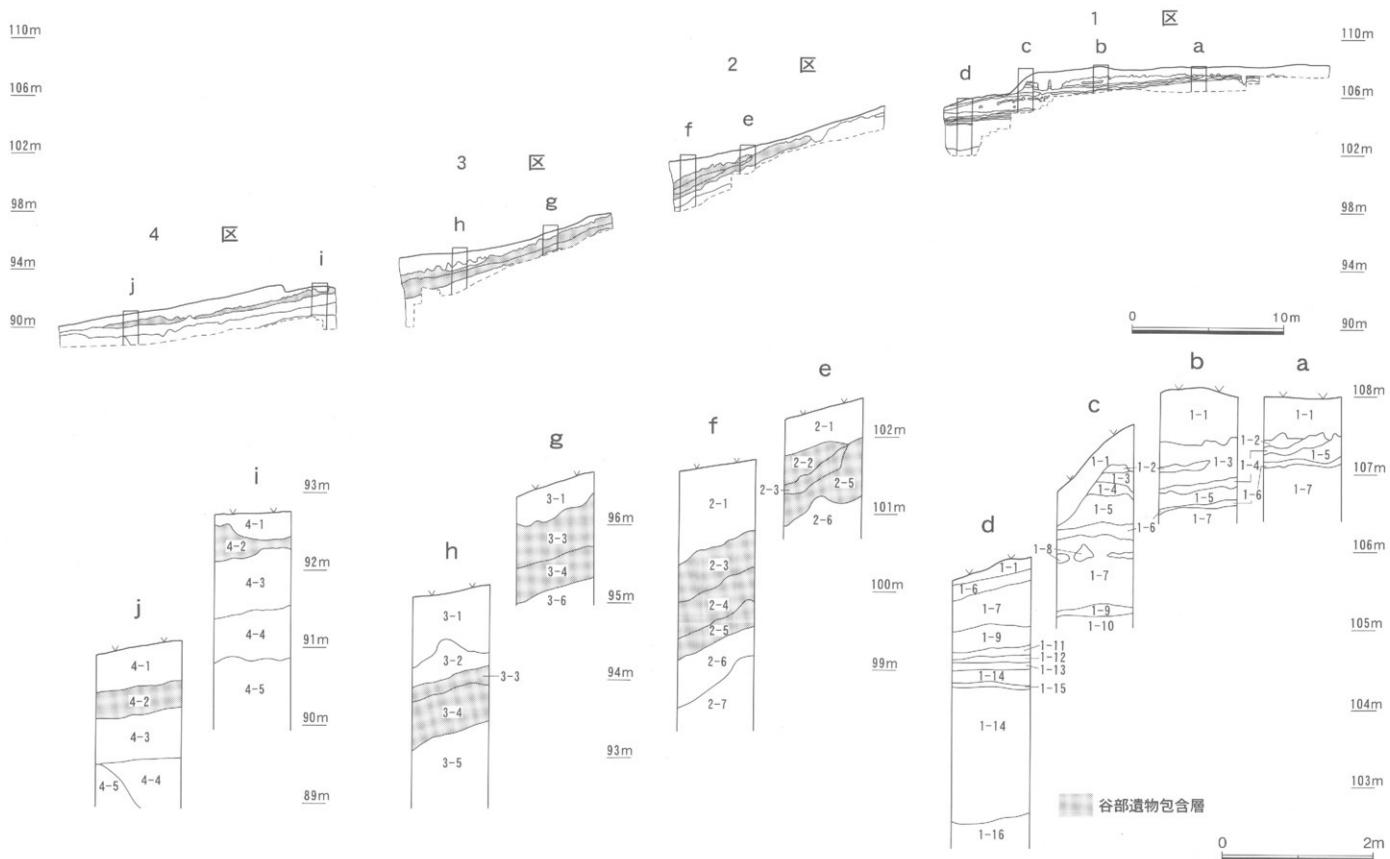
多量の径5~20mm程度の灰・橙・赤褐色スコリアを多く含む。第4層中に見られた灰白色粒子は、含まれない。スコリアの一部は、5~10cm程度のブロック塊状に集中する。粘性有り、しまり強い。



第6図 試掘トレンチ及びテストピット設定図



第7図 押出シ遺跡土層堆積概念図



第8図 押出シ遺跡土層図

第IV章 遺構について

第1節 遺構の概要

丘陵頂上平坦部に位置する1区調査区では、耕作等により、ペアスコリア層から中部ローム層上面の一部まで、攪乱が及び、上部ローム層の堆積は、局地的に黒色帯が残存するほかは、確認されなかった。遺構は、平坦部のほぼ全域で検出されているが、中央部に若干の空白域が存在する。この場所は、先述の黒色帯の堆積箇所であり、遺構覆土との視別が困難な検出環境であったが、黒色帯を掘り下げた後の中部ローム上面でも、上層から連なる遺構の掘り込みは、確認されていない。

遺構、特に住居跡の検出状況は、土地の攪乱で検出面が低いため、明確に範囲や壁の立ち上がりが確認できるものが稀であり、切り合い、重複といった要素も絡んで 断片的な検出が多く、1軒毎に住居を特定することが困難な状況であった。

このため、住居跡の設定は、一定区域に集中する住居を構成する要素（住居を形作る施設、炉・埋甕・壁溝・柱穴）の組み合わせを基本とすることとし、以下、本報告書では、住居と住居に帰属する（または、すると見られる）遺構の関係を表わす用語として、「住居内施設」・「所属施設」・「所属住居」を使用する。

1区で検出された住居の一部または、所属施設と捉えられる遺構の総計は、炉32基、埋甕34基（いわゆる入れ子状態のものが1組あり、実質33基）、壁溝40本である。これに柱穴に相当すると見られるピットがある条件下（次節で詳述）で組み合わせ、35軒（内、敷石を伴うもの、伴う可能性のあるもの2軒）の住居跡を設定した。なお、住居跡設定に漏れた、所属する住居跡が不明な遺構は、炉8基、埋甕10基、壁溝12本である。また、土坑が7基、住居跡の柱穴の配置として矛盾の無いピットの並びも16例ほど確認されている。

覆土が攪乱を受けている場合が多いいため、年代決定の要素を持つ遺構が少なく、年代観を示せるものは、埋甕と、それが所属する住居跡のみである。埋甕は、縄文時代中期後葉、曾利式、加曾利E式の深鉢形土器が多く、勝坂式、阿玉台式、東海系、西日本系土器も含めて、ほぼ縄文時代中期全般に渡って検出されている丘陵西側斜面部の遺物包含層の土器類に比して、年代的に限定される。

そのほか、丘陵西側斜面部、3区調査区では、基本土層第5層上面にて、時期不明であるが、数基のピットが検出されている。

第2節 住居跡

第1節でも触れた通り、1区調査区は、全体的に耕作等によって、ペアスコリア層から中部ローム層の一部まで攪乱が及び、遺構の残存状況は、上部が失われ、検出面が低くなるため、断片的になる傾向が強く、覆土の遺存状況も劣悪な場合が多かった。そのため、土層観察による住居跡のプランや、所属する炉、埋甕、柱穴の特定が難しく、さらに、複数の住居が切り合い、重複する場合の前後関係の決定は、現地調査の段階では、困難であった。

そこで、本報告書では、比較的、遺存状況の良好な住居跡を例に採り、プランや炉、埋甕、柱穴等の位置関係の妥当性を検討した。その結果、(1)炉跡または、それに相当する焼土の集中ある。(2)埋甕が検出される。(3)壁溝が巡る。または、壁の立ち上がりが確認できるある程度の規模を持つ竪穴の掘り方が認められる。(4)主柱穴と見られるピットが検出される。の以上4条件、または、それに準じて2条件以

上満たしている状態で、建て替えによる同一箇所での遺構の掘り込みの重複が想定される場合を除き、住居跡を構成する遺構の組み合わせが一通りだけであることが明らかな状況について、住居跡と認定した。さらに、ほぼプランを一にするような、建て替え、拡大、縮小のような例については、上記の諸条件を満たすことにより、複数の住居跡として数えた。また、1条件だけ満たしていて、他の条件と組み合わせが出来ないような例については、それが住居跡の一部や所属施設として明らかであっても、住居跡として数えていない。

以上のことを踏まえ、1区調査区で認定された住居跡は、35軒（内、敷石を伴うもの、伴う可能性のあるもの2軒）を数える。それぞれの認定条件を満たしている状況は、4条件全て満たすもの16軒、(1)以外の条件をみたすもの2軒、(2)以外の条件を満たすもの9軒、(3)以外の条件を満たすもの3軒、(1)と(4)の条件の組み合わせ1軒、(2)と(3)の条件の組み合わせ2軒、(3)と(4)の条件の組み合わせ2軒である。

35軒の認定された住居跡の内、埋甕を伴うものは、23軒で、それらの内訳は、曾利II式の住居跡7軒、曾利III式の住居跡6軒、曾利IV式の住居跡5軒、曾利式（詳細不明）の住居跡1軒、加曾利E3式の住居跡4軒である（所属住不明埋甕12基の内訳は、曾利I式1基、曾利II式3基、曾利III式2基、詳細不明の曾利式1基、加曾利E3式3基である）。

住居跡の配置状況は、擾乱の規模により、場所によって検出環境に差が生じるため一概には言えないが、1区調査区の平坦部では、中央の遺構検出空白域を除き、ほぼ全体的に住居跡もしくは、住居関連遺構の検出を見ている。

住居跡SB-1（第10図）

西側が後世の畠地の際の境界のため、段状に切り出されているE-7グリッドからE-8グリッドの東側の中部ローム上面で、南北約3.5m、東西約1.0mの半円形状に拡がる炭化物を含む褐色土の堆積が平面的に確認された。これを掘り下げた結果、1基の埋甕（SU-36）と2本の壁溝（SD-1・2）が検出された。この内、SU-36とSD-1が位置的に同一住居の所属として適当であると判断され、SB-1を設定した。この住居は、東側の一部を検出したのみであり、平面形や規模は、特定できない。

炉 検出されなかった。

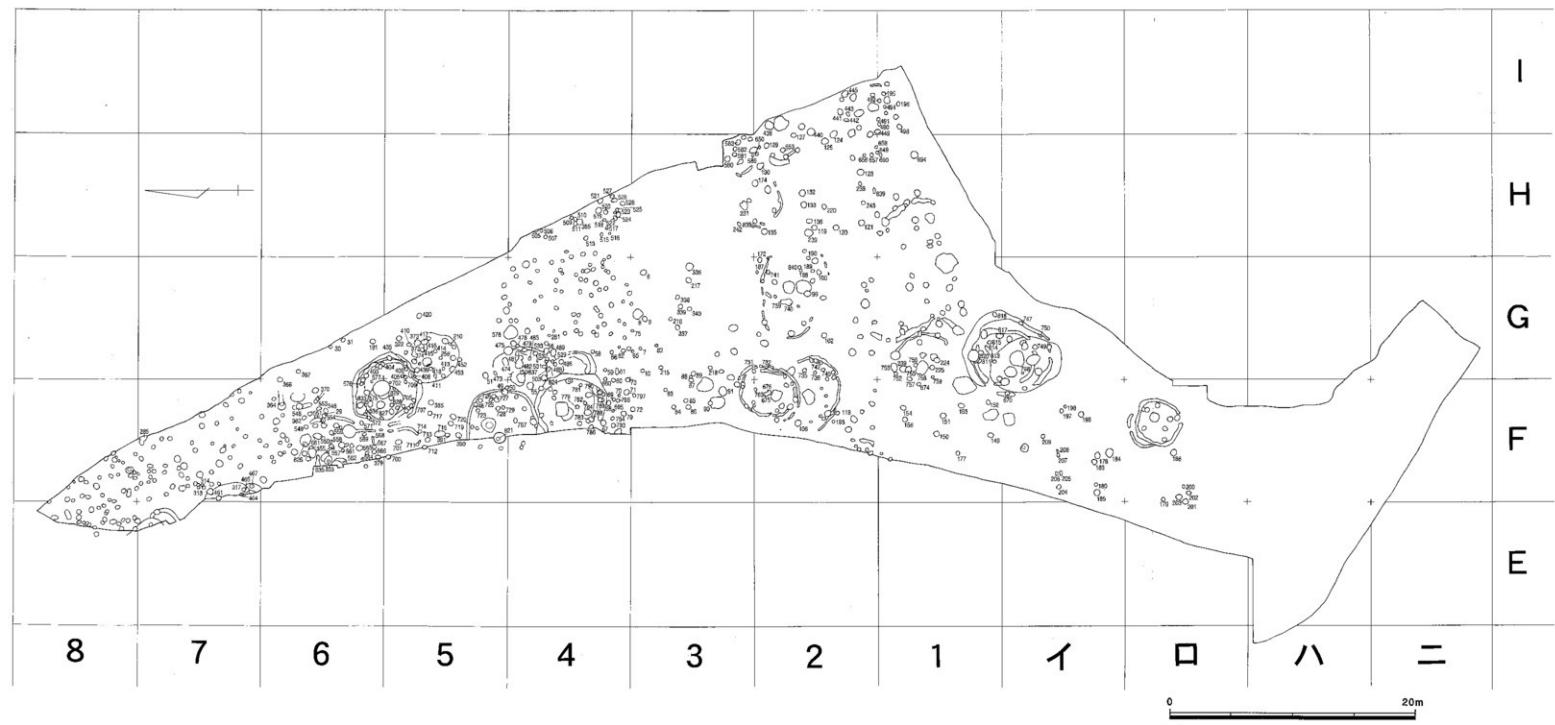
埋甕 SU-36は、住居の南東側から検出された。口縁部と底部を欠いた曾利III式に比定される深鉢形土器で、正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、最大径17cm、掘り方検出面から底面までの深さは、13cmである。

壁溝 SD-1は、北側の一部が検出された。先述の通り、西側は、境界として段状に切り出されているため未検出である。残存部は、長さ約1.1m、幅19~30cm、深さ35cmで、断面は、U字形を呈す。

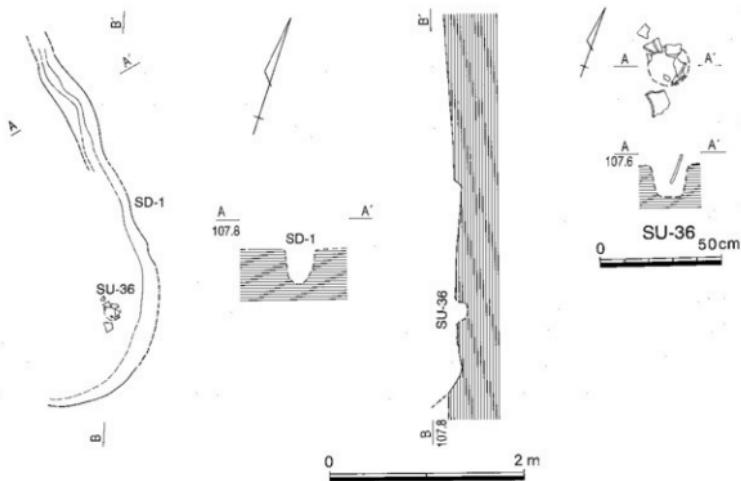
柱穴 柱穴に相当するビットは、検出されなかった。

住居跡SB-2（第11図）

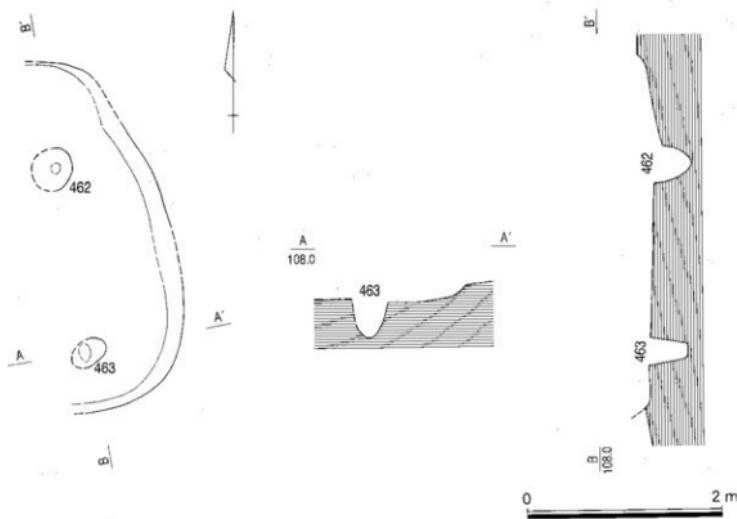
西側が後世の畠地の際の境界のため、段状に切り出されているF-7グリッド南西側の中部ローム上面で、南北約3.5m、東西約1.5mの半円形状に拡がる炭化物を含む褐色土の堆積が平面的に確認された。これを掘り下げた結果、竪穴状の掘り方と1本の壁溝（SD-3）、2本の主柱穴と見られるビット（SP-462・463）が検出された。この内、竪穴状の掘り方と主柱穴と見られるビットが位置的に同一住居の所属として適当と判断され、SB-2を設定した。この住居は、東側約1/3の検出であり、平面的には、梢円形を呈していたと見られ、南北方向の径は、推定3.6m程度である。掘り方の壁は、緩やかに立ち上がり、最も残存状況の良好な東側の壁高は、16cmである。



第9図 1区 遺構配置図 数字は、これ以降の遺構図に表示されないピット番号



第10図 SB-1



第11図 SB-2

炉 検出されなかった。

埋甕 検出されなかった。

壁溝 検出されなかった。

柱穴 SB-2の主柱穴は、SP-462・463の2本が該当すると見られる。北西、南西側では検出されなかつたが、4本の柱が配置される住居であると考えられる。SP-462は、円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、107.030m。SP-463は、楕円形を呈し、最大径36cm、底面の最深部の標高は、107.079mである。

住居跡SB-3・4・5・6（第12・13図）

F-6グリッドで、中部ローム上面に掘り込まれた炉5基（SL-28・8・6・7・30）、埋甕5基（SU-30・2・31・32・4）、壁溝1本（SD-4）と複数の柱穴と見られるピットが検出された。上面の削平が著しく、住居の掘り方そのものは、検出されなかつたので、平面的な位置関係及び、標高値から、同一の住居の所属と考えられる炉と埋甕の組み合わせ（SL-28-SU-30、SL-8-SU-2、SL-6-SU-31・32、SL-7-SU-4）を選び、周囲のピットの中から主柱穴として矛盾のないものを抽出し、4軒の住居跡（SB-3・4・5・6）を設定した。SD-4は、位置的関係よりSB-6の所属とし、SL-30は、所属住居不明とした。

住居跡SB-3

SB-3を構成する遺構は、SL-28、SU-30、主柱穴と見られるピット3本SP-545・361・560が位置的に適当である。

炉 SL-28は、炉石が配置された形跡を残していない。残存する掘り方は、平面的には、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈し、長径76cm、短径56cm、掘り方検出面から底面までの深さは、25cmである。

炉内覆土は、褐色土（炭化物、焼土粒を含む）である。

埋甕 SU-30は、口縁部から胴部中位、底部を欠いた曾利式に比定される深鉢形土器で、正位の状態で埋設していたと見られる。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、最大径34cm、掘り方検出面から底面までの深さは、15cmである。

壁溝 検出されなかつた。

柱穴 SB-3の主柱穴は、SP-545・361・560の3本が該当すると見られる。東側では検出されなかつたが、4本の柱が配置される住居と見られる。SP-545は、楕円形を呈し、最大径48cm、底面の最深部の標高は、107.220m。SP-361は、楕円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、107.138m。SP-560は、円形を呈し、最大径52cm、底面の最深部の標高は、107.225mである。

住居跡SB-4

SB-4を構成する遺構は、SL-8、SU-2、主柱穴と見られるピット3本SP-357・359・563が位置的に適当である。

炉 SL-8は、一部炉石の配置を残す。北西側で、長径14cm、厚さ5cm程度の板状の石が立った状態で検出された。残存する掘り方は、平面的には、北西-南東方向に長軸を持つ楕円形を呈し、南側では、炉石を置くために設けたと見られるテラス状の段が土層断面上で確認された。長径67cm、短径57cm、掘り方検出面から底面までの深さは、18cmである。

炉内覆土は、次の3層に分けられる。第1層：暗褐色土（焼土、炭化物を含む）、第2層：赤褐色土（焼土塊を含む）、第3層：褐色土（少量の焼土粒を含む）である。

埋甕 SU-2は、口縁部から胴部中位と底部を欠いた曾利IV式に比定される深鉢形土器で、正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、不鮮明であるが、平面的には、円形を呈すと見られ、最大径推

定23cm、底面までの深さは、12cmである。

壁溝 検出されなかった。

柱穴 SB-4の主柱穴は、SP-357・359・563の3本が該当すると見られる。東側で検出されていないが、4本の柱が配置される住居と見られる。SP-357は、円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、106.986m。SP-359は、楕円形を呈し、最大径46cm、底面の最深部の標高は、107.174m。SP-563は、楕円形を呈し、最大径42cm、底面の最深部の標高は、106.696mである。

住居跡SB-5

SB-5を構成する遺構は、SL-6、SU-31・32、主柱穴と見られるピット4本SP-543・552・345・356が位置的に適当である。

炉 SL-6は、炉石の配置を残していないが、土層断面上で、炉石をおくために設けたと見られるテラス状の段が確認された。残存する掘り方は、平面的には、北西—南東方向に長軸を持つ楕円形を呈し、長径104cm、短径86cm、掘り方検出面から焼土集中層上面までの深さは、凡そ20cm程度である。

炉内覆土は、焼土集中層も含め、次の3層に分けられる。第1層：暗褐色土（焼土粒、炭化物を含む）、第2層：暗褐色土（焼土粒を含む）、第3層：焼土集中層である。

埋甕 埋甕SU-31・32は、SU-32の内側にSU-31が収まるような、いわゆる入れ子状態で検出された。SU-31は、底部を、SU-32は、胴部中位以下を欠いた曾利III式に比定される深鉢形土器で、共に正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、最大径38cm、掘り方検出面から底面までの深さは、28cmである。

壁溝 検出されなかった。

柱穴 SB-5の主柱穴は、SP-543・552・345・356の4本が該当すると見られる。SP-543は、楕円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、107.193m。SP-552は、円形を呈し、最大径39cm、底面の最深部の標高は、107.221m。SP-345は、円形を呈すると見られ、最大径推定30cm、底面の最深部の標高は、107.173m。SP-356は、楕円形を呈し、最大径41cm、底面の最深部の標高は、106.933mである。

住居跡SB-6

SB-6を構成する遺構は、SU-7、SU-4、SD-4、主柱穴と見られるピット2本SP-352・28が位置的に適当である。

炉 SU-7は、古い炉SL-30と重複し、西側は、土地が後世の畠地の際となり、段状に切り出されているため失われている。

東と南側には、炉石の配置が残る。それぞれ、長径30cm、厚さ10cm程度の板状の石を炉の掘り方の底面を数cm掘り込んだ跡に、立てて置く。

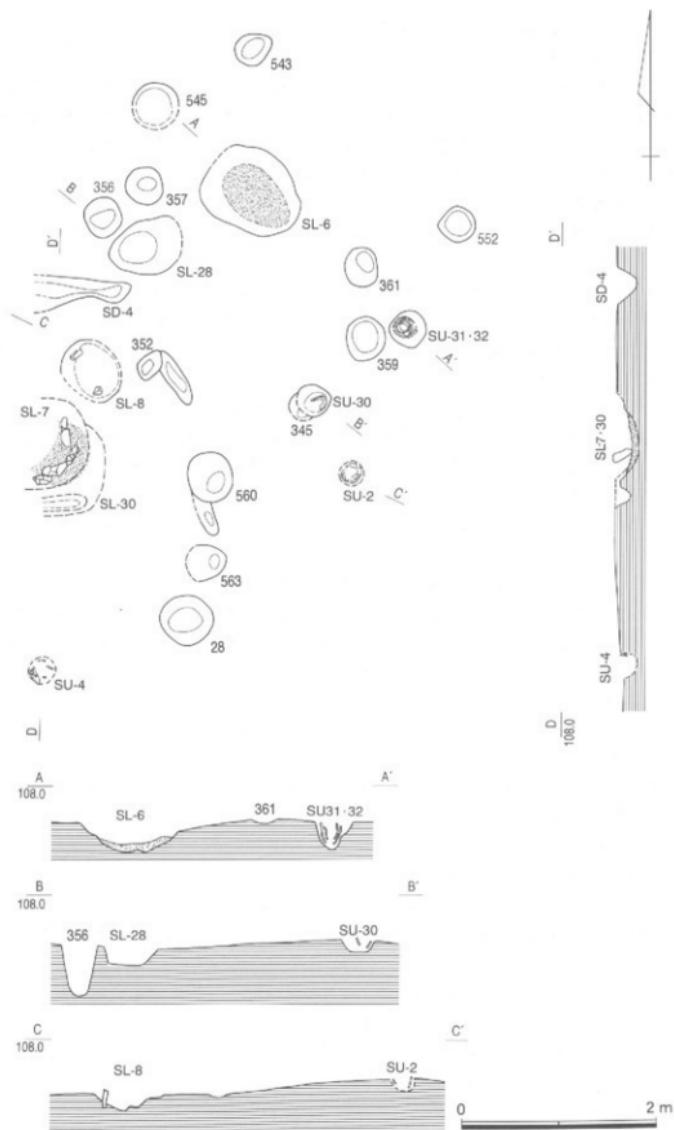
掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈していたものと見られ、南北方向の残存径は、88cm、掘り方検出面から焼土集中層上面までの深さは、凡そ15cm程度である。

SL-30は、SL-7同様、西側半分を失っている。炉石の配置は、残していないが、南側に炉石を置くために設けられたと見られる掘り込みが確認された。

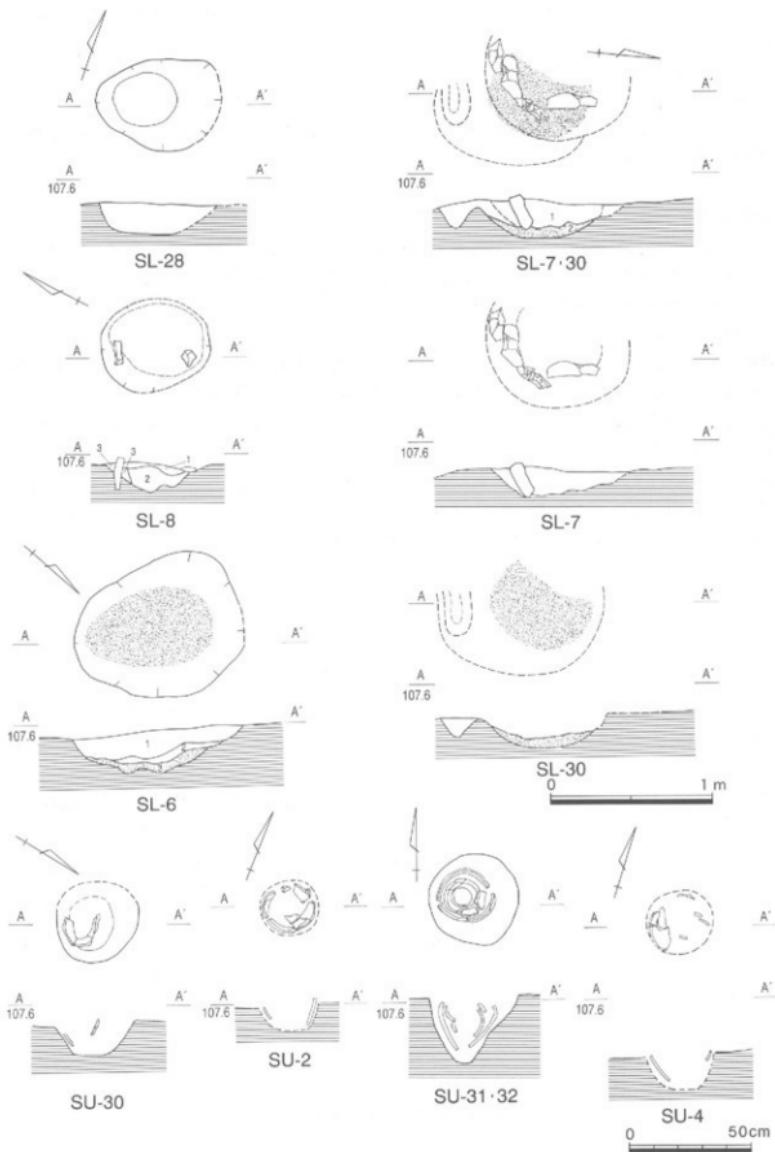
掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈していたと見られ、南北方向の残存径は、100cm、掘り方検出面は、SL-7とほぼ同じ標高である。

これら重複する2基の炉内覆土は、明確に所属する炉を特定できなかつたため、一括して説明する。第1層：暗褐色土（焼土粒、炭化物、スコリアを含む）、第2層：焼土集中層である。

埋甕 埋甕SU-4は、口縁部から胴部上位までを欠いた曾利III式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、不明瞭であるが、平面的には、円形を呈するものと見られ、最大径推定30cm程度、検出面から底面までの深さは、15cm程度である。



第12図 SB-3・4・5・6 (1)



第13図 SB-3・4・5・6 (2)

壁溝 壁溝SD-4は、北から東側にかけ、断片的に検出された。残存部は、幅18~36cm、深さ8cm前後、断面は、U字形である。

柱穴 SB-6の主柱穴は、SP-352・28の2本が該当すると見られる。南西、北西さらに北側で検出されていないが、4ないし5本の柱が配置される住居と見られる。SP-352は、一部SD-4と重複し、不整形を呈し、最大径33cm、底面の最深部の標高は、106.930m。SP-28は、円形を呈し、最大径54cm、底面の最深部の標高は、106.891mである。

住居跡SB-7（第14図）

F-6グリッド北東側、中部ローム層上面で、炉1基(SL-26)、埋甕1基(SU-35)、壁溝1本(SD-8)が検出された。位置的にSU-35とSD-8は、同一の住居の所属と見られ、SB-7を設定した。土地の擾乱のため、住居の南西側の一部分の検出に止まった。

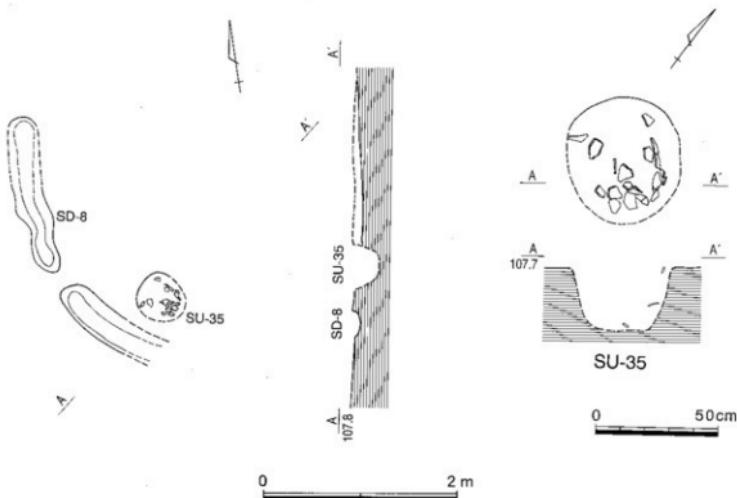
炉 検出されなかった。

埋甕 SU-35は、住居の南東側から擾乱を受けた状態で検出された。曾利IV式に比定される深鉢形土器で、擾乱により壊された小片を接合した結果、底部を欠損していることが確認された。

掘り方は、不鮮明であるが、平面的には、円形を呈すると見られ、最大径推定50cm程度、底面までの深さは、30cm程度である。

壁溝 SD-8は、住居の南西側で断片的に検出された。残存部は、長さ約3.0m、幅23~34cm、深さ5~10cmで、断面は、U字形を呈す。

柱穴 柱穴に相当するピットは、検出されなかった。



第14図 SB-7

住居跡SB-8・9・10（第15・16図）

東から西へ緩やかに下るF-5・6からG-5・6グリッドにかけての中部ローム層上面で、径約6m程度に拡がる多量の焼土粒や炭化物を含む土の堆積が確認された。これを掘り下げ結果、竪穴の住居と大小の壁溝を持つ住居の計3軒分の住居跡の平面プランが重複して検出された。土層断面の観察から、大きい壁溝（SD-11）を持つ住居、小さい壁溝（SD-12）を持つ住居、竪穴の住居の順に古くなり、それぞれを住居跡SB-8・9・10と設定した。

重複する3軒の住居跡の平面プラン内では、炉3基（SL-33・25・24）、埋甕1基（SU-24）が検出された。この内、SL-33、SU-24は、SB-8に、SL-25は、SB-9に、SL-24は、SB-10に所属すると見られ、これらと住居プランの位置関係より、主柱穴として適当なピットを抽出した。

住居跡SB-8

SB-8は、SD-11により、北西—南東方向に長軸を持つ五角形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、長径6.0m、短径5.5mである。住居を構成する遺構は、SD-11のほかに、SL-33、SU-24、主柱穴と見られるピット4本（SP-574・706・434・830）が位置的に適当である。

覆土は、多量の焼土粒、少量の炭化物を含む褐色土である。土層断面の観察から、焼土粒、スコリアを含む褐色土で厚さ5cm程度の床面を築いていることが確認された。

壁は、残存状況の最も良好な住居東側では、ほぼ垂直に立ち上がり、その壁高は、18cmである。

住居の北東側、約1/4の範囲で、床面上に拡がる厚さ4cm程度の焼土の堆積が検出された。少量ながら炭化材も検出されていることから、SB-8が火災住居であったことが窺える。

炉 SL-33は、土層断面から確認された遺構であり、図示した掘り方の平面プランは、復原したものである。南北方向に長軸を持つ楕円形を呈していたと見られ、その大きさは、長径推定140cm程度、短径推定120cm程度で、残存部の深さは、35cmである。

炉石の配置は、残っていないが、断面上では、炉石を置くために設けたと見られるテラス状の段や掘り込みが確認された。また、周辺の住居覆土中からは、被熱により赤く変色した大形の石が検出されている。

炉内覆土は、次の3層に分けられる。第1層：暗褐色土（焼土粒、炭化物を含む）、第2層：暗褐色土（多量の焼土粒、炭化物を含む）、第3層：暗褐色土（多量の焼土粒、少量の炭化物を含む）である。

埋甕 SU-24は、住居の南東側で検出された。口縁部を欠いた加曾利E3式に比定される深鉢形土器で、正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、楕円形を呈し、最大径57cm、掘り方検出面から底面までの深さは、26cmである。

壁溝 SD-11は、西側を除き、ほぼ一周分検出された。平面的には、一辺3m程度の五角形を呈す。残存部は、幅14~40cm、深さ5~15cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-8の主柱穴は、SP-574・706・434・830の4本が該当すると見られる。西側では、検出されていないが、5本の柱が五角形の住居の隅に配置されると考えられる。SP-574は、楕円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、106.662m。SP-706は、楕円形を呈し、最大径37cm、底面の最深部の標高は、106.724m。SP-434は、円形を呈し、最大径37cm、底面の最深部の標高は、106.753m。SP-830は、楕円形を呈し、最大径38cm、底面の最深部の標高は、106.850mである。

住居跡SB-9

SB-9は、SD-12により、円または、隅丸方形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、最大径推定5.1m程度である。住居を構成する遺構は、SD-12の外に、SL-25、主柱穴と見られるピット5本（SP-573・708・407・831・402）が位置的に適当である。

炉 SL-25もSL-33同様、土層断面観察より、その平面プランを復原した。南北方向に長軸を持つ楕円形を呈していたと見られ、その大きさは、長径推定90cm程度、短径推定80cm程度で、残存部の深さは、16cmである。南側で炉石を置いた痕跡と見られる掘り込みが確認された。

炉内覆土は、次の3層に分けられる。第1層：褐色土（焼土粒、炭化物、スコリア、ロームブロックを含む）、第2層：褐色土（焼土粒、多量の炭化物を含む）、第3層：褐色土（多量の焼土粒、少量の炭化物を含む）である。

埋甕 検出されなかった。

壁溝 SD-12は、北、西、南側の一部を除き、検出された。平面的には、円または、隅丸方形を呈す。残存部は、幅11~54cm、深さ10cm前後で、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-9の主柱穴は、SP-573・708・407・831・402の5本が該当すると見られる。西側では、検出されていないが、6本の柱が配置される住居であると考えられる。SP-573は、楕円形を呈し、最大径42cm、底面の最深部の標高は、107.106m。SP-708は、楕円形を呈し、最大径28cm、底面の最深部の標高は、107.150m。SP-407は、楕円形を呈し、最大径31cm、底面の最深部の標高は、106.922m。SP-831は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、106.987m。SP-402は、楕円形を呈し、最大径42cm、底面の最深部の標高は、107.173mである。

住居跡SB-10

SB-10は、壁溝を持たない竪穴住居で、隅丸方形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、最大径3.0mである。住居を構成する遺構は、SL-24、主柱穴と見られるピット4本SP-578・579・704・703が位置的に適当である。

覆土は、2層確認され、上層は、多量の焼土粒、炭化物を含む暗褐色土、下層は、非常に多量の焼土粒、炭化物を含む褐色土である。掘り方の上に厚さ5cm程度の貼り床が施され、全面硬化していた。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、最も残存状況の良好な北側で、検出面から床面までの深さは、27cmである。

住居内の北西側で、長径20~30cm程度の偏平な石が3枚、床面から数cm浮いた状態で検出された。これにより、敷石を伴っていた可能性が考えられる。

炉 SL-24は、炉石の配置は、残していないものの、周辺の住居内覆土からは、炉石の一部と見られる被熱により赤く変色した石が検出されている。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、焼土集中層の周辺には、炉石を置いた痕跡と見られる7~8cm程度の掘り込みが確認された。大きさは、最大径70cm、床面から焼土集中層までの深さは、18cmである。

炉内覆土は、焼土集中層も含め、次の2層に分けられる。第1層：暗褐色土（焼土粒、炭化物、ロームブロックを含む）、第2層：焼土集中層である。

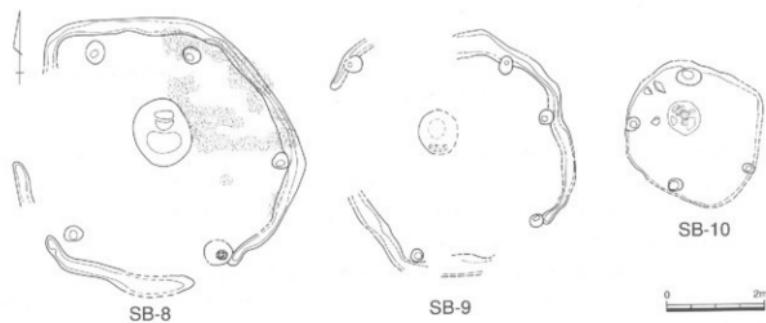
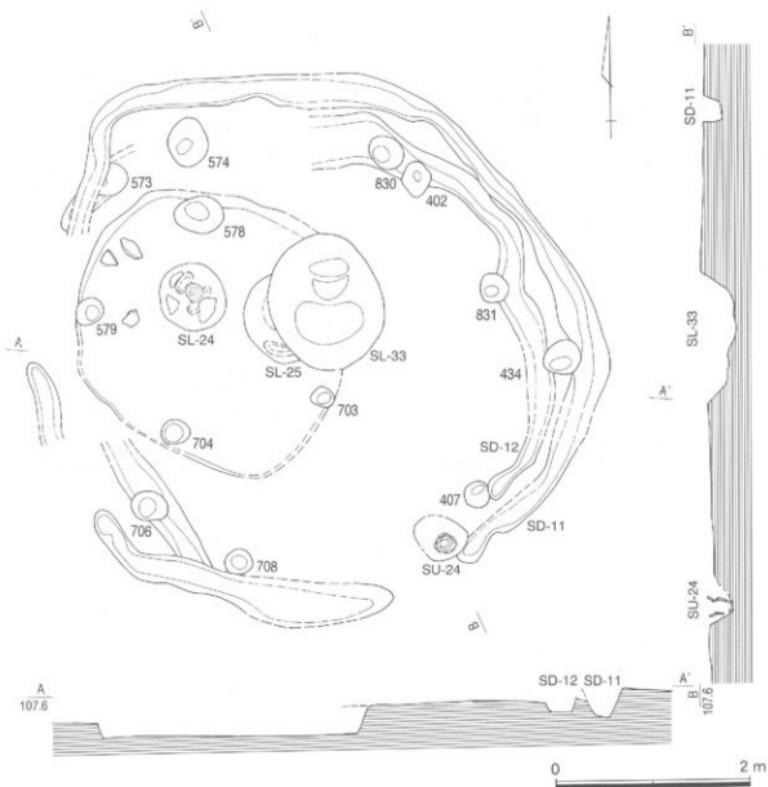
埋甕 検出されなかった。

壁溝 検出されなかった。

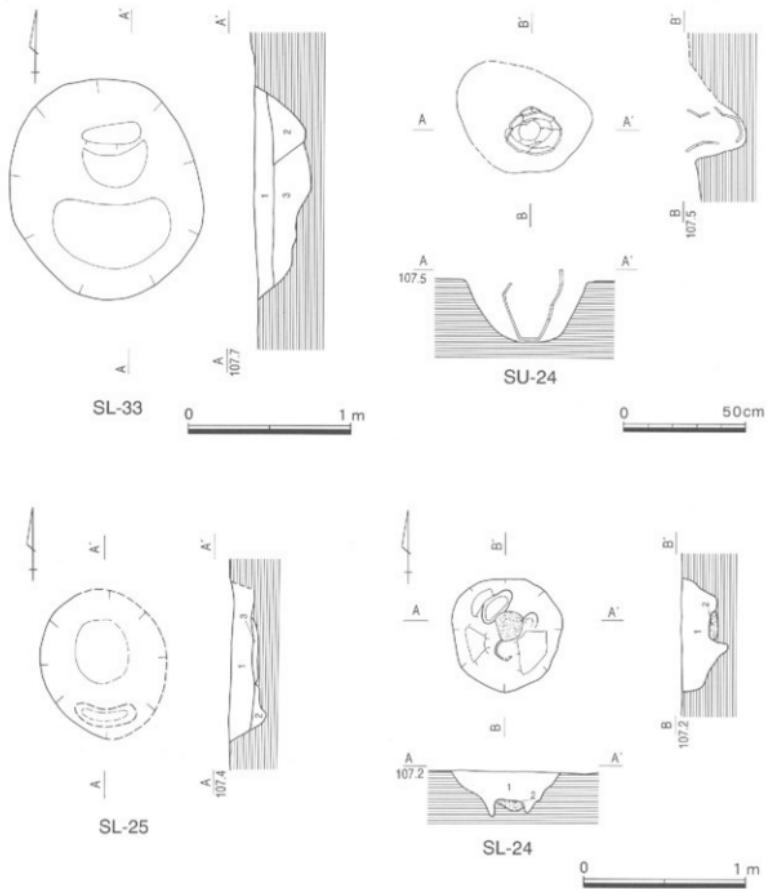
柱穴 SB-10の主柱穴は、SP-578・579・704・703の4本が該当すると見られる。東側で相当する柱穴を検出していないが、5本の柱が配置される住居であると考えられる。SP-578は、楕円形を呈し、最大径49cm、底面の最深部の標高は、106.682m。SP-579は、円形を呈し、最大径28cm、底面の最深部の標高は、106.732m。SP-704は、楕円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、106.667m。SP-703は、楕円形を呈し、最大径24cm、底面の最深部の標高は、106.823mである。

住居跡SB-11（第17図）

G-5グリッド北西部、東から西へ緩やかに下る傾斜面で、中部ローム層上面に掘り込まれた1基の炉



第15図 SB-8・9・10 (1)



第16図 SB-8・9・10(2)

(SL-20)を中心に入れを取り囲むようにして、断片的な壁溝1本(SD-13)とその延長上に連なる竪穴状の掘り方、埋甕1基(SU-29)、柱穴と見られる複数のピットが検出された。SU-29を除き、それぞれの遺構が位置的に同じ住居の所属であると判断し、SB-11を設定した。平面プランは、SD-13と竪穴状の掘り方により、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈し、その大きさは、長径推定4.6m、短径推定4.0mである。SD-13は、SB-8に所属する埋甕SU-24の掘り方の重複により壊されており、このことから、SB-11は、SB-8より古い住居と判断された。竪穴状の掘り方の壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、最も残存状況の良好な東側で、検出面から底面までの深さは、15cmである。

炉 炉SL-20は、一部が石の配置を残す。西側で長径48cm、厚さ数cmの板状の石を立てた状態が検出さ

れた。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈すると見られ、最大径推定70cm程度、南側では、炉石を置くために設けたと見られる掘り込みが確認された。掘り方検出面から焼土集中層上面までの深さは、凡そ10cmである。

炉内覆土は、次の3層に分けられる。第1層：褐色土(焼土粒を含む)、第2層：搅乱土、第3層：褐色土(焼土粒、ロームブロックを含み、しまり強い)である。

埋甕 SB-11に所属すると見られる埋甕は、検出されなかった。しかし、住居南側より検出されたSP-451は、位置的に埋甕の痕跡の可能性がある。平面的には、円形を呈し、最大径35cm、検出面から底面までの深さは、12cmである。

壁溝 SD-13は、住居の北西側で断片的に検出された。残存部の長さ約1.0m、幅20cm、深さ3~4cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-11の主柱穴は、SP-409・376・256・850・412・710の6本が該当すると見られる。SP-409は、円形を呈し、最大径27cm、底面の最深部の標高は、107.399m。SP-376は、円形を呈し、最大径36cm、底面の最深部の標高は、107.491m。SP-256は、楕円形を呈し、最大径55cm、底面の最深部の標高は、107.089m。SP-850は、円形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、106.986m。SP-412は、楕円形を呈し、最大径33cm、底面の最深部の標高は、106.831m。SP-710は、楕円形を呈し、最大径35cm、底面の最深部の標高は、107.059mである。

住居跡SB-12・13 (第18・19・20図)

F-4から5グリッド東側の中部ローム層上面で、径約6mの円形状に抜がる炭化物を含む暗褐色土の堆積が平面的に確認された。これを掘り下げた結果、炉2基(SL-10・17)、埋甕3基(SU-9・23・27)、壁溝1本(SD-14)、柱穴と見られるビットが複数検出された。位置的、標的にSL-17を中心として、その周囲をSU-23・27、SD-14が巡る遺構のまとまりが確認された。

埋甕2基(SU-23・27)が、重複して検出され、南西側で2本の主柱穴と見られるビット(SP-769・770)が並んでいることから、平面プランをほぼ一にした小規模な建て替えが想定され、2軒の住居(SB-12・13)を設定した。

2軒の住居の新旧及び、所属する遺構を決定した要素は、以下の通りである。

南側で重複して検出されているSU-23・27は、その掘り方に明確な標高差があり、2軒の住居の間には、生活面の上昇があったことが推測された。これにより、SD-14により決定される住居プラン内に並ぶ柱穴と見られるビットについて、その底面の最深部の標高値を基に二大別し、浅いものを新しい住居、深いものを古い住居の所属とした。

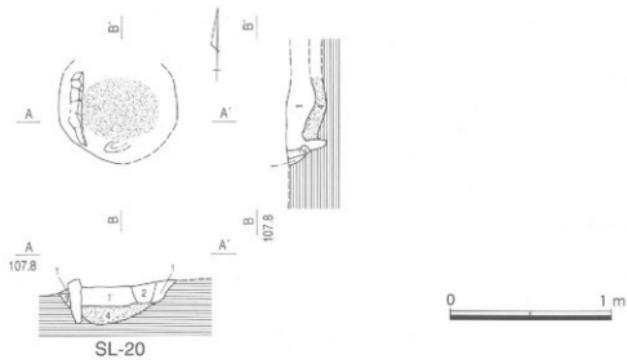
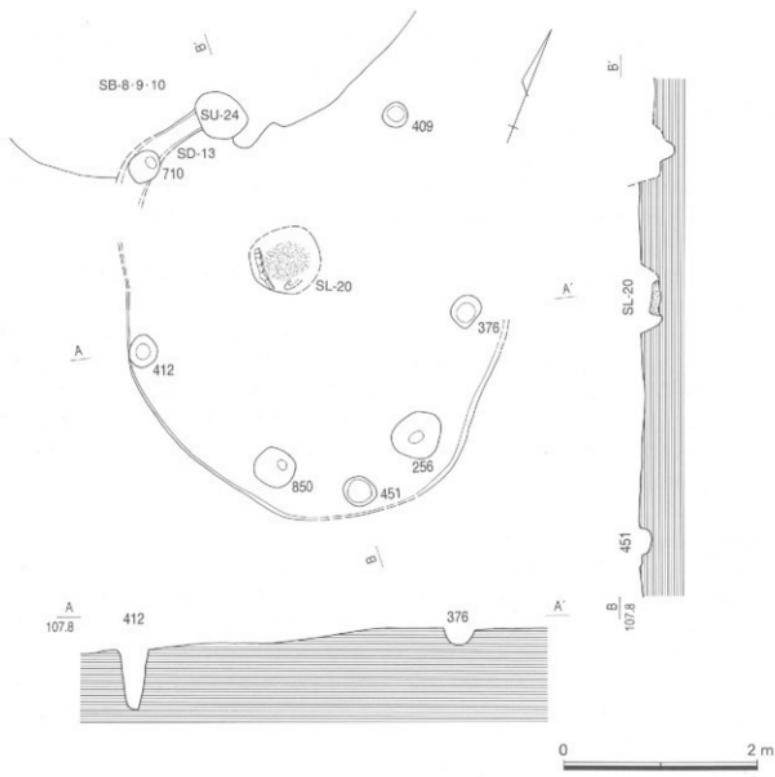
SL-17、SD-14については、平面的な位置状況から見て、2住居に渡り同じ状態であったか、同位置に同規模のものが掘り込まれ、識別ができないものと考えられる。

SL-10、SU-9については、他に同一の住居に所属したと見られる遺構との組み合わせが確認されなかつたので、所属住居跡不明とした。

住居跡SB-12

SB-12は、SD-14により、円形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、最大径5.8mである。住居を構成する遺構は、SD-14の他に、SL-17、SU-23、主柱穴と見られるビット5本(SP-721・724・799・770・718)が位置的に適当である。

炉 SL-17は、一部炉石の配置を残す。北と西側で長径50~60cm、厚さ10cm程度の板状の石を立てた状態が検出された。残存する掘り方は、隅丸方形を呈し、最大径120cm、掘り方検出面から焼土集中層上面までの深さは、凡そ20cm程度である。



第17図 SB-11

炉内覆土は、SB-13に所属すると見られる焼土集中層も含め、次の2層に分けられる。第1層：暗褐色土（焼土粒、炭化物を含む）、第2層：焼土集中層である。

埋甕 SU-23は、住居の南側から検出された。口縁の一部と底部を欠いた曾利III式に比定される深鉢形土器で、正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、北から西側にテラス状の段が確認された。最大径47cm、掘り方検出面から底面までの深さは、26cmである。

壁溝 SD-14は、後世の畠地の境界の際のため段状に削平された西側を除き、ほぼ一周分検出した。平面的には、円形を呈す。残存部は、幅14~29cm、深さ16~18cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-12の主柱穴は、SP-721・724・799・770・718の5本が該当すると見られる。SP-721は、楕円形を呈し、最大径29cm、底面の最深部の標高は、106.271m。SP-724は、楕円形を呈し、最大径37cm、底面の最深部の標高は、106.321m。SP-799は、円形を呈し、最大径33cm、底面の最深部の標高は、106.342m。SP-770は、楕円形を呈し、最大径37cm、底面の最深部の標高は、106.293m。SP-718は、楕円形を呈し、最大径32cm、底面の最深部の標高は、106.225mである。

住居跡SB-13

SB-13は、SB-12と同じくSD-14により、円形を呈する平面プランを持つ。SD-14の他に、住居を構成する遺構は、SL-17、SU-27、主柱穴と見られるピット3本SP-768・769・722が位置的に適当である。

炉 SL-17のSB-13の所属する要素は、第2層（焼土集中層）以下に限定される。残存する焼土集中層については、SB-12時の炉の使用により発生した焼土との明確な区別はできない。

埋甕 SU-27は、SB-12の埋甕SU-23の掘り方により攪乱を受けた、胴部の一部を残す曾利II式に比定される深鉢形土器である。掘り方は、平面的には、円形を呈していたと見られ、最大径35cm程度、検出面から底面までの深さは、22cmである。

壁溝 SB-12・13は、小規模な建て替えであるため、壁溝は、SD-14が2住居に渡り、同じ状態であったか、同位置に同規模のものが掘り込まれ、識別ができないものと見られる。

柱穴 SB-13の主柱穴は、SP-768・769・722の3本が該当すると見られる。SP-768は、円形を呈し、最大径28cm、底面の最深部の標高は、106.195m。SP-769は円形を呈し、最大径24cm、底面の最深部の標高は、106.192m。SP-722は円形を呈し、最大径34cm、底面の最深部の標高は、106.199mである。

住居跡SB-14・15（第18・19・20図）

F-4グリッド東側、住居跡SB-12・13の南隣の中部ローム層上層で、径約6mの円形状に拡がる炭化物を含む褐色土の堆積が平面的に確認された。これを掘り下げた結果、重複する炉2基（SL-18・23）と、それを中心に取り囲むようにして、埋甕2基（SU-25・26）、壁溝2基（SD-15・16）、柱穴と見られるピットが複数、検出され、2軒以上の住居の重複が想定された。平面的な位置関係及び、標高値から同一の住居の所属と考えられる炉・埋甕・壁溝の組み合わせ（SL-23-SU-26-SD-15、SL-18-SU-25-南側の一部を除くSD-15とSD-16）を選び、周囲のピットの中から主柱穴として矛盾の無いものを抽出し、2軒の住居跡（SB-14・15）を設定した。

住居跡SB-14

SB-14は、SD-15により、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する平面プランを持ち、長径5.9m、短径推定5.2m程度である。住居を構成する遺構は、SD-15のほかに、SL-23、SU-26、主柱穴と見られるピット3本SP-772・774・787が位置的に適当である。

炉 SL-23は、SL-18と重複している。北側に後世の攪乱を受けているものの、一部、炉石の配置を残す。南側に長径70cm、厚さ12cm、西側に長径50cm、厚さ12cmの板状の石が立てるようにして配置され、炉石の接続部分には、径10cm大の石を置き、南側の炉石の外側には、掘り方との隙間を埋めるように長

径30cm、厚さ5cm程度の板状の石をはめ込んでいる。残存する掘り方は、平面的には、隅丸方形を呈するものと見られ、最大径推定100cm程度、掘り方検出面から焼土集中層上面までの深さは、凡そ15cmである。

炉内覆土は、図表記の便宜上、SB-15の炉SL-18のものも含め、6層に分けられ、内、第3層までがSL-23の所属である。第1層：褐色土（焼土粒、炭化物、ローム粒を含む）、第2層：褐色土（第1層に比して若干色調が暗い。焼土粒、炭化物、ローム粒を含む）、第3層：焼土集中層である。

埋甕 SU-26は、SB-14の南側で検出された。胴部下位以下を欠いた曾利III式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、北西側にテラス状の段が確認された。最大径43cm、掘り方検出面から底面までの深さは、27cmである。

壁溝 SD-15は、後世の烟地の境界の際のため、段状に削平された西側を除き、ほぼ一周分検出された。残存部は、幅24~75cm、深さ12~20cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-14の主柱穴は、SP-772・774・787の3本が該当すると見られる。北西と南東側で相当する柱穴を検出していないが、5本の柱が配置される住居であると考えられる。SP-772は、円形を呈し、最大径35cm、底面の最深部の標高は、106.543m。SP-774は、円形を呈し、最大径33cm、底面の最深部の標高は、106.692m。SP-787は、梢円形を呈し、最大径42cm、底面の最深部の標高は、106.379mである。

住居跡SB-15

SB-15は、SD-15の北から東側とSD-16により、円形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、最大径5.0mである。住居を構成する遺構は、SD-15・16のほかにSL-18、SU-25、主柱穴と見られるピット4本SP-777・785・780・775が位置的に適当である。

炉 SL-18は、SL-23の重複を受け、北側約1/2を失う。炉石の配置は、残されていないが、東側に炉石を置くために設けたと見られる掘り込みが確認された。残存する掘り方は、不整形を呈するものと見られ、最大径推定100cm程度、掘り方検出面から焼土集中層上面までの深さ15cmである。

炉内覆土は、図表記の便宜上、SB-14の炉SL-23のものも含めて6層に分けられ、内、第4層以下がSL-18の所属である。第4層：褐色土（スコリアを含む）、第5層：暗褐色土（焼土粒、炭化物、ローム粒を含む）、第6層：焼土集中層である。

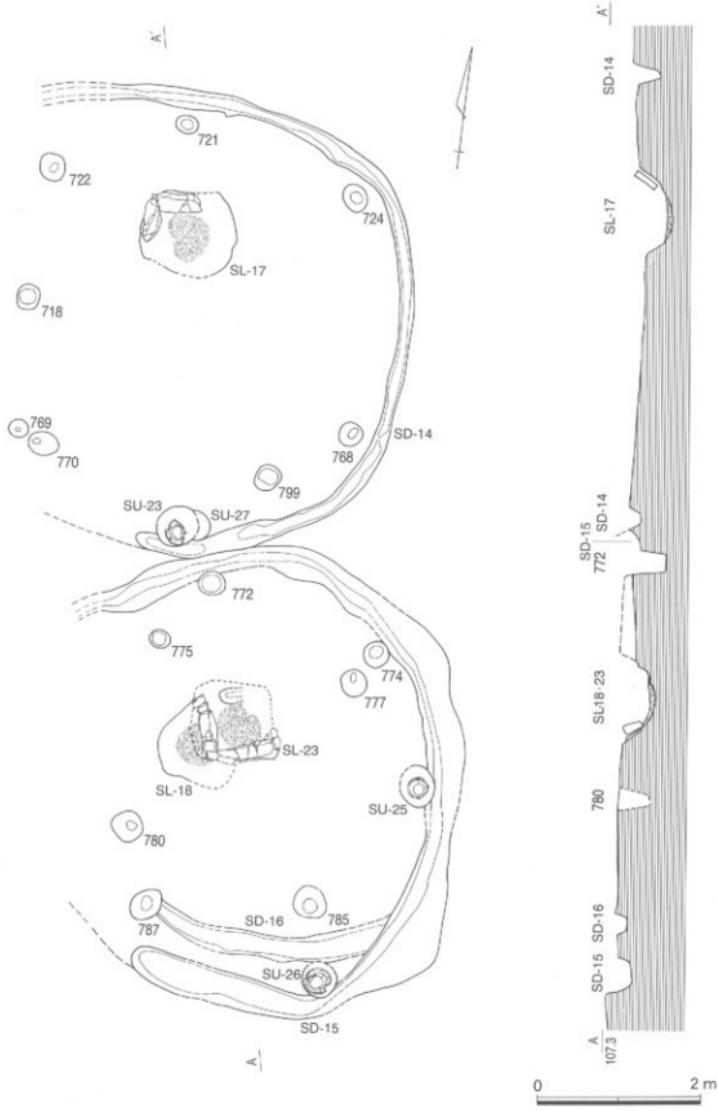
埋甕 SU-25は、SB-15の東側で検出された。口縁部と底部を欠いた曾利III式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ梢円形を呈し、南側を除き、テラス状の段が確認された。最大径55cm、掘り方検出面から底面までの深さは、25cmである。

壁溝 南側の一部を除くSD-15とSD-16がSB-15の平面プランを決定する。SD-16の残存部は、東西方に向に長さ約2.4m、幅18~38cm、深さ10cm前後である。

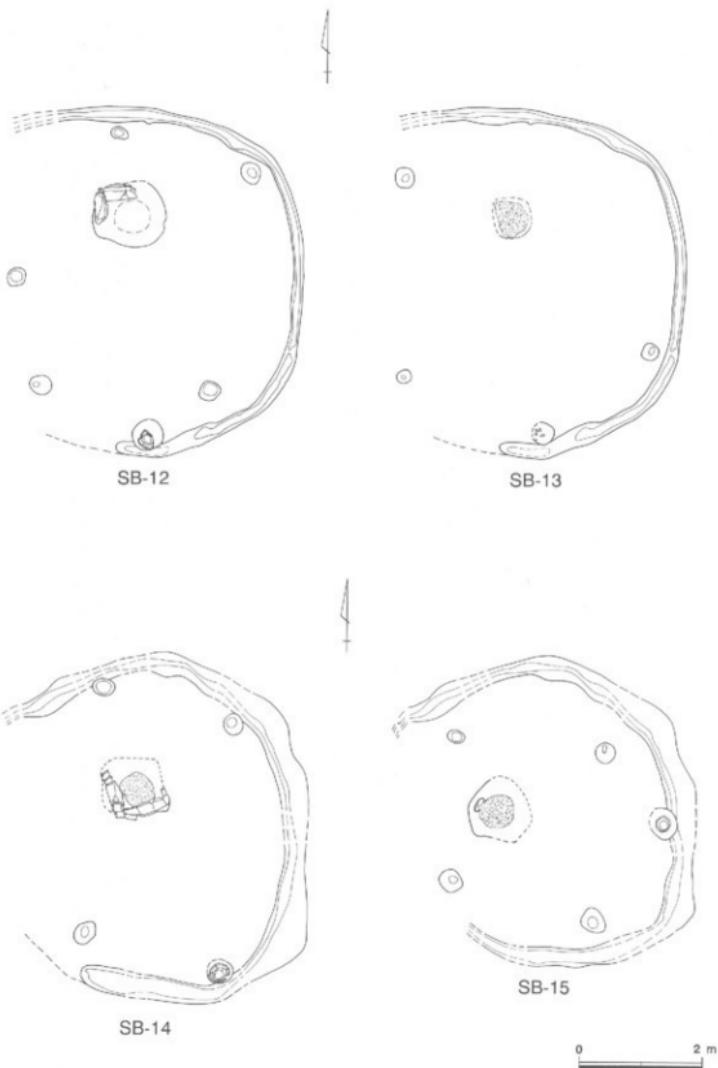
柱穴 SB-15の主柱穴は、SP-777・785・780・775の4本が該当すると見られる。SP-777は、円形を呈し、最大径36cm、底面の最深部の標高は、106.539m。SP-785は、梢円形を呈し、最大径54cm、底面の最深部の標高は、106.500m。SP-780は、円形を呈し、最大径38cm、底面の最深部の標高は106.549m。SP-775は、梢円形を呈し、最大径26cm、底面の最深部の標高は、106.827mである。

住居跡SB-16・17（第21・22図）

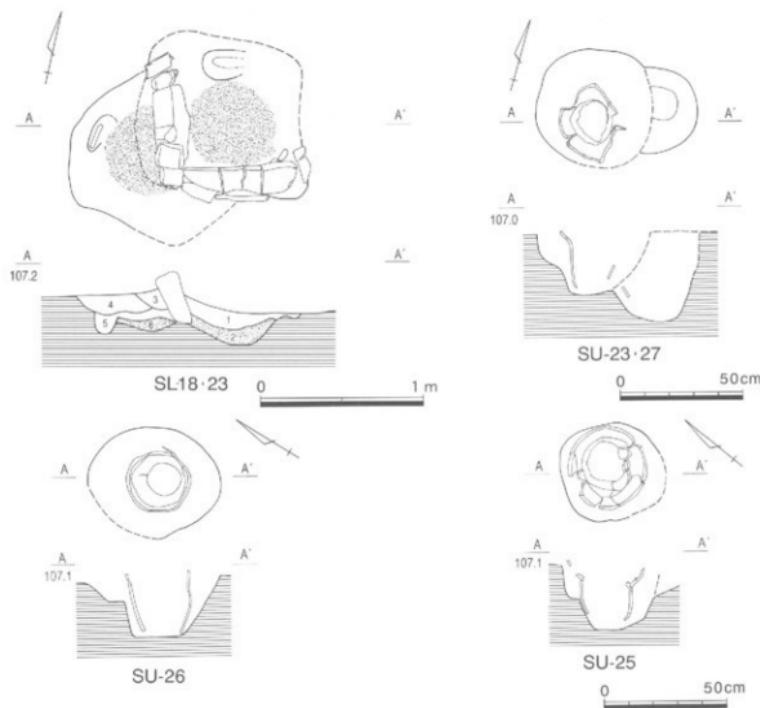
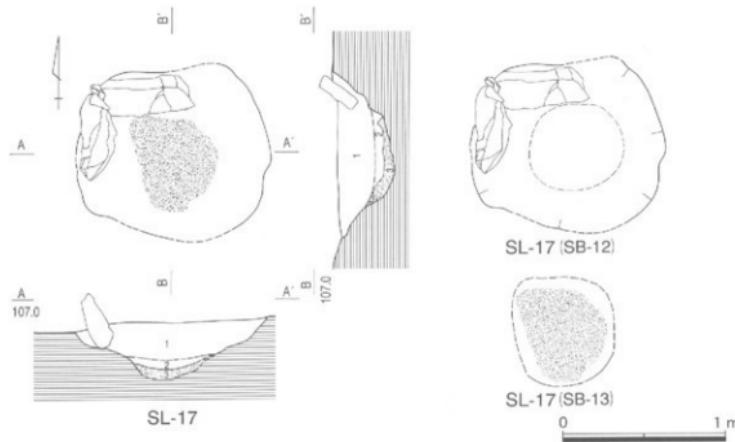
F-4・G-4~5グリッドの中部ローム層上面で、長径8m、短径4m程度の南北方向に長軸を持つ梢円形状に拡がる多量の焼土粒や炭化物を含む暗褐色土の堆積が平面的に確認された。これを掘り下げた結果、炉4基（SL-21・31・9・19）、埋甕3基（SU-7・8・10）、壁溝4本（SD-17・18・19・20）と柱穴と見られるピットが複数、検出された。炉SL-21は、炉SL-31に、埋甕SU-8は、埋甕SU-7に重複



第18図 SB-12・13・14・15 (1)



第19図 SB-12・13・14・15 (2)



第20図 SB-12・13・14・15 (3)

する。

新旧の炉と埋甕をそれぞれ同じ住居の所属とし、位置的に適当な壁溝（SD-17・18）と柱穴と見られるピットを組み合わせて、2軒の住居跡SB-16・17を設定した。

SL-9・19、SU-10、SD-19・20については、他に同一の住居に所属したと見られる遺構との組み合せが確認されなかったので、所属住居跡不明とした。

住居跡SB-16

SB-16は、南東側の一部を検出したのみであり、SD-17から平面プランの形を特定するには至らない。住居跡を構成する遺構は、SD-17のほかに、SL-21、SU-8、主柱穴と見られるピット2本SP-477・776が位置的に適当である。

炉 SL-21は、炉石の配置は、残していないが、北西側に炉石を置くために設けたと見られる落ち込みが確認された。掘り方は、平面的には、楕円形を呈し、長径74cm、短径66cm、掘り方検出面から焼土集中層上面までの深さは、凡そ10cmである。

炉内覆土は、焼土集中層も含め、次の2層に分けられる。第1層：暗褐色土（焼土粒、炭化物を含む）、第2層：焼土集中層である。

埋甕 SU-8は、住居の南東側から検出された。口縁部の一部を欠いた曾利III式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、最大径27cm、掘り方検出面から底面までの深さは、34cmである。

壁溝 SD-17は、東側で一部検出された。残存部は、幅16～52cm、深さ10cm程度で、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-16の主柱穴は、SP-477・776の2本が該当すると見られる。SP-477は、楕円形を呈し、最大径42cm、底面の最深部の標高は、106.737m。SP-776は、楕円形を呈し、最大径36cm、底面の最深部の標高は、107.090mである。

住居跡SB-17

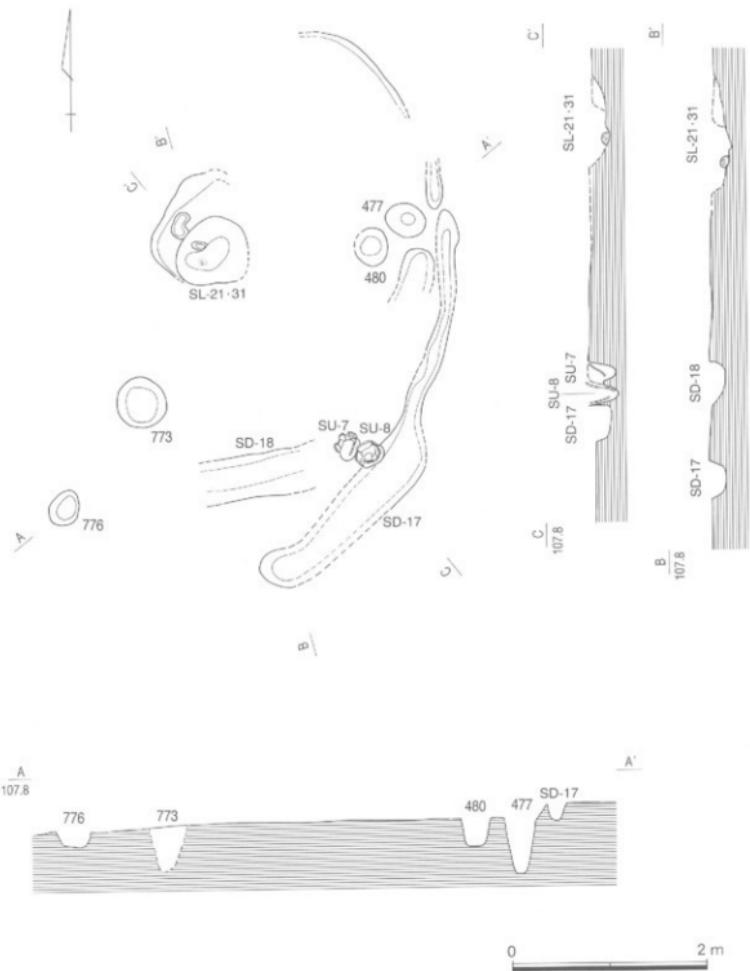
SB-17は、SB-16同様、東側の一部を検出したのみである。壁溝SD-18より、楕円形の平面プランを呈すると見られ、その大きさは、最大径推定4.9m程度である。住居を構成する遺構は、SD-18のほかにSL-31、SU-7、主柱穴と見られるピット2本SP-480・773が位置的に適当である。

炉 SL-31は、SB-16の炉SL-21の切り合いなどにより東側半分を失っている。炉石の配置は、残していないが、西側に炉石を置くために設けられたと見られる掘り込みが確認された。掘り方は、平面的には、北東～南西方向に長軸を持つ楕円形を呈していたと見られ、その大きさは、最大径推定115cm程度で、検出面から底面までの深さは、18cmである。

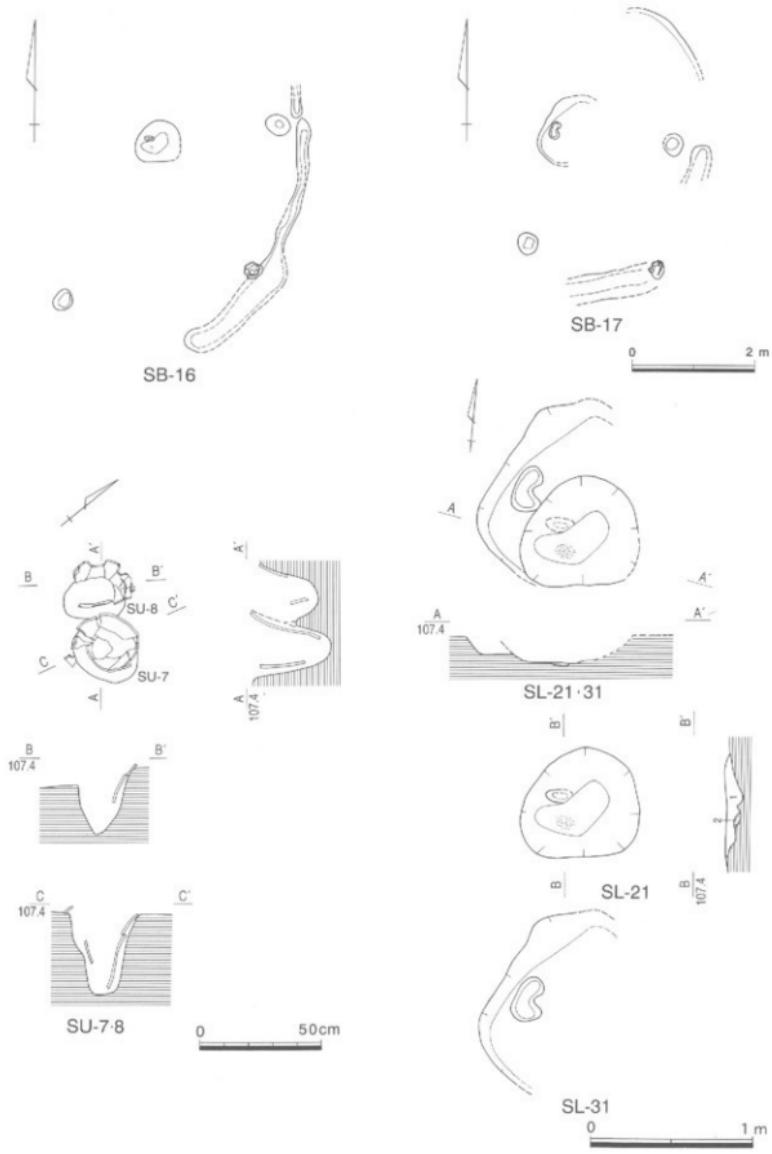
埋甕 SU-7は、住居の南東側から検出された。胴部中位のみを残す加曾利E3式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、南東側がSB-16の埋甕SU-8の切り合いを受けているが、平面的には、円形を呈し、最大径24cm、掘り方検出面から底面までの深さは、15cmである。

壁溝 SD-18は、東から南側にかけて、断片的に検出された。残存部は、幅35～47cm、深さ10～15cmで、断面は、逆台形を呈す。北東側には、擾乱で内側を失い外側の湾曲のみを残す壁溝の一部が確認されている。

柱穴 SB-17の主柱穴は、SP-480・773の2本が該当すると見られる。SP-480は、楕円形を呈し、最大径36cm、底面の最深部の標高は、107.026m。SP-773は、円形を呈し、最大径52cm、底面の最深部の標高は、106.833mである。



第21図 SB-16・17 (1)



第22図 SB-16・17 (2)

住居跡SB-18・19・20（第23・24図）

F-2・3からG-2・3グリッドにかけ、中部ローム層上面に掘り込まれた1基の炉（SL-2）を中心とそれを取り囲むようにして、埋甕1基（SU-11）、壁溝2本（SD-21・22）と、柱穴と見られる複数のピットが検出された。2本の壁溝から、大小2軒分の住居プランが確認され、さらに小さい住居内は、北西、南西側で、2本ずつ主柱穴と見られるピットが並ぶことから、小規模な建て替えがあったことが推定でき、これを2軒分の住居とした。

これら3軒の新旧関係を決定する要素は、以下の通りである。

SL-2は、方形の炉石の配置を残すが、炉内で検出された焼土集中層が平面的に石の囲いの中に収まらないことが確認された。これは、炉が同じ場所で作り変えられ、規模を縮小した形跡と見られ、大きい住居から小さい住居へ建て替えられた時に運動したものと見られる。

ただ1基残存するSU-11とSL-2の中心を結ぶ線を最も新しい住居の主軸とすると、北西、南西側に並ぶ柱穴で、主軸に平行するSP-766、679の組み合わせが視認できる。また、SU-11の東隣で検出されているSP-697を埋甕が抜き去られた痕跡と想定し、SL-2の中心と結ぶ線を2番目の住居の主軸とすると、残るSP-766、678の組み合わせが平行する。

以上のことから、SL-2を中心にして、大きい住居が小さくなり、さらに主軸の向きを若干西側へ移動した建て替えがあったことが看取される。住居跡の番号は、新しいものから順にSB-18・19・20と設定した。

覆土は、擾乱を受けた黒色土で、床面、明確な壁の立ち上がりは、それぞれ確認されなかった。

住居跡SB-18

SB-18は、壁溝SD-21により、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、長径4.6m、短径3.7mである。住居を構成する遺構は、SD-21のほかに、炉^{SL-2}、埋甕SU-11、主柱穴と見られるピット3本SP-762・679・680が位置的に適当である。

炉 SL-2は、前述の通り、改築されながら、3軒の住居の炉として使用されたと見られる。炉石の配置は、住居が小形化した以降に小さく組み直されたものであると考えられるが、規模の変化が見られないSB-19からSB-18への建て替え時のSL-2の改築を示す要素は、確認されていない。

炉石は、北、西、南側に長径50cm程度の板状の石を1枚ずつ、東側に手のひら大、厚さ1.5cm程度の小さな板状の石を数枚、それぞれ立てるようにして方形に配置する。また、北西と北東側の炉石の接続部分には、小児頭大の石を置く。

残存する掘り方は、SB-20以来のものと見られる。平面的には、方形を呈し、その大きさは、最大径90cmで、炉^石を置くために設けたと見られるテラス状の段がほぼ一周する。掘り方の検出面から焼土集中層上面までの深さは、凡そ30cmである。

炉内の覆土は、焼土集中層も含め、次の4層に分けられる。第1層：暗褐色土（少量の炭化物、焼土粒を含み、粘性、しまり共に弱い）、第2層：にぼい黄褐色土（第1層に比して土色が明るく、焼土粒が若干多く含まれる）、第3層：褐色土（粘性、しまり共に弱い）、第4層：焼土集中層である。

埋甕 SU-11は、SB-18の北側、SD-21内で検出された。底部を欠いた加曾利E3式に比定される深鉢形土器で、正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、最大径27cm、掘り方の検出面から底面までの深さは、26cmである。

壁溝 壁溝SD-21は、一部未検出の箇所があるが、南北に長軸を持つ楕円形にほぼ一周する。残存部は、幅8~30cm、深さ6~27cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-18の主柱穴は、SP-762・679・680の3本が該当すると見られる。北東側に相当するピットを検出していないが、4本の柱が配置される住居であると考えられる。SP-762は、円形を呈し、最大径

30cm、底面の最深部の標高は、106.638m。SP-679は楕円形を呈し、最大径48cm、底面の最深部の標高は、106.591m。SP-680は円形を呈し、最大径推定33cm、底面の最深部の標高は、106.579mである。

住居跡SB-19

SB-19は、SB-18の建て替え前の住居と見られ、SD-21によって確定される平面プランを共有または、識別不能なほどに壁溝が重複している状態と考えられる。また、炉は、位置的にSL-2が相当するのが妥当であるが、前述の通り、残存する炉石の配置の成立がSB-19に伴うものか、SB-18に伴うものか不明であり、便宜的にSB-19から住居の規模が小形になって以来、炉石の配置は、不变であったと仮定した。埋甕は、検出されていないが、その痕跡と見られるSP-697や、主柱穴と見られるビット2本SP-766・678が位置的に、この住居跡に所属するのが適当である。

炉 住居の規模の縮小と共に決定されたと見られるSL-2の炉石の配置は、ほぼ同じ規模、主軸の向きのSB-19からSB-18への建て替え時に変化した痕跡は、認められない。

埋甕 SB-19に所属すると見られる埋甕は、検出されなかった。しかし、SB-18に所属するSU-11の東隣に位置するSP-697は、位置的に埋甕を埋設した後、住居の建て替えにより、抜き去られた痕跡と見ることができ、SL-2の中心とを結ぶ線は、住居の北西、南西側で検出されている主柱穴と見られるビットSP-766、678の並びに平行する。SP-697の残存する掘り方は、平面的には、楕円形を呈し、最大径40cm、検出面から底面までの深さは、32cmである。

壁溝 SB-19からSB-18への建て替えが、主軸の向きを若干東側へ移動した小規模なものであったことから、SD-21が、2住居に渡り同じ状態を維持したか、同位置に同規模の壁溝が掘り込まれたため、差違が識別できないものと見られる。

柱穴 SB-19の主柱穴は、SP-766・678の2本が該当すると見られる。南東側の主柱穴は、SP-680と重複している可能性がある。北東側に相当するビットを検出していないが、SB-19は、4本の柱が配置される住居であると考えられる。SP-766は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、106.600m。SP-678は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、106.464mである。

住居跡SB-20

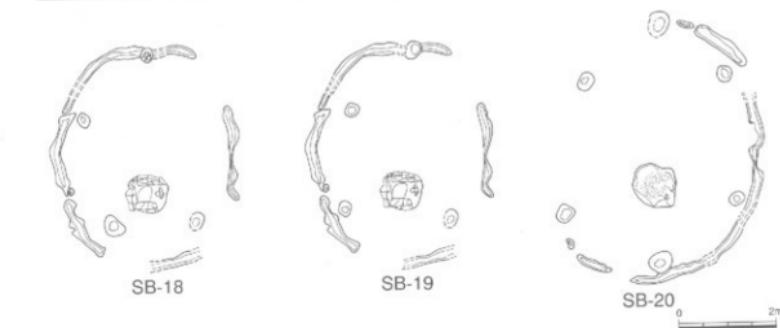
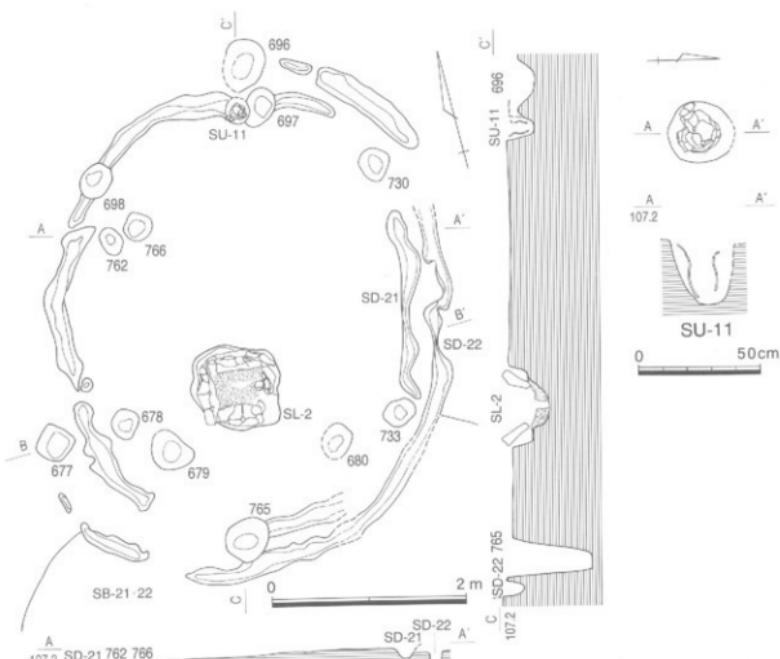
SB-20は、SB-19の建て替え前の住居と見られ、SD-22により、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、長径5.6m、短径推定4.5mである。住居を構成する遺構は、SD-22の外に、炉SL-2、埋甕は、検出されていないが、その痕跡と見られるSP-696、主柱穴と見られるビット5本SP-698・677・765・733・730が位置的に適当である。

炉 前述したように、SL-2の残存する炉石の配置は、住居が小さく建て替えられた後のものと見られるため、SB-20に所属する要素は、地山(中部ローム層)に掘り込まれた堀り方と、第4層(焼土集中層)以下の土層に限定される。但し、焼土集中層の中心付近については、SB-18・19時の炉の使用により発生した焼土との明確な区別はできない。

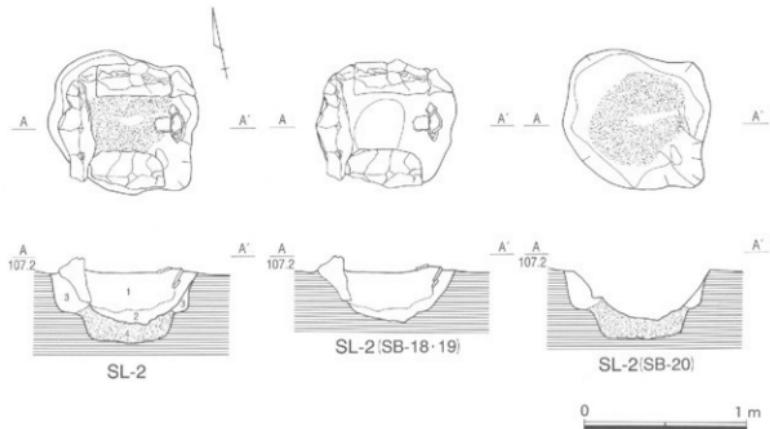
埋甕 SB-20に所属すると見られる埋甕は、検出されなかった。しかし、SL-2中央と後述する南側の住居最奥の主柱穴と見られるSP-765を結ぶ線の北側延長上で、SD-22にぶつかる住居の出入口部分に相当する箇所で検出されたSP-696は、位置的に埋甕の痕跡である可能性がある。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、最大径推定52cm程度、検出面から底面までの深さは、47cmである。

壁溝 SD-22は、北から西側を除く約2/3が検出された。平面的には、南北に長軸を持つ楕円形を呈する。上面を大きく削平されており、狭小な断片を漸く残している箇所も少なくない。残存部は、幅3~24cm、深さ2~20cmで、断面形は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-20の主柱穴は、SP-698・677・765・733・730の5本が該当すると見られる。SP-698は、楕円形を呈し、最大径37cm、底面の最深部の標高は、106.499m。SP-677は、円形を呈し、最大径40cm、底



第23図 SB-18・19・20 (1)



第24図 SB-18・19・20 (2)

面の最深部の標高は、106.293m。SP-765は、円形を呈し、最大径45cm、底面の最深部の標高は、106.233m。SP-733は、円形を呈し、最大径31cm、底面の最深部の標高は、106.388m。SP-730は、円形を呈し、最大径33cm、底面の最深部の標高は、106.411mである。

住居跡SB-21・22（第25・26図）

F-2からG-2グリッドにかけ、中部ローム上面に掘り込まれた1基の炉（SL-1）を中心に、それを取り囲むようにして、埋甕2基（SU-12・13）、壁溝2本（SD-23・24）と柱穴と見られる複数のピットが検出された。南西、南東側で2本ずつ、主柱穴と見られるピットが並び、埋甕が2基検出され、南西側で2本の壁溝が並ぶところから、2軒の住居を設定した。

2軒の住居の新旧及び、所属する遺構を決定した要素は、以下の通りである。

東側で検出されている埋甕SU-12・13は、その掘り方に明確な標高差があり、高い方のSU-13が新しく、低い方のSU-12が古いと判断された。この新旧埋甕の掘り込み面の標高の差異により、2軒の住居の間に、生活面の上昇があったことが推測された。SL-1の中心部と埋甕を結ぶ線をそれぞれの住居の主軸と見ると、南西、南東側で2本ずつ検出された主柱穴に相当すると見られるピットが、主軸と平行する形で、SP-109-103、SP-682-744の並びに組み合わせられた。

SL-1は、検出された掘り方と炉石の配置に標的に距離があり、住居の建て替えに伴う改築があったと見られ、2基の埋甕の関係から推測される生活面の上昇と一致した。以上のことから、SL-1を中心にして、主軸を若干北側へ移動し、同時に生活面が上昇した建て替えが看取される。住居番号は、新しいものからSB-21・22と設定した。

この2軒の住居跡は、北側で、SB-18・19・20と切り合い関係にあるが、東側プランを決定するSD-23の北西側の延長線上にSL-2（SB-18・19・20の炉に相当）があり、これを境していないことから、SB-21・22は、SB-18・19・20より古い住居であると判断された。

主柱穴の並びの内側に一周り規模の小さなピットが炉の周辺を巡る。これらは、支柱的な性格を持つものと見られ、底面の標高から二つのまとまりが捉えられる。2軒の住居の高低差に準じてそれぞれの

所属を分けたが、平面的な配置状況から見て、一時期あるいは、2住居に渡って、同時に存した可能性も否定できない。

覆土は、擾乱を受けた黒色土で、床面、明確な壁の立ち上がりは、確認されなかった。

住居跡SB-21

SB-21は、南西側の一部を除くSD-23とSD-24により、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈するプランを持ち、その大きさは、長径推定6.4m程度、短径推定5.0m程度であると見られる。住居を構成する遺構は、SD-23・24の外に、SL-1、SU-13、主柱穴と見られるビット4本SP-764・109・103・734、支柱と見られるビット3本SP-110・104・681が位置的に適当である。

炉 SL-1で、SB-21に所属する要素は、炉石の配置に限定される。炉石は、東側に長径52cm、南側に同じく37cmの枕状の石を1枚ずつ、幅広い面を下に寝かせるようにして配置する。北、西側から炉石は、検出されなかつたが、炉の内側に長径39cmの枕状の石が落ち込んでおり、どちら側かに配置されていたものと見られる。

SL-1の炉内覆土は、SB-22に所属する土層も含め、次の3層に分けられる。第1層：黒褐色土（炭化物、黄褐色ロームを含み、粘性無し、しまり弱い）、第2層：褐色土（粘性弱い、しまり有り）、第3層：暗褐色土（焼土粒、地山と同じ赤褐・青灰色スコリアを含むローム粒を含み、粘性弱い、しまり有り）である。焼土集中層は、認められない。第1層下面がSB-21の炉の底面に相当すると思われる。掘り方の検出面からの深さは、凡そ15cmである。

残存する掘り方は、SB-22に所属すると見られる。平面的には、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈し、東側では、炉石を置くために設けたと見られるテラス状の段が確認される。長径127cm、短径84cm、検出面から底面の最深部までの深さは、41cmである。

埋甕 SU-13は、住居の東側からSU-12と南北に並んで検出された（SL-13は、北側）。胴部の一部を残す曾利II式に比定されると見られる深鉢形土器で、口縁から胴部上位以上は、土地の削平により欠損したと見られ、これに伴う擾乱により、一部を除き、原位置を留めていない。また、底部も、検出されていない。正位の状態で埋設されていたと見られる。残存する掘り方は、平面的には、楕円形を呈し、最大径41cm、掘り方の検出面から底面までの深さは、21cmである。

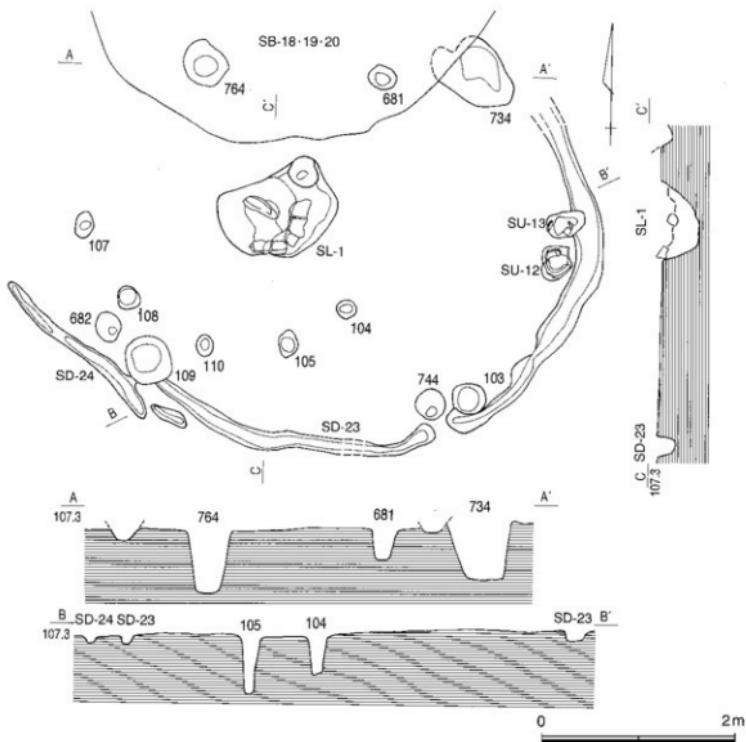
壁溝 南西側の一部を除くSD-23とSD-24がSB-21の南から東側にかけて約1/2の平面プランを決定する。SD-23は、北側でSB-18・19・20の重複を受ける。SD-23の残存部は、幅9～23cm、深さ3～23cmで、断面は、逆台形を呈す。SD-24の残存部は、幅8～19cm、深さ6～13cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-21の主柱穴は、SP-764・109・103・734の4本が該当すると見られる。SP-734は、その形状や規模から複数のビットが重複したものでSB-22北西側主柱穴に相当する部分があると見られる。SP-764は、円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、106.415m。SP-109は、円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高106.543m。SP-103は、円形を呈し、最大径36cm、底面の最深部の標高は、106.658m。SP-734は、不整形を呈し、最大径93cm、底面の最深部の標高は、106.524mである。

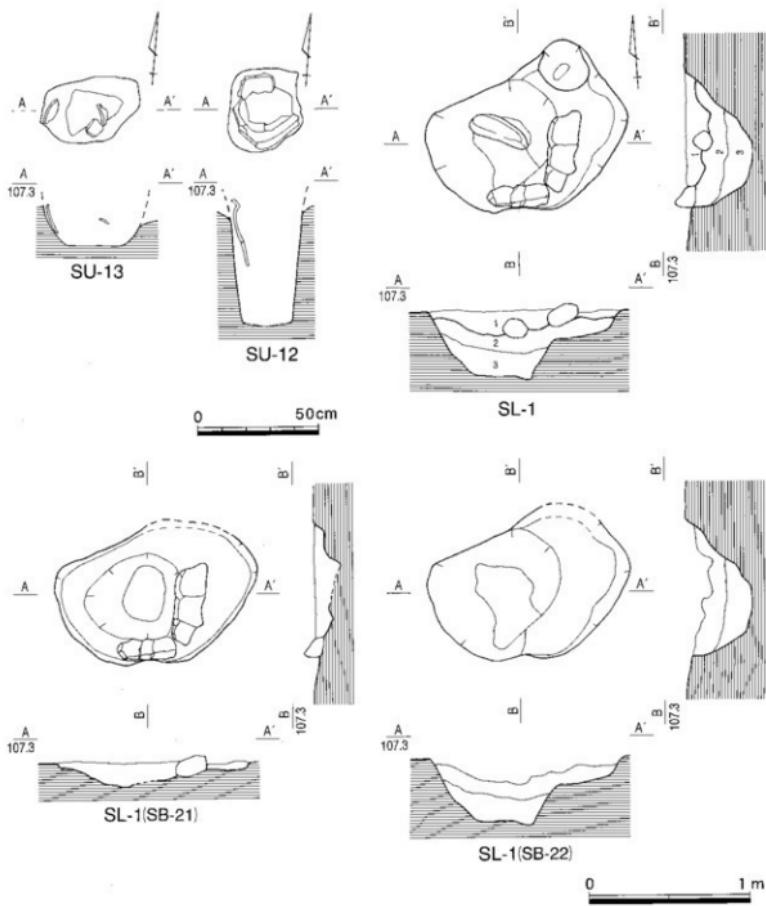
支柱は、SP-110・104・681の3本が該当すると見られる。SP-110は、円形を呈し、最大径20cm、底面の最深部の標高は、106.893m。SP-104は、円形を呈し、最大径22cm、底面の最深部の標高は、106.761m。SP-681は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、106.720mである。

住居跡SB-22

SB-22は、SD-23により、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、SB-21より西側が一周り小さい規模であると見られる。住居を構成する遺構は、SD-23の外にSL-1、SU-12、主柱穴と見られるビット2本SP-682・744、支柱と見られるビット3本SP-107・108・105が位置的に適当であると見られる。



第25図 SB-21・22 (1)



第26図 SB-21・22 (2)

炉 SL-1の中で、SB-22に所属する要素は、残存する掘り方と第2層以下に限定されると見られる。

埋甕 SU-12は、住居の東側からSU-13と南北に並んで検出された(SU-12は、南側)。一部欠損しているものの、口縁部から底部まで残す曾利II式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、楕円形を呈し、最大径37cm、検出面からの深さは、56cmである。

壁溝 SB-21・22は、SB-18・19同様主軸の向きが若干変わる小規模な建て替えのため、壁溝は、SD-23が2住居に渡り同じ状態であったか、同位置に同規模のものが掘り込まれ、識別ができないものと見られる。

柱穴 SB-22の主柱穴は、SP-682・744の2本が該当すると見られる。北東側の主柱穴は、SB-21の北東側主柱穴SP-734の中に相当する部分があると見られる。また、北西側主柱穴も、SB-21北西側主柱穴SP-764と重複している可能性がある。SP-682は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、106.730m。SP-744は、円形を呈し、最大径34cm、底面の最深部の標高は、106.688mである。

支柱は、SP-107・108・105の3本が該当すると見られる。SP-107は、円形を呈し、最大径27cm、底面の最深部の標高は、106.422m。SP-108は、円形を呈し、最大径20cm、底面の最深部の標高は、106.542m。SP-105は、円形を呈し、最大径23cm、底面の最深部の標高は、106.579mである。

住居跡SB-23・24（第27・28図）

G-2グリッドの北側で、中部ローム上面に掘り込まれた炉2基（SL-4・12）、埋甕1基（SU-17）、壁溝2本（SD-25・26）と複数の柱穴と見られるピットが検出された。北から西側にかけて、局地的な黒色帯の堆積範囲にかかり、この場所での遺構平面プランの確認は困難で、遺構の検出状況は他所に比して疎である。2基の炉の新旧は、炉石の配置を残すSL-4を新しい炉、炉石が取り去られているSL-12を古い炉とした。この2基の炉を中心にして、平面的な位置関係上、組み合わせが適当と思われる埋甕、壁溝、柱穴と見られるピットをそれぞれ同一の住居の所属とし、新しい順にSB-23・24を設定した。

住居跡SB-23

SB-23は、SD-25により、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、長径推定5.7m程度、短径推定4.3m程度と見られる。住居を構成する遺構は、SD-25の他に、SL-4、主柱穴と見られるピット4本SP-98・234・227・240が位置的に適当であると見られる。

炉 SL-4は、炉石の配置を残す。長径約40～60cmの板状の石を北側2枚、西、南、東側に1枚ずつ立てて、楕円形または、長方形に配置する。隙間の見られる南側では、北側と同じように2枚置かれていたものが、1枚抜き取られた可能性がある。残存する掘り方は、平面的には、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈し、炉石を置くために設けたと見られるテラス状の段が確認できる。長径103cm、短径91cm、掘り方検出面から焼土集中層上面までの深さは、31cmである。

炉内覆土は、焼土集中層も含め、次の4層に分けられる。第1層：褐色土（褐色ロームブロックを含む）、第2層：褐色土（ローム質土）、第3層：赤褐色土（焼土ブロックと第1層と同じ土相の褐色土との混合層）、第4層：焼土集中層である。

埋甕 検出されなかった。

壁溝 SD-25は、西から北側にかけて、断片的に検出された。東側部分は、未検出であるが、平面的には、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈すると見られる。上面を大きく削平されており、残存部は、幅9～23cm、深さ4～16cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-24の主柱穴は、SP-98・234・227・240の4本が該当すると見られる。北側では、主柱穴に相当するピットは、検出されなかった。SP-98は、楕円形を呈し、最大径56cm、底面の最深部の標高は、107.005m。SP-234は、円形を呈し、最大径35cm、底面の最深部の標高は、107.080m。SP-227は、円形を呈し、最大径37cm、底面の最深部の標高は、106.933m。SP-240は、円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、106.848mである。

住居跡SB-24

SB-24は、SD-26により、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、長径推定6.0m程度、短径推定5.0m程度と見られる。住居を構成する遺構は、SD-26のほかに、SL-12、SU-17、主柱穴と見られるピット3本SP-101・241・738が位置的に適当である。

炉 SL-12は、炉石の配置を残していないものの、その一部と思われる小見頭大の石が数個検出されて

いる。残存する掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈し、北側に炉石を置くために設けたと見られるテラス状の段が確認される。長径136cm、短径110cm、掘り方検出面から焼土上面までの深さは、凡そ15~20cmである。

炉内覆土は、焼土集中層も含め、次の3層に分けられる。第1層：暗褐色土（焼土粒、炭化物を含み、粘性無し、しまり有り）、第2層：暗赤褐色土（多量の焼土粒を含み、粘性無し、しまり有り）、第3層：焼土集中層である。焼土集中層上面は、若干擾乱を受けている。

埋壺 SU-17は、住居の北側、SD-26内で検出された。底部を欠いた曾利IV式に比定される深鉢形土器で、正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、不鮮明であるが、平面的には、円形を呈すると見られ、最大径推定30cm程度、掘り方検出面から底面までの深さは、22cmである。

壁溝 SD-26は、東から南西側を除き、断片的に検出された。平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈すると見られる。上面を大きく削平されており、残存部は、幅6~21cm、深さ4~14cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-24の主柱穴は、SP-101・241・738の3本が該当すると見られる。北東側に相当するビットは、検出されなかった。SP-101は、楕円形を呈し、最大径52cm、底面の最深部の標高は、107.085m。SP-241は、円形を呈し、最大径53cm、底面の最深部の標高は、107.102m。SP-738は、楕円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、106.868mである。

住居跡SB-25（第29図）

H-1から2グリッドにかけ、中部ローム上面に掘り込まれた主柱穴と見られるビットの並び（SP-230・236・131・232）と、それを囲むように1本の壁溝（SD-27）が検出された。それぞれの遺構は、位置的に同じ住居の所属と判断され、SB-25を設定した。平面プランは、SD-27により、円または、隅丸方形を呈すると考えられ、その大きさは、最大径推定3.7m程度と見られる。

炉 検出されなかった。

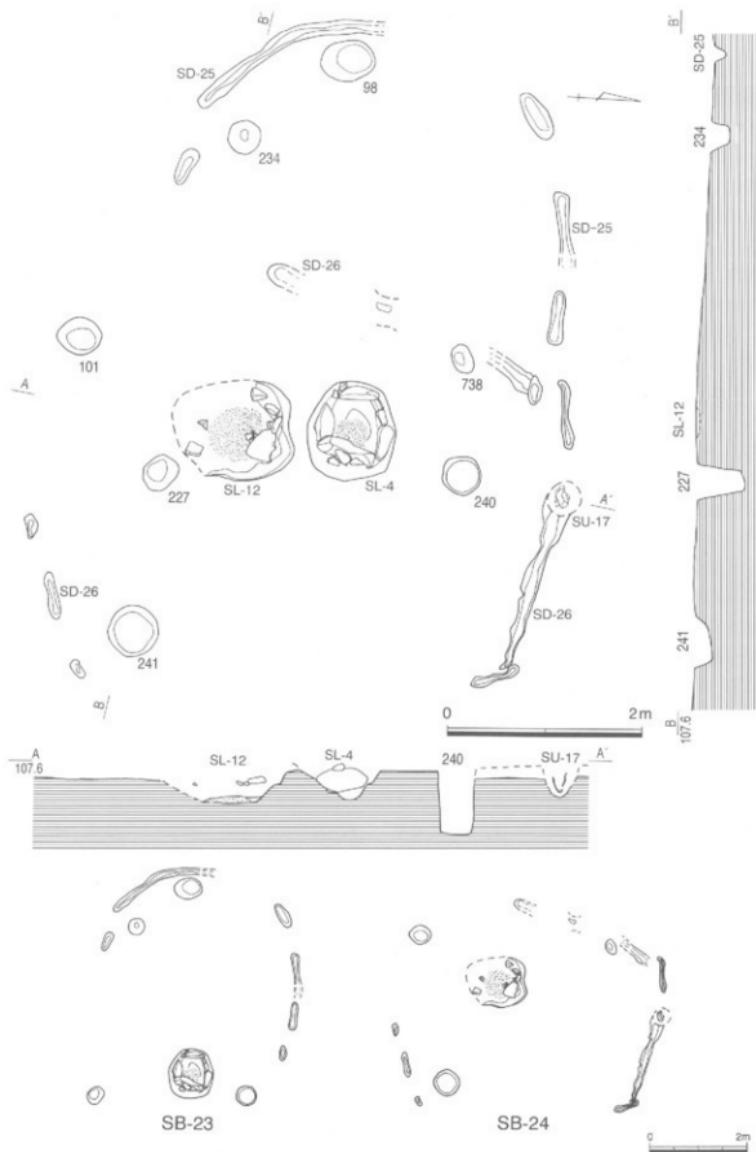
埋壺 検出されなかった。

壁溝 SD-27は、南から西側にかけ、断片的に検出された。北、東側部分は、土地の削平により失われたと見られる。残存部は、幅7~20cm、深さ2~12cmで、断面は、逆台形を呈す。

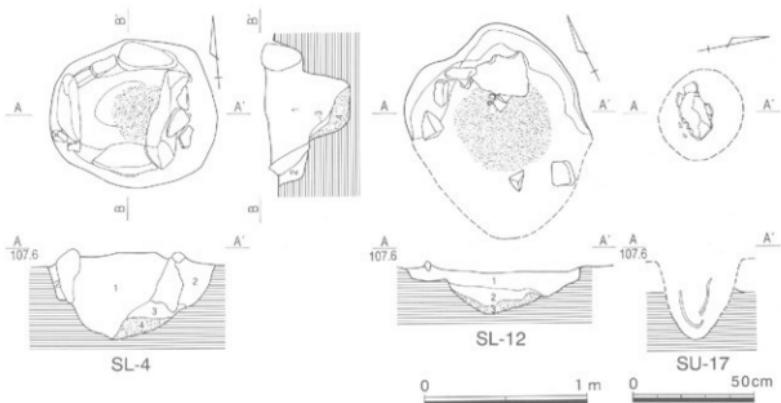
柱穴 SB-25の主柱穴は、SP-230・236・131・232の4本が該当すると見られる。SP-230は、円形を呈し、最大径39cm、底面の最深部の標高は、107.177m。SP-236は、円形を呈し、最大径36cm、底面の最深部の標高は、107.122m。SP-131は、不整形を呈し、最大径65cm、底面の最深部の標高は、107.104m。SP-232は、円形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、107.018mである。

住居跡SB-26・27・28（第30・31図）

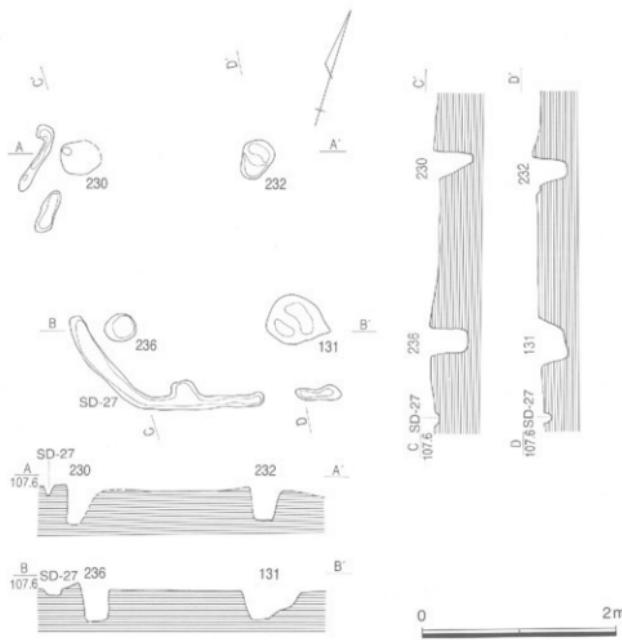
H-2から3グリッドの調査区境界脇の中部ローム上面で、炭化物を含み、粘性、しまり共に弱い暗褐色土の堆積が、平面的に確認された。これを掘り下げる結果、埋壺2基（SU-14・15）、壁溝1本（SD-28）、柱穴と見られる複数のビットが検出された。また、その南側では、炉の焼成面部分と見られる焼土の中（SL-32）が検出され、それを取り巻くように、埋壺1基（SU-16）、壁溝2本（SD-29・30）、柱穴と見られる複数のビットが検出された。SL-32では、安定した焼土集中層が2層確認された。古い焼土集中層の埋没後に新しい焼土集中層が形成されているので、この場所で2時期、炉が使用されていたことが想定できた。SL-32の新旧の焼土集中層の標高差から、焼成面の上昇すなわち、生活面の上昇が想定でき、新しい住居に所属する遺構は、古い住居に所属する遺構に比して、標高的に高いと判断され、これを根拠に柱穴の所属の決定を行った。



第27図 SB-23・24 (1)



第28図 SB-23・24 (2)



第29図 SB-25

これら住居を構成する遺構の組み合わせから、3軒の住居を設定し、最も北の住居をSB-26、SL-32の新しい焼土層を作ったと見られる住居をSB-27、古い焼土層を作ったと見られる住居をSB-28とした。

いずれの住居跡も、調査区境界により、東側が未調査のため、全体のプランは、確認されていない。

住居跡SB-26

SB-26は、南西側約1/4を検出したのみである。西側で断片的に検出されるSD-28からは、平面プランの形を特定するには至らない。住居を構成する遺構は、SD-28の外に、埋蔵SU-15、主柱穴と見られるピット2本SP-587・584の所属が、位置的に適当である。

炉 検出されなかった。北東側調査区外に位置すると見られる。

埋甕 SU-15は、住居の南側からSU-14と東西に並んで検出された(SU-15は、東側)。壁溝、柱穴との位置関係からSB-26に所属するのが適当であると認めた。曾利II式に比定される深鉢形土器の胴部が正位の状態で埋設されていた。土地の削平により、口縁部を失ったと見られる。残存する掘り方は、平面的には、北西—南東方向に長軸を持つ梢円形を呈し、最大径69cm、掘り方検出面から底面までの深さは、19cmである。

壁溝 SD-28は、西側で断片的に検出された。残存部は、幅16~25cm、深さ4~8cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-26の主柱穴は、SP-587・584の2本が該当すると見られる。SP-587は、不整形を呈し、最大径61cm、底面の最深部の標高は、107.089m。SP-584は、不整形を呈し、最大径41cm、底面の最深部の標高は、107.027mである。

住居跡SB-27

SB-27は、調査区境界により東側が未調査のため、西側約1/2を検出したのみである。所属する遺構は、SL-32、SU-14、SD-29、主柱穴と見られるピット3本SP-652・439・585が位置的に適当である。

炉 SL-32は、前述しているように、焼土集中層が2層検出され、上層の新しい焼土集中層が、SB-27の炉の焼成面または、被熱を受け変色した底の部分と見られる。SL-32の炉内覆土は、SB-28に所属する部分も含めて、次の5層に分けられる。第1層：焼土集中層(SB-27の時に発達した焼土集中層)、第2層：褐色土(少量の焼土粒、炭化物を含み、粘性無し、しまり弱い)、第3層：にぶい赤褐色土(焼土粒、炭化物、褐色ローム粒を含み、粘性無し、しまり有り)、第4層：焼土集中層(SB-28の時に発達した焼土集中層)、第5層：にぶい黄褐色土(被熱を受け、変色した地山のローム層と焼土集中層との漸移層。粘性無し、しまり有り)である。

残存する掘り方は、SB-28以来のものと見られ、平面的には不整梢円形を呈し、長径125cm、短径113cmである。炉石を置くために設けられたと見られるテラス状の段がほぼ一周しているのが確認できる。

埋甕 SU-14は、住居の北側からSU-15と東西に並んで検出された(SU-14は、西側)。曾利IVまたは、V式に比定される深鉢形土器の胴部が正位の状態で埋設されていた。土地の削平により、口縁部を失ったと見られる。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、最大径29cm、掘り方の検出面から底面までの深さは、28cmである。

壁溝 SD-29は、西側で断片的に検出され、一部SD-30と重複する。残存部は、幅16~20cm、深さ6~10cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-27の主柱穴は、SP-652・439・585の3本が該当すると見られる。南東側は、調査区外で検出されていないが、4本の柱が配置される住居であると考えられる。SP-652は、円形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、106.771m。SP-439は、円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、106.752m。SP-585は、不整形を呈し、最大径37cm、底面の最深部の標高は、106.786mである。

住居跡SB-28

SB-28もSB-27と同様、調査区境界により、西側約1/2を検出したのみである。所属する遺構は、SL-32、SU-16、SD-30、主柱穴と見られるビット1本SP-654が位置的に適当である。

炉 SL-32は、SB-27に所属する第1層焼土集中層を除き、第2層以下残存する掘り方を含め、SB-28の所属と見られる。掘り方検出面より第4層焼土集中層上面までの深さは、凡そ15cmである。

埋甕 SU-16は、住居の西側から大きく攢乱を受けた状態で検出された。曾利II式に比定される深鉢形土器で、口縁部の小片が胴下部の小片より高い位置で検出されているところから、正位の状態で埋設されていたと推定される。残存する掘り方は、円形を呈し、最大径40cm、掘り方検出面から底面までの深さは、42cmであるが、土器が埋設時の状態を保っていないこともあり、掘り方そのものが原形を留めているか否かは、疑問である。

壁溝 SD-30は、西側で断片的に検出された。SD-29との重複により、幅の特定は、できないが、残存部の深さは、8～13cmである。

柱穴 SB-28の主柱穴は、SP-654の1本が該当すると見られる。SP-654は、円形を呈し、最大径44cm底面の最深部の標高は、106.644mである。

住居跡SB-29・30（第32図）

I-1から2グリッドにかけ、中部ローム上面で粘性、しまり共に弱い暗褐色土の堆積が平面的に確認された。これを掘り下げた結果、炉2基（SL-14・15）とそれを中心に取り囲むようにして、埋甕2基（SU-1・20）、壁溝1本（SD-31）、柱穴と見られる複数のビットが検出され、2軒以上の住居の重複が想定された。炉石の配置を残すがSL-14を新しい住居の炉とし、炉石の配置を残していないSL-15を古い住居の炉として、これに位置的に対応する埋甕、壁溝、主柱穴と成り得るビットの組み合わせをそれぞれの住居の所属とした。結果、SU-1とSD-31は、新しい住居（SB-29）の所属に、SU-20は、所属住居跡不明となった。このほかに単独では、炉からの距離、位置的に主柱穴と成り得るビットが検出され、それらが建て替えの可能性を暗示しているが、前後関係、柱同士の組み合わせが特定できず、2基の炉に改築の痕跡が認められることから、住居跡の設定は、新旧2軒分（SB-29・30）に止めた。SD-31は、非常に断片的な検出であり、SB-29・30共に平面プランは、不明確である。

住居跡SB-29

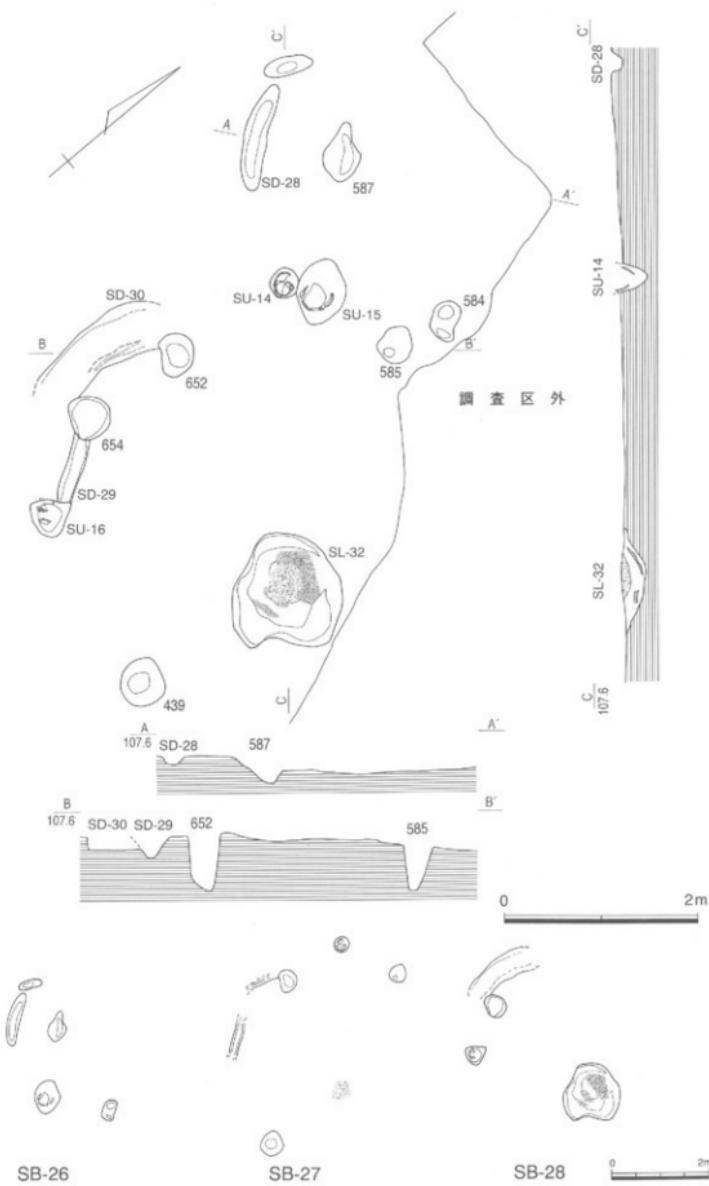
SB-29を構成する遺構は、炉SL-14、埋甕SU-1、壁溝SD-31、主柱穴と見られる4本のビットSP-446・493・450・444が位置的に適当である。

炉 SL-14は、炉石の配置を残す。長径20～40cm程度の板状の石を北と南側に1枚、西と東側にそれぞれ2枚ずつ立てて、長方形または、梢円形に配置する。残存する掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ梢円形を呈し、炉石を置くために設けたと見られるテラス状の段が確認できる。長径77cm、短径57cm、掘り方検出面から底面までの深さ24cmである。

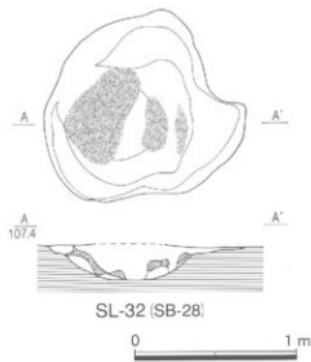
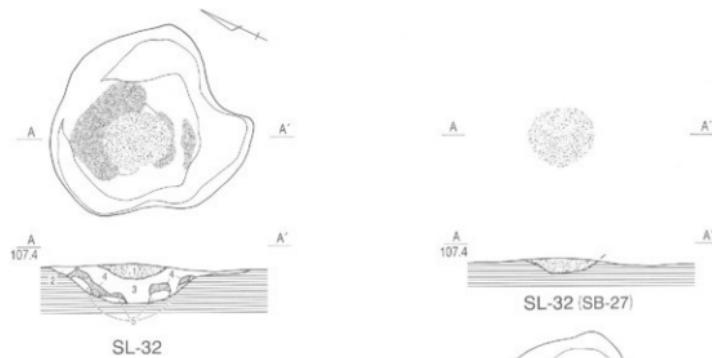
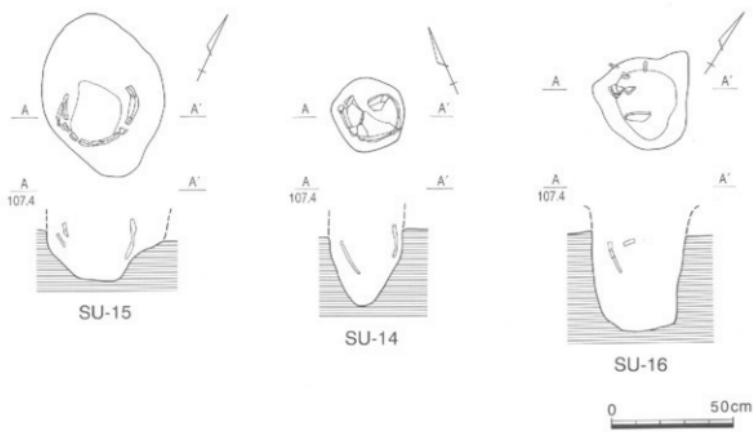
炉内覆土は、次の3層に分けられる。第1層：褐色土（炭化物を含み、粘性無し）、第2層：褐色土（地山に含まれる橙色バミスブロックを含み、粘性無し）、第3層：褐色土（粘性無し）である。炉石に被熱を示す赤い変色が認められているにも関わらず、この炉からは、焼土が検出されていない。

埋甕 SU-1は、住居の南東側から検出された。口縁部の一部と底部を欠いた曾利IV式に比定される深鉢形土器で、正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、不鮮明ながら梢円形を呈するものと見られ、最大径60cm程度、底面までの深さは、35cm程度である。

壁溝 SD-31は、SB-29の南東側で断片的に検出された。残存部は、長さ約0.9m、幅13～16cm、深さ7～8cmで、断面は、逆台形を呈す。



第30図 SB-26・27・28 (1)



第31図 SB-26・27・28 (2)

柱穴 SB-29の主柱穴は、SP-446・493・450・444の4本が該当すると見られる。SP-446は、円形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、106.538m。SP-493は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、106.459m。SP-450は、円形を呈し、最大径39cm、底面の最深部の標高は、106.524m。SP-444は、円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、106.505mである。

住居跡SB-30

SB-30を構成する遺構は、SL-15、主柱穴と見られるピット4本SP-448・499・495・447が位置的に適当である。

炉 SL-15は、主たる炉石は、抜き去られており、わずかに炉石の一部と見られる径約20cm板状の石が1枚残存する。残存する掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈し、北東と南側に炉石を置いた痕跡と見られる落ち込みが確認される。長径88cm、短径68cm、掘り方の検出面から焼土集中層上面までの深さは、凡そ12cmである。

炉内覆土は、焼土集中層も含め、次の4層に分けられる。第1層：黒色土、第2層：黒褐色土（焼土粒、炭化物を含む）、第3層：焼土集中層、第4層：黒褐色土である。

埋甕 検出されなかった。

壁溝 検出されなかった。

柱穴 SB-30の主柱穴は、SP-448・499・495・447の4本が該当すると見られる。SP-448は、楕円形を呈し、最大径58cm、底面の最深部の標高は、106.661m。SP-499は、楕円形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、106.613m。SP-495は、円形を呈し、最大径34cm、底面の最深部の標高は、106.609m。SP-447は、不整形を呈し、最大径70cm、底面の最深部の標高は、106.332mである。

住居跡SB-31・32・33（第33図）

F-イ・1からG-イ・1グリッドにかけ、中部ローム上面で、炭化物を含んだ暗褐色土の堆積が、平面的に確認された。これを掘り下げる結果、壁溝を持たない竪穴の住居と大小の壁溝が巡る住居の計3軒分の住居跡の平面プランが重複して検出された。土層断面の観察から、竪穴の住居、大きい壁溝（SD-37）が巡る住居、小さい壁溝（SD-38）が巡る住居の順で古くなり、それぞれをSB-31・32・33と設定した。重複する3軒の住居跡の平面プラン内では、炉3基（SL-11・16・27）、埋甕3基（SU-3・21・28）が検出された。この内、炉SL-27と埋甕SU-3は、検出された位置、標高から3軒の住居跡のいづれにも所属しないと判断された。その他の遺構は、炉SL-11、埋甕SU-21がSB-31に、炉SL-16がSB-32に、埋甕SU-28がSB-33に所属すると見られ、これらと住居の平面プランとの位置関係より、主柱穴として適当なピットを抽出した。

住居跡SB-31

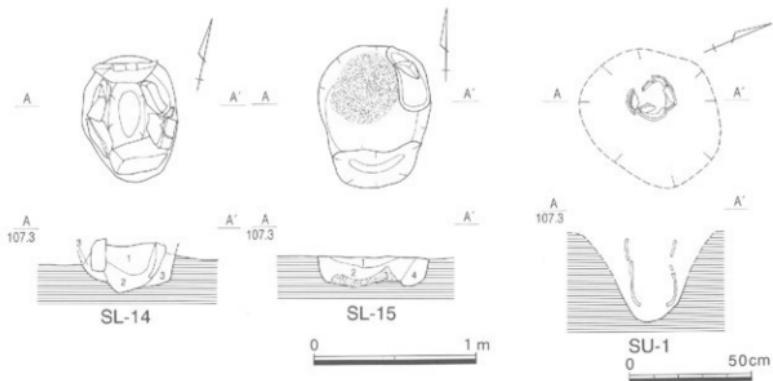
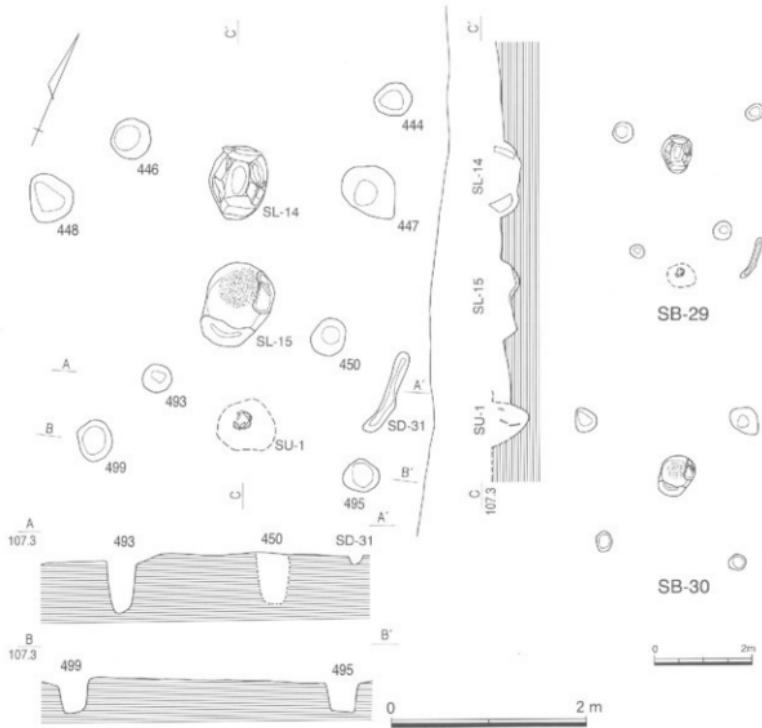
SB-31は、壁溝を持たない竪穴住居で、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、長径推定6.0m程度、短径推定4.3m程度であると見られる。

覆土は、炭化物を含む暗褐色土である。住居の中央部から東側にかけ、平面的に褐色のローム粒が集中して検出されたが、床面であるか否かは、不明である。掘り方の壁は、急激に立ち上がり、最も残存状況の良好な南西側の壁高は、27cmである。

SB-31を構成する遺構は、炉SL-11、埋甕SU-21、主柱穴と見られるピット4本SP-671・751・192・819が位置的に適当である。

炉 SL-11は、炉石の配置を残す。四方に長径40~50cm程度の板状の石を1枚ずつ立てて、方形に配置する。また、東側の炉石の接続部には、隙間を埋めるように、こぶし大の礫が数個検出されている。

残存する掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈し、炉石を置くために設けたと見



第32図 SB-29・30

られるテラス状の段が確認できる。長径103cm、短径85cm、掘り方検出面から焼土集中層上面までの深さは、凡そ15cmである。

炉内覆土は、焼土集中層も含め、次の4層に分けられる。第1層：暗褐色土（しまり強い）、第2層：暗褐色土（しまり弱い）、第3層：焼土集中層（焼土の残存状況は、劣悪で、径2～3cmの焼土ブロックが、しまりの弱い暗褐色土中に集中している状態）、第4層：暗褐色土（土相は、第2層に準ず）である。

埋壺 SU-21は、住居の北西側から検出された。曾利II式に比定される深鉢形土器の口縁部約1/2が正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈し、最大径68cm、掘り方検出面から底面までの深さは、37cmである。

壁溝 検出されなかった。

柱穴 SB-31の主柱穴は、SP-671・751・192・819の4本が該当すると見られる。南側に柱穴に相当するピットを検出していないが、5本の柱が配置される住居であると考えられる。SP-671は、円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、106.366m。SP-751は、楕円形を呈し、最大径45cm、底面の最深部の標高は、106.300m。SP-192は、円形を呈し、最大径63cm、底面の最深部の標高は、106.615m、SP-819は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、106.736mである。

住居跡SB-32

SB-32は、壁溝SD-37により、円または、隅丸方形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、最大径7.0mである。住居を構成する遺構は、SD-37の外にSL-16、主柱穴と見られるピット3本、SP-810・748・816が位置的に適当である。

覆土は、2層確認され、上層は、炭化物を含む暗褐色土。下層は、地山の黄褐色ロームをブロック状に含むにぶい黄褐色土で、下層上面は、この住居の床面に相当する可能性がある。

炉 SL-16は、炉石の配置を残す。長径30～40cm程度の偏平な丸砾を8枚、掘り方に対し、立てずに花弁状に巡るよう、円形に配置する。

残存する掘り方は、平面的には、円に近い不整形を呈し、底面からの壁の立ち上がりは、螺旋段状になっている。最大径135cm、掘り方検出面から底面までの深さは、51cmである。

炉内覆土は、次の6層に分けられる。第1層：暗褐色土（しまり弱い）、第2層：暗褐色土（地山のロームブロック、少量の炭化物を含み、しまり弱い）、第3層：暗褐色土（土相は、第2層に準ず）。第2層に比して地山のロームブロックを多く含む）、第4層：赤褐色土（焼土粒がブロック状に固まる）、第5層：暗褐色土（土相は、第2層に準ず）。焼土粒を含む）、第6層：暗褐色土（第2・3・5層に比して若干色調が暗い）。下層になるにつれて、ロームブロックの混入が多くなる。少量の炭化物を含み、しまり弱い）である。

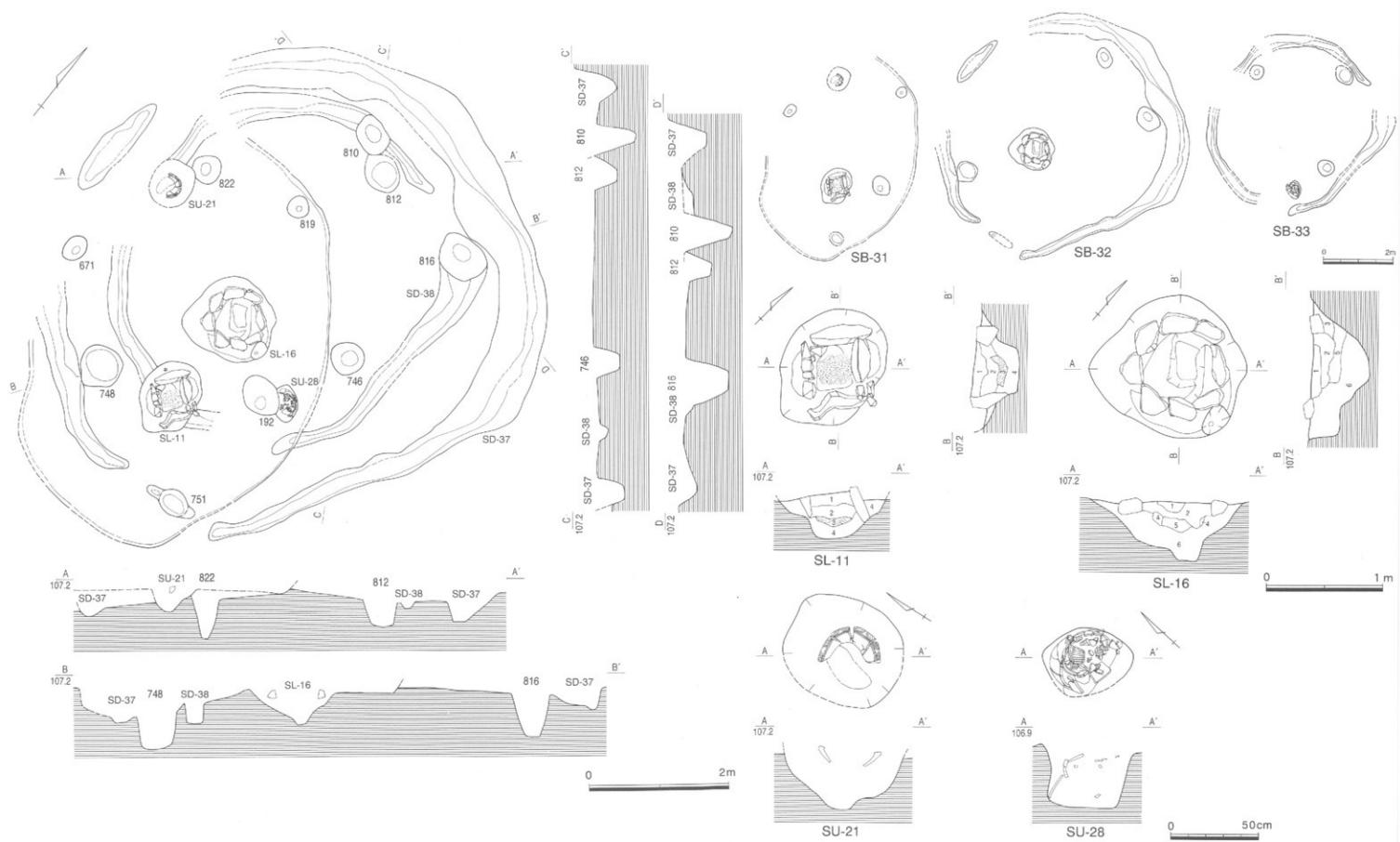
埋壺 検出されなかった。

壁溝 SD-37は、ほぼ一周分検出された。平面的には、円または、隅丸方形を呈す。残存部は、幅18～82cm、残存状況の最も良好な北西側では、壁の急激な立ち上がりが確認され、壁高は、検出面から壁溝底面まで54cmで、断面は、鈍いV字形を呈す。

柱穴 SB-32の主柱穴は、SP-810・748・816の3本が該当すると見られる。西と南東側に相当するピットを検出していないが、5本の柱が配置される住居であると考えられる。SP-810は、円形を呈し、最大径58cm、底面の最深部の標高は、106.206m。SP-748は円形を呈し、最大径63cm、底面の最深部の標高は、106.120m。SP-816は円形を呈し、最大径73cm、底面の最深部の標高は、106.280mである。

住居跡SB-33

SB-33は、SD-38により、円または、隅丸方形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、最大径5.3



第33図 SB-31・32・33

mである。SB-32に拡張される前の住居と見られ、床面、壁の立ち上がりは、確認できなかった。住居を構成する遺構は、SD-38のほかに、埋甕SU-28、主柱穴と見られるピット3本SP-822・812・746が位置的に適当である。

炉 検出されなかった。

埋甕 SU-28は、住居の南東側から検出された。胴部中位以下を欠いた曾利II式に比定される深鉢形土器が逆位の状態で埋設されていた。南西側がSB-31の東側主柱穴に相当するSP-192の切り合いを受けており、埋設時の土器の残存状況は、不明である。残存する掘り方は、平面的には、北西—南東方向に長軸を持つ橢円形を呈し、最大径53cm、掘り方検出面から底面までの深さは、38cmである。

壁溝 SD-38は、ほぼ一周分検出された。平面的には、円または、隅丸方形を呈す。残存部は、幅16~67cm、掘り方検出面から底面までの深さ7~34cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-33の主柱穴は、SP-812・822・746の3本が該当すると見られる。南側に相当するピットを検出してないが、4本の柱が配置される住居と考えられる。SP-812は、円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、106.333m。SP-822は、円形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、106.360m。SP-746は、円形を呈し、最大径46cm、底面の最深部の標高は、106.487mである。

住居跡SB-34・35（第34図）

F-ログリッド北側、北西から南東にかけ、緩やかに下る斜面上に堆積する黒色土の精査中、板状の安山岩疊の集中と、炉石の配置を残すSL-5が検出され、敷石を伴う住居跡SB-34を設定した。

さらに精査を続けた結果、SB-34の平面プランを決定する壁溝SD-39と、SB-34の重複により南側約3/5を失った壁溝SD-40、柱穴に相当すると見られる複数のピットが検出された。

また、SL-5の炉石の配置より外側で、被熱による土層の赤い変色が平面的に北へ拡がることが確認された。これは、SL-5構築以前に炉が使用された痕跡として考えられ、この場所を中心SD-40が巡る位置的関係から、SB-34より古い住居跡SB-35を設定した。

SL-5の炉石の配置（石匂い）内側では、焼土集中層の東西の脇に炉石を置いたと思わしき痕跡が見えることから、炉の規模の変化（改築）があったことが窺えた。SB-18・19・20の例を探り、炉の規模の変化を住居の規模の変化との連動と想定すると、SB-34より小形の住居が存在した可能性が考えられ、位置的に主柱穴に相当するピット（SP-664・668）も検出された。しかし、具体的な規模などを特定する要素が薄弱であり、住居跡としての設定は、見送った。

住居跡SB-34

住居跡SB-34は、前述の通り、敷石を伴う住居である。

敷石は、住居の西側で特に集中して検出されている。木の根などの擾乱により、原位置を留めているものは、多くないと見られるが、SD-39の際で、住居内側方向に流れ込んでいるかのような傾きを示すものが多数見られた。それぞれの敷石の状況は、表裏両面共に筋理がある板状のものや全面的に自然面を残す塊状のもの、大きさは、径30cmを超えるものから数cm大のものまでと様々である。石材は、遺跡近隣で採取可能な安山岩で、得に遺跡の北西側の山田川流域で採取できる紫蘇輝石斑晶が目立つ複輝石安山岩が主体を占める。

SB-34は、SD-39により、隅丸方形を呈する平面プランを持ち、その大きさは、最大径3.7mである。また、壁の立ち上がりは、確認できなかった。SB-34を構成する遺構は、SD-39のほかに、SL-5、主柱穴と見られるピット4本SP-662・666・669・665が位置的に適当である。

炉 SL-5は、前述の通り、炉石の配置を残す。西、北、東側に長径50~60cm程度の板状の石を立てるように配置する。また、南側に置かれたと見られる41×29cm、厚さ10cm程度の板状の石が炉の内側に倒

れ込んだ状態で検出された。

残存する掘り方は、方形を呈し、炉石を置くために設けたと見られる掘り込みやテラス状の段がそれぞれの炉石の下部で確認される。径75~80cm、掘り方検出面から最も新しい焼土集中層上面までの深さは、凡そ12cmである。

炉内覆土は、SB-35の時期に赤く変色したと見られる土層も含め、次の5層に分けられる。第1層：暗褐色土（多量の焼土粒、極少量の褐色スコリアを含み、粘性弱い、しまり有り）、第2層：褐色土（少量の焼土粒を含み、粘性無し、しまり有り）、第3層：焼土集中層、第4層：暗褐色土（少量の焼土粒を含み、粘性無し、しまり有り）、第5層：焼土集中層（第3層に比して色調が若干暗く、木の根による擾乱を受け、少量の黒色土が混入する。SB-34と35の炉のそれぞれの境界を特定することは、難しい）である。

埋甕 検出されなかった。

壁溝 SD-39は、ほぼ一周分検出された。平面的には、隅丸方形を呈す。残存部は、幅17~44cm、深さ8~19cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-34の主柱穴は、SP-662・666・669・665の4本が該当すると見られる。SP-662は、円形を呈し、最大径34cm、底面の最深部の標高は、105.860m。SP-666は、円形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、105.724m。SP-669は、円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、105.558m。SP-665は、円形を呈し、最大径44cm、底面の最深部の標高は、105.522mである。

住居跡SB-35

住居跡SB-35は、SD-40により、SB-34と同規模の隅丸方形の平面プランを持った住居と見られるが、北側を除いて、住居範囲の殆どにSB-34の重複を受ける。

SB-35を構成する遺構は、SD-40のほかに、SL-5の一部、主柱穴と見られるピット2本SP-663・667が位置的に適当である。

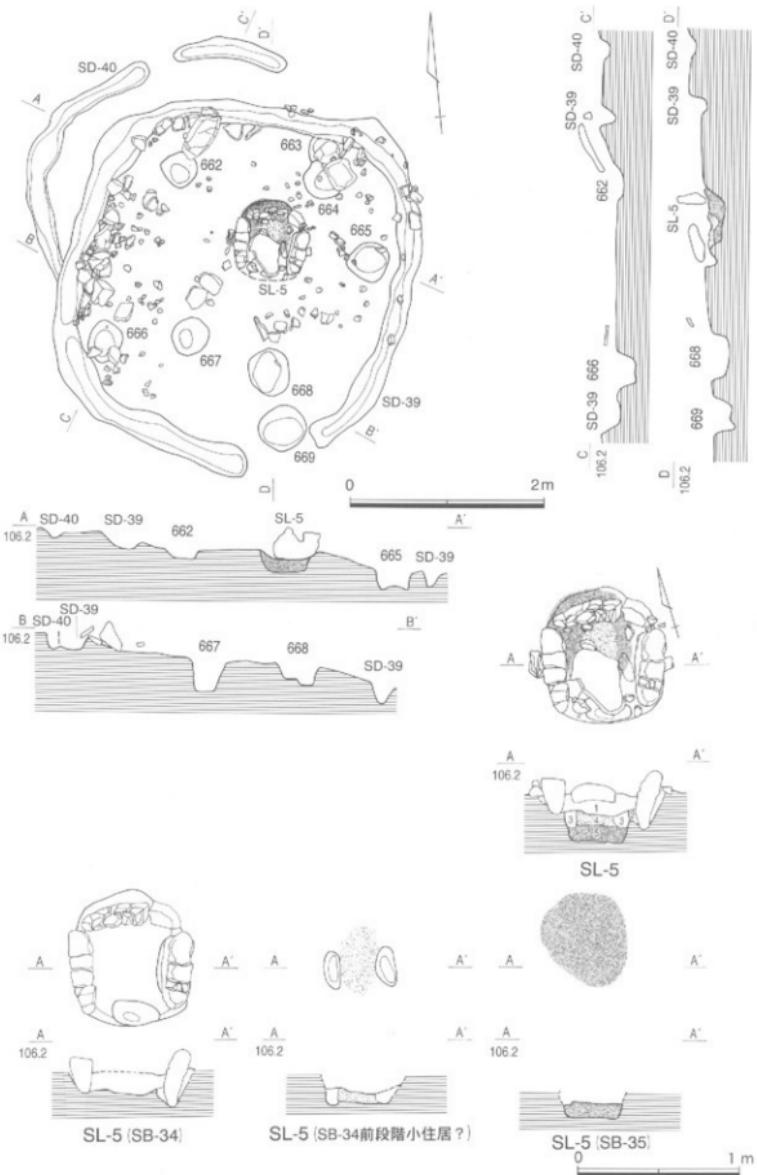
炉 SL-5炉内覆土第5層以下が相当すると見られる。SB-35に所属した炉の掘り方は、検出されなかった。炉の使用により発達したと見られる焼土の集中とその周辺の赤く変色した土層のみの検出である。

前述の通り、SB-34に所属する炉石の配置が平面的にこの焼土集中層と重複することから、炉の設置場所の若干の南側への移動が看取され、検出された壁溝から確認されるSB-35から34への建て替えの方向と一致する。

埋甕 検出されなかった。

壁溝 SD-40は、SB-34の重複により、南側約3/5を失う。SB-34に所属するSD-39同様、平面的には、隅丸方形を呈していたと見られる。残存部は、幅14~31cm、深さ8~14cmで、断面は、逆台形を呈す。

柱穴 SB-35の主柱穴は、SP-663・667の2本が該当すると見られる。北、西側では検出されていないが、SB-34同様、4本の柱が配置される住居であると考えられる。SP-667は、円形を呈し、最大径45cm、底面の最深部の標高は、105.519m。SP-663は、円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、105.759mである。



第34図 SB-34・35

第5表 住居跡計測表

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	住居所属遺構			柱穴	備考
				炉	埋甕	壁溝		
SB-1	E-7・8	不明	不明	—	SU-36	SD-1	—	
SB-2	F-7	楕円?	不明	—	—	—	SP-462 SP-463	
SB-3	F-6	不明	不明	SL-28	SU-30	—	SP-545 SP-361 SP-560	
SB-4	F-6	不明	不明	SL-8	SU-2	—	SP-357 SP-359 SP-563	
SB-5	F-6	不明	不明	SL-6	SU-31 SU-32	—	SP-543 SP-552 SP-356 SP-345	
SB-6	F-6	不明	不明	SL-7	SU-4	SD-4	SP-352 SP-28	
SB-7	F-6	不明	不明	—	SU-35	SD-8	—	
SB-8	F-5・6 G-5・6	円または 隅丸方	6.0×5.5	SL-33	SU-24	SD-11	SP-574 SP-706 SP-434 SP-830	SB-9・10より新 火災住居
SB-9	F-5・6 G-5・6	円または 隅丸方	5.1×4.8	SL-25	—	SD-12	SP-573 SP-831 SP-708 SP-407 SP-402	
SB-10	F-5・6 G-5・6	隅丸方	3.0×2.7	SL-24	—	—	SP-578 SP-579 SP-704 SP-703	敷石を伴う可能性が考えら れる
SB-11	G-5	楕円	[4.6] × [4.0]	SL-20	※	SD-13	SP-409 SP-376 SP-256 SP-850 SP-412 SP-710	※土器の検出は無いが位置 的にSP-451が埋甕の掘り方 に相当する可能性がある
SB-12	F-4・5	円	5.8×[5.5]	SL-17	SU-23	SD-14	SP-721 SP-724 SP-799 SP-770 SP-718	SB-13より新
SB-13	F-4・5	円	5.8×[5.5]	SL-17	SU-27	SD-14	SP-768 SP-769 SP-722	SB-12より古

番号	グリッド	平面形	規模(m)	住居所属遺構			柱穴	備考
				炉	埋甕	壁溝		
SB-14	F-4	楕円	5.9×[5.2]	SL-23	SU-26	SD-15	SP-772 SP-774 SP-787	SB-15より新
SB-15	F-4	円	最大値5.0	SL-18	SU-25	SD-15 SD-16	SP-777 SP-785 SP-780 SP-775	SB-14より古
SB-16	F-4 G-4	不明	不明	SL-21	SU-8	SD-17	SP-477 SP-776	SB-17より新
SB-17	F-4 G-4	楕円	[4.9]×[4.0]	SL-31	SU-7	SD-18	SP-480 SP-773	SB-16より古
SB-18	F-2・3 G-2・3	楕円	4.6×3.7	SL-2	SU-11	SD-21	SP-762 SP-679 SP-680	
SB-19	F-2・3 G-2・3	楕円	4.6×3.7	SL-2	※	SD-21	SP-766 SP-678 (SP-680)	※土器の検出は無いが位置的にSP-697が埋甕の掘り方に相当する可能性がある
SB-20	F-2・3 G-2・3	楕円	5.6×[4.5]	SL-2	※	SD-22	SP-698 SP-677 SP-765 SP-733 SP-730	※土器の検出は無いが位置的にSP-696が埋甕の掘り方に相当する可能性がある
SB-21	F-2 G-2	楕円	(6.4)×[5.0]	SL-1	SU-13	SD-23 SD-24	SP-764 SP-109 SP-103 SP-734 SP-110 SP-104 SP-681	
SB-22	F-2 G-2	楕円	(6.0)×(5.0)	SL-1	SU-12	SD-23	SP-682 SP-744 (SP-734) (SP-764) SP-107 SP-108 SP-105	
SB-23	G-2	楕円	(5.7)×[4.3]	SL-4	-	SD-25	SP-98 SP-234 SP-227 SP-240	
SB-24	G-2 H-2	楕円	[6.0]×[5.0]	SL-12	SU-17	SD-26	SP-101 SP-241 SP-738	
SB-25	H-2・3	円または 隅丸方	最大値(3.7)	-	-	SD-27	SP-230 SP-236 SP-131 SP-232	
SB-26	H-3	不明	不明	-	SU-15	SD-28	SP-587 SP-584	東側調査区境界により南西側約1/4の検出のみ
SB-27	H-2 I-2	不明	不明	SL-32	SU-14	SD-29	SP-652 SP-439 SP-585	東側調査区境界により西側約1/2の検出のみ
SB-28	H-2 I-2	不明	不明	SL-32	SU-16	SD-30	SP-654	東側調査区境界により西側約1/2の検出のみ

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	住居所属遺構			柱穴	備考
				炉	埋甕	壁溝		
SB-29	I-1・2	不明	不明	SL-14	SU-1	SD-31	SP-446 SP-493 SP-450 SP-444	
SB-30	I-1・2	不明	不明	SL-15	-	-	SP-448 SP-499 SP-495 SP-447	
SB-31	F-イ・1 G-イ・1	楕円	(6.0) × (4.3)	SL-11	SU-21	-	SP-671 SP-751 SP-192 SP-819	住居の竪穴の掘り方に壁溝は検出されず
SB-32	F-イ・1 G-イ・1	円または 隅丸方	最大径7.0	SL-16	-	SD-37	SP-810 SP-748 SP-816	
SB-33	F-イ・1 G-イ・1	円または 隅丸方	最大径5.3	-	SU-28	SD-38	SP-822 SP-812 SP-746	
SB-34	F-口	隅丸方	最大径3.7	SL-5	-	SD-39	SP-662 SP-666 SP-669 SP-665	敷石を伴う住居
SB-35	F-口	隅丸方	不明	SL-5	-	SD-40	SP-663 SP-667	SB-34と同規模か?

[] 内の数値は推定

第3節 その他の遺構

住居の一部または、所属施設ながら、他に同じ住居内のものと見られる遺構が見つからなかった単独検出の炉、埋甕、壁溝と土坑、住居の柱穴の配置として矛盾の無いピットの並び(本報告書では、「柱穴並び」と称す)、1区以外で検出された遺構を以下にまとめた。中には、元々、住居外に構築、埋設された、いわゆる屋外炉、屋外埋甕などを含んでいる可能性があるが、それらを分別、特定する要素が乏しいため、一括して取り扱うこととする。

所属住居跡不明炉（第35図）

炉跡の掘り方、焼土集中層、炉石を残しつつも、これを中心とした柱穴の配置、壁溝の巡回が見つからない8例の内、住居跡SB-6の項で言及した炉SL-30を除いた7例について、以下にまとめた。

炉SL-22

SL-22は、F-8グリッド北東側の中部ローム層上面で検出された。上面は、大きく削平されており、炉石の配置は、残していない。

残存する掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈し、長径65cm、短径47cm、検出面から底面までの深さは15cmである。

炉内覆土は、次の2層に分けられる。第1層：焼土集中層(少量の炭化物を含む)、第2層：褐色土(焼土粒を含む)である。

炉SL-26

SL-26は、F-6グリッド北東側の中部ローム層上面、SB-7の西側プラン内で検出された。上面は、大きく削平されており、炉石の配置を残していないが、北側で、炉石を置くために設けたと見られる掘り込みが確認された。

掘り方は、不明瞭であるが、平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈すると見られ、最大径は、推定110cm程度、検出面から底面までの深さは、12cmである。

炉内覆土は、焼土集中層も含めて、次の3層に分けられる。第1層：搅乱土、第2層：焼土集中層、第3層：褐色土(スコリアを含む)である。

炉SL-10

SL-10は、F-5グリッド南部、SB-12の覆土中、SL-17の南西側約1.5m先で検出された。炉のほぼ中央に後世の掘り込みによる搅乱を受ける。

掘り方は、平面的には、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈すると見られ、長径推定110cm、残存する短径は、92cm、検出面から、焼土集中層上面までの深さは、20cmである。

炉内覆土は、焼土集中層も含めて、次の2層に分けられる。第1層：暗褐色土(多量の焼土粒、炭化物、ローム粒を含む)、第2層：焼土集中層である。

炉SL-9

SL-9は、G-4グリッド北西側、中部ローム層上面、SB-16の炉SL-21の南側約1.5m先で検出された。上面は、大きく削平されており、炉石の配置を残していないが、北側で、炉石を置くために設けたと見られる掘り込みが土層断面上で確認された。

掘り方は、不明瞭であるが、平面的には、円形を呈するものと見られ、残存部の最大径は、45cm程度、検出面から焼土集中層上面までの深さは、凡そ10cm程度である。

炉内覆土は、焼土集中層も含めて、次の2層に分けられる。第1層：暗褐色土(焼土粒、炭化物を含

む)、第2層：焼土集中層である。

炉SL-19

SL-19は、G-4 グリッド北西側、中部ローム層上面、SB-17に所属する埋甕SU- 7の北西隣で検出された。上面は、大きく削平されており、炉石の配置を残していないが、南側で、炉石を置くために設けたと見られる掘り込みが確認された。

掘り方は、平面的には、円形を呈するものと見られ、残存部の最大径は、56cm、検出面から底面までの深さは、17cmである。

炉内覆土は、次の5層に分けられる。第1層：暗褐色土(焼土粒、少量の炭化物を含む)、第2層：暗褐色土(少量の焼土粒、多量の炭化物を含む)、第3層：暗褐色土(多量の焼土、少量の炭化物を含む)、第4層：褐色土(極少量の焼土粒を含む)、第5層：暗褐色土(焼土粒、ローム粒を含む)である。

炉SL-3

SL-3は、F-4 グリッド南側の中部ローム層上面で検出された。西側半分は、後世の畑地境界の際のため、削平され、残存部も木の根により、大きく攪乱を受けていた。南側に長径50cm、厚さ10cm程度、掘り方内に長径30cm、厚さ15cm程度の炉石が検出されたが、共に原位置を留めていない。

掘り方は、平面的には、梢円形を呈するものと見られ、残存部の最大径は、67cm、検出面から底面までの深さは、20cmである。

炉内覆土は、次の3層に分けられる。第1層：攪乱土、第2層：暗褐色土(多量の焼土粒を含む)、第3層：攪乱土である。

炉SL-27

SL-27は、G-4 グリッド北側、SB-31・32・33のプラン内で検出された。炉石の配置を残していないが、西側で、炉石を置くために設けたと見られるテラス状の段が確認された。

残存する掘り方は、不整円形を呈し、最大径106cm、検出面から焼土集中層までの深さは、凡そ18cm程度である。

炉内覆土は、焼土集中層も含め、次の3層に分けられる。第1層：黒褐色土(炭化物、赤褐色スコリアを含む)、第2層：焼土集中層(黒色土を含む)、第3層：にぶい黄褐色土(黒色土と地山と同じローム粒の混合層。炭化物を含む)である。

所屬住居不明埋甕 (第36図)

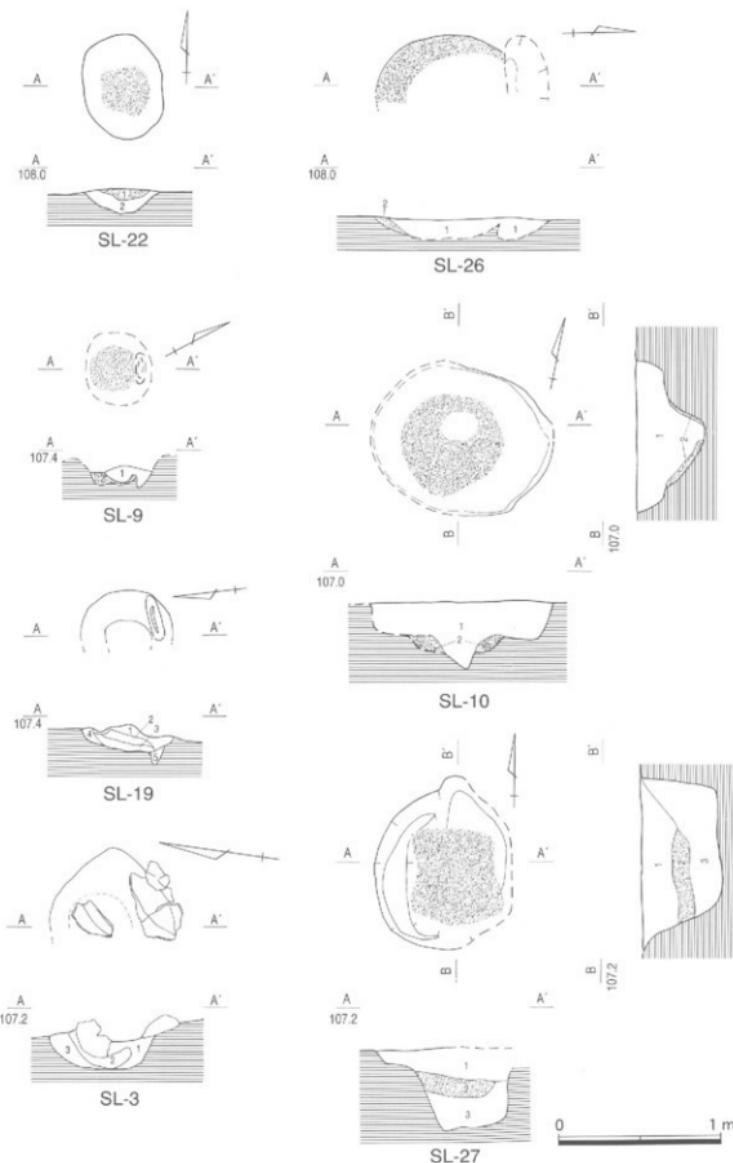
所属する住居跡を特定できない埋設されたと見られる土器10例について、以下にまとめた。

埋甕SU-5

SU-5は、E-8 グリッド南東側、中部ローム層上面で検出された。胴部下位のみ残す曾利式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。土地の削平により土器上部を失ったと見られる。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、最大径34cm、掘り方検出面から底面までの深さ18cmである。

埋甕SU-34

SU-34は、F-8 グリッド南西側、中部ローム層上面で検出された。底部を欠いた曾利III式に比定される壺形土器が二つに大きく割れた状態で出土した。残存する掘り方は、平面的には、梢円形を呈し、最大径41cm、掘り方検出面から底面までの深さ57cmである。一見、柱穴跡に土器が落ち込んだ印象を受けるが、大きな二つの割部片が外面同士を合わせるような不自然な重なり方をしていたため、埋設されたものと判断し、埋甕に認定した。



第35図 所属住居不明炉

第6表 炉計測表

番号	グリッド	炉石の残存状況	掘り方(cm)		深さ(cm) (検出面から 焼土上面)	所属居跡	備考
			平面形	最大径			
SL-1	F-2	枕状の石を配置 内側からも出土	椭円	127	15 ※41	SB-21 SB-22	
SL-2	F-2	板状の石を方形に配置	方	90	30	SB-18・19・20	
SL-3	F-4	残存するが原位置を留めず	椭円	67	※20	不明	
SL-4	G-2	板状の石を椭円または長方形に配置	椭円	103	31	SB-23	
SL-5	F-口	板状の石を立てて配置	方	80	12	SB-34・35	
SL-6	F-6	—	椭円	104	20	SB-5	
SL-7	F-6	—	椭円	88	15	SB-6	SL-30を壊して作られている
SL-8	F-6	板状の石を立てて配置	椭円	67	※18	SB-4	
SL-9	G-4	—	円	45	10	不明	SB-16・17プラン内で検出
SL-10	F-5	—	椭円	[110]	20	不明	
SL-11	G-イ	板状の石を立てて配置	椭円	103	15	SB-31	
SL-12	G-2	残存するが現位置を留めず	椭円	136	15~20	SB-24	
SL-14	I-2	板状の石を長方形または椭円形に配置	椭円	77	※24	SB-29	
SL-15	I-2	板状の石が一枚残存	椭円	88	12	SB-30	
SL-16	G-イ	丸礫を円形に配置	不整	135	※51	SB-32	
SL-17	F-5	板状の石を立てて配置	隅丸方	120	20	SB-12・13	
SL-18	F-4	—	不整	[100]	15	SB-15	SL-23の重複を受ける
SL-19	G-4	—	円	56	※17	不明	SB-16・17プラン内で検出
SL-20	F-5	板状の石を立てて配置	円	71	10	SB-11	
SL-21	F-4 G-5	—	椭円	74	10	SB-16	SL-31を壊して作られている
SL-22	F-8	—	椭円	65	※15	不明	
SL-23	F-4	板状の石を立てて配置	隅丸方	[100]	15	SB-14	SL-18を壊して作られている
SL-24	F-6	—	円	70	18	SB-10	
SL-25	F-5・6	—	椭円	[90]	※16	SB-9	
SL-26	F-6	—	椭円	[110]	※12	不明	
SL-27	G-イ	—	不整円	106	18	不明	SB-31・32・33プラン内で検出
SL-28	F-6	—	椭円	76	※25	SB-3	
SL-30	F-6	—	椭円	100	15	SB-6	SL-7の重複を受ける
SL-31	F-4 G-5	—	椭円	[115]	※18	SB-17	SL21の重複を受ける
SL-32	I-2	—	不整椭円	125	☆15	SB-27・28	☆SB-28の焼土上面までの深さ
SL-33	F-5・6	—	[椭円]	[140]	※35	SB-8	

〔 〕内は推定
※掘り方の深さ

埋甕SU-29

SU-29は、G-5 グリッドの北東側の中部ローム層上面、SB-11に所属する炉SL-20の北側約30cmの場所で検出された。口縁部と胸部下位以下を欠いた加曾利 E 3式に比定される深鉢形土器が埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、梢円形を呈し、最大径29cm、掘り方検出面から底面までの深さ25cmである。

埋甕SU-9

SU-9は、F-5 グリッド南東側、住居跡SB-12の覆土内、SB-12に所属する炉SL-17の北側約40cmの場所で検出された。口縁部の一部を欠いた曾利III式に比定される壺形土器が正位の状態で埋設されていた。掘り方は、中部ローム層上面に掘り込まれていた部分のみ確認された。残存部は、平面的には、円形を呈し、最大径20cm、掘り方検出面から底面までの深さ8cmである。

埋甕SU-10

SU-10は、G-4 グリッド北東側の中部ローム層上面、SB-16に所属するSU-8 の北側約50cmの場所で検出された。胸部中位以上を欠いた曾利 I 式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には円形を呈し、最大径17cm、掘り方検出面から底面までの深さ10cmである。

埋甕SU-22

SU-22は、H-2 グリッド南側、中部ローム層上面で検出された。東側約1.5m先には、SU-20、南側約2.5m先には、SB-29・30がある。胸部上位以上と底部を欠いた加曾利 E 3式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。土地の削平により、土器上部を失ったと見られる。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、最大径44cm、掘り方検出面から底面までの深さ19cmである。

埋甕SU-20

SU-20は、H-2 からI-2 グリッドにかけて、中部ローム層上面で検出された。SB-30に所属する炉SL-15との距離的関係から、この住居の所属とすることに平面的には問題無いが、標高の比差が若干大きいため、所属は不明とした。頸部以上を欠いた曾利II式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。土地の削平により、土器の上部を失ったと見られる。残存する掘り方は、平面的には、北西一南東方向に長軸を持つ不整梢円形を呈し、最大径72cm、掘り方検出面から底面までの深さ17cmである。

埋甕SU-18

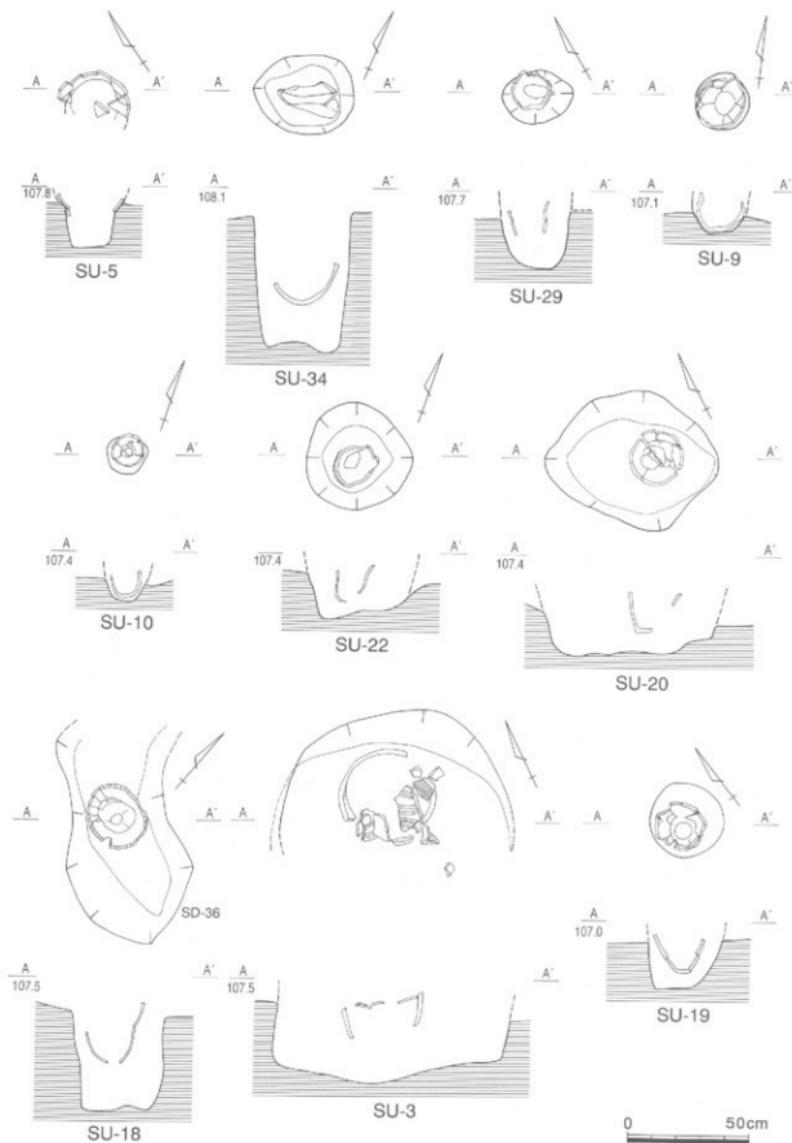
SU-18は、H-1 グリッド、SD-36の覆土内で検出された。胸部下位以下を欠いた曾利II式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。SU-18の掘り方は、SD-36の覆土内で、平面的にも、断面的にも明確でなかった。この埋甕がSD-36を持つ住居に伴うものであるか否かは、不明である。

埋甕SU-3

SU-3は、G-1 グリッド南側、SB-32の覆土内で検出された。SB-32に所属する炉SL-16との標高の比差が大きいため、住居の所属は、不明とした。頸部以上と胸部下位以下を欠いた曾利II式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。掘り方は、南側プランが不明瞭なため、平面形は、定かでないが、円または、梢円形を呈するものと見られる。残存部の最大径95cm、掘り方検出面から底面までの深さ32cmである。

埋甕SU-19

SU-19は、F-1グリッド北側、SF-7 の覆土内で検出された。胸部中位以上を欠いた加曾利 E 3式に比定される深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。残存する掘り方は、平面的には、円形を呈し、最大径31cm、掘り方検出面から底面までの深さ19cmである。



第36図 所属住居不明埋甌

第7表 埋壟計測表

SU 番号	グリ ッド	器種	土器型式	残存状況	理設 方向	掘り方(cm)				考 察
						平面形	最大径	深さ	所属 住居跡	
1	F-1	深鉢	曾利Ⅳ	口縁部の一部と底部を欠く	正位	橢円	[60]	35	SB-29	
2	F-6	深鉢	曾利Ⅳ	口縁部から胴部中位と底部を欠く	正位	円	[23]	12	SB-4	
3	G-1	深鉢	曾利Ⅱ	頭部以上と胴部下位以下を欠く	正位	円または 橢円	95	32	不明	
4	F-6	深鉢	曾利Ⅲ	胴部上位まで欠く	正位	円	[30]	15	SB-6	
5	E-8	深鉢	曾利Ⅰ～Ⅲ	胴部下位のみ残存	正位	円	[34]	18	不明	
7	G-4	深鉢	加曾利E3	胴部中位のみ残存	正位	円	24	15	SB-17	
8	G-4	深鉢	曾利Ⅲ	口縁部の一部を欠く	正位	円	27	34	SB-16	
9	F-5	壺	曾利Ⅲ	口縁部の一部を欠く	正位	円	20	8	不明	
10	G-4	深鉢	曾利Ⅰ	胴部中位以上を欠く	正位	円	17	10	不明	
11	F-3	深鉢	加曾利E3	底部を欠く	正位	円	27	26	SB-18	
12	G-2	深鉢	曾利Ⅱ	口縁部の一部を欠く	正位	橢円	37	56	SB-22	
13	G-2	深鉢	曾利Ⅱ	胴部一部残存	正位	橢円	41	21	SB-21	
14	H-2	深鉢	曾利Ⅳ またはV	胴部のみ残存	正位	円	29	28	SB-27	
15	H-2・3	深鉢	曾利Ⅱ	胴部のみ残存	正位	橢円	69	19	SB-26	
16	H-2	深鉢	曾利Ⅱ	底部を欠く	正位	円	40	42	SB-28	
17	G-2	深鉢	曾利Ⅳ	底部を欠く	正位	円	[30]	22	SB-24	
18	H-1	深鉢	曾利Ⅱ	胴部下位以下を欠く	正位	—	—	—	不明	SD-36内にて検出
19	F-イ	深鉢	加曾利E3	胴部中位以上を欠く	正位	円	31	19	不明	
20	H-2	深鉢	曾利Ⅱ	頭部以上を欠く	正位	不整橢円	72	17	不明	
21	F-イ	深鉢	曾利Ⅱ	口縁部約1/2残存	正位	橢円	68	37	SB-31	
22	H-2	深鉢	加曾利E3	胴部上位以上、底部を欠く	正位	円	44	19	不明	
23	F-4	深鉢	曾利Ⅲ	口縁部の一部、底部を欠く	正位	円	47	26	SB-12	
24	G-5	深鉢	加曾利E3	口縁部を欠く	正位	橢円	57	26	SB-8	
25	F-4 G-5	深鉢	曾利Ⅲ	口縁部と底部を欠く	正位	橢円	55	25	SB-15	
26	F-4	深鉢	曾利Ⅲ	底部下位以下を欠く	正位	円	43	27	SB-14	
27	F-4	深鉢	曾利Ⅱ	胴部一部のみ残存	不明	円	35	22	SB-13	
28	G-イ	深鉢	曾利Ⅱ	胴部中位以下を欠く	逆位	橢円	53	38	SB-33	土器はSP-192により壊されたものと見られる
29	G-5	深鉢	加曾利E3	口縁部と胴部下位以下を欠く	正位	橢円	29	25	不明	
30	F-6	深鉢	曾利	口縁部から胴部中位、底部を欠く	正位	円	34	15	SB-3	
31	F-6	深鉢	曾利Ⅲ	底部を欠く	正位	円	38	28	SB-5	SU-32と入れ子状態 (内側)
32	F-6	深鉢	曾利Ⅲ	胴部中位以下を欠く	正位	円	38	28	SB-5	SU-31と入れ子状態 (外側)
34	F-8	壺	曾利Ⅲ	底部を欠く	不明	橢円	41	57	不明	二つの胴部片が不自然な重なり方で出土したため埋設されたと判断
35	G-6	深鉢	曾利Ⅳ	底底部を欠く	不明	円	[50]	[30]	SB-7	
36	E-7	深鉢	曾利Ⅲ	口縁部と底部を欠く	正位	円	[17]	13	SB-1	

〔 〕内の数値は推定
SU-6・33は欠番

所属住居跡不明壁溝（第37・38図）

壁溝の一部が検出されたものの、住居の全体のプランや、同じ住居に所属したと見られる炉、埋廬、柱穴に相当するピットが検出されなかったり、組み合わせが特定できず、住居跡として認定ができなかつた12例について以下にまとめた。

壁溝SD-2

SD-2は、SB-1の重複により北側を失う。湾曲の方向から、住居の東側の壁溝に相当すると見られる。残存部は、長さ約2.5m、幅25~30cm、深さ4~15cmで、断面は、U字形を呈す。

壁溝SD-3

SD-3は、SB-2の重複により北側を失う。わずかに残る湾曲の方向から、住居の東側の壁溝に相当すると見られる。残存部は、長さ約1.3m、幅50cm、深さ13~18cmで、断面は、逆台形を呈す。

壁溝SD-5

SD-5は、F-6グリッド中央、中部ローム層上面で検出された。南側は、SB-5に所属する埋廬SU-31・32の掘り方の重複を受け、失われている。残存部は、長さ約0.9m、幅22~27cm、深さ8cm前後で、断面は、逆台形を呈す。

壁溝SD-6

SD-6は、F-6グリッド中央、中部ローム上面、SD-5の南側で検出された。残存部は、長さ約1.7m、幅12~23cm、深さ10cm前後で、断面は、逆台形を呈す。

壁溝SD-10

SD-10は、F-5~6グリッドの中ローム上面で検出された。南北方向に断続的に続き、残存部は、長さ約5.0m、幅8~15cm、深さ4~10cmで、断面は、U字形を呈す。

壁溝SD-19・20

SD-19・20は、G-4グリッド南西側、中部ローム層上面で検出された。共に湾曲の方向から住居の南東側の壁溝に相当すると見られる。内(西)側のSD-19が、外(東)側のSD-20に重複している。西隣にSB-14・15がある。残存部の深さは、SD-19は、最大22cm、SD-20は最大12cmであり、断面は、それぞれ逆台形を呈すると見られる。

壁溝SD-32

SD-32は、F-2グリッド南側、調査1・2区境界付近の中部ローム層上面で検出された。西側は、大きな擾乱を受けているため、極めて断片的な遺存状況であるが、わずかに残る湾曲の方向から、住居の東側の壁溝に相当すると見られる。残存部は、長さ南北方向に約1.2m、幅22~32cm、深さ35cm前後で、断面は、逆台形を呈す。

壁溝SD-33

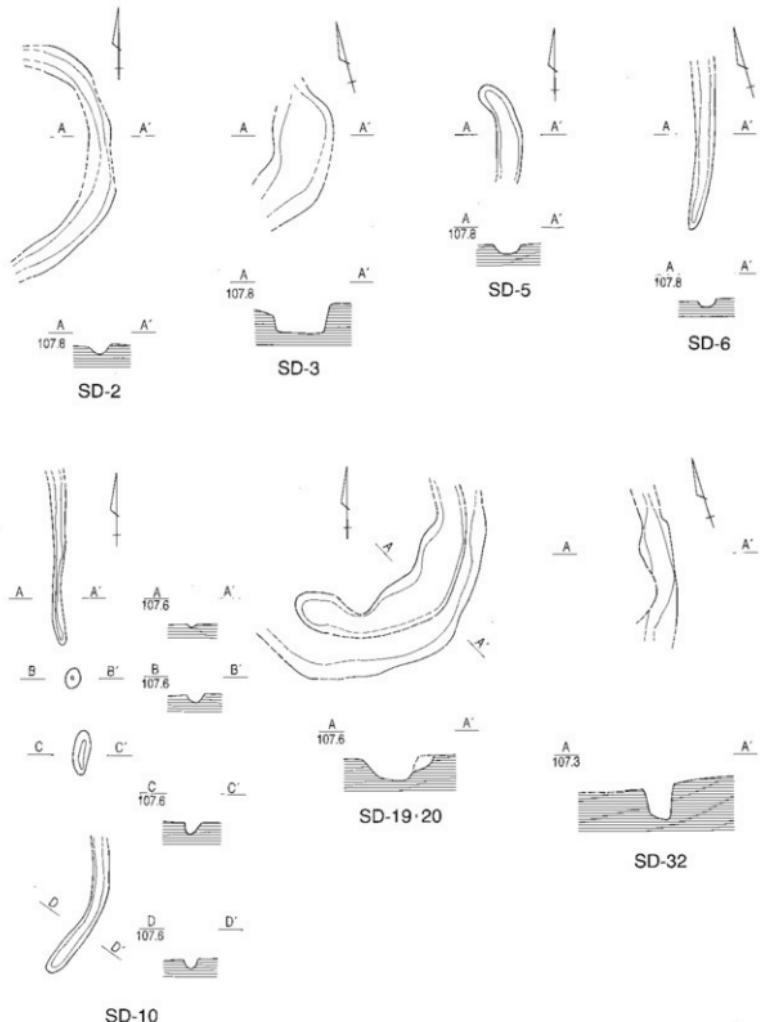
SD-33は、G-1グリッドの中央より北西側、北から南へかけて緩やかに下る傾斜地の中部ローム層上面で、南北二つに分かれて検出された。湾曲の方向から、住居の東側の壁溝に相当すると見られる。東隣にSD-34、南東側約1m先にSD-35、南側約1.5m先にSB-32がある。残存部は、北側の長さ約2.1m、南側の長さ約2.3m、幅12~29cm、深さ7~15cmで、断面は、逆台形を呈す。

壁溝SD-34

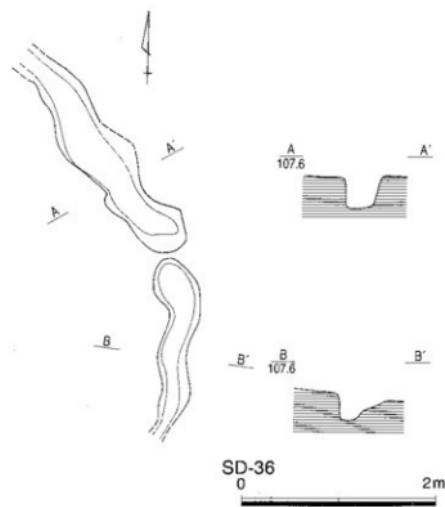
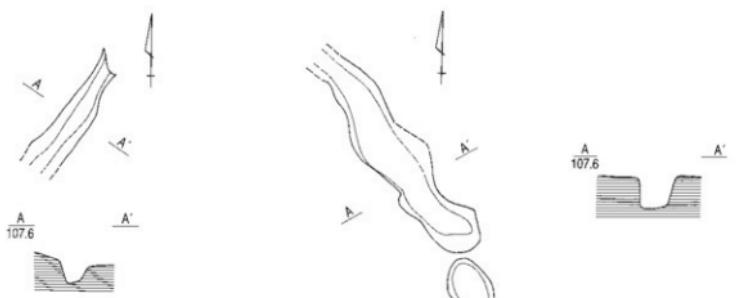
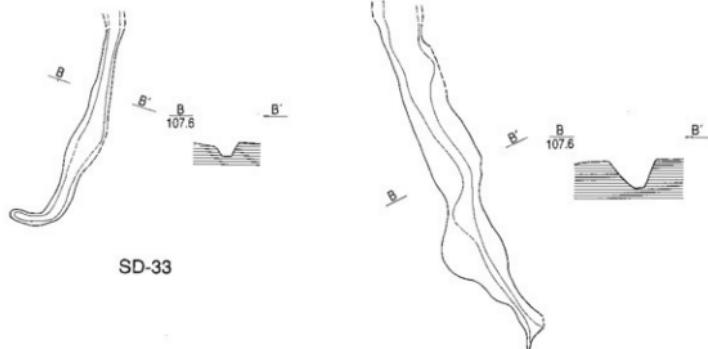
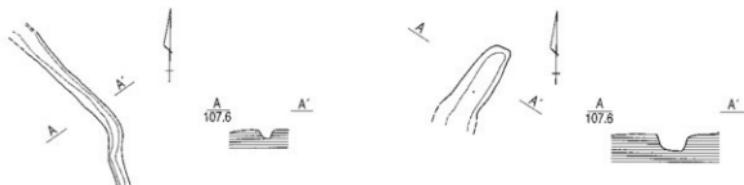
SD-34は、G-1~2グリッドの中部ローム層上面で検出された。湾曲の方向から住居の西側の壁溝に相当すると見られる。西隣にSD-33、南隣にSD-35、南側約3m先にSB-32がある。残存部は、長さ南北方向に約5.3m、幅14~65cm、深さ11~28cmで、断面は、逆台形を呈す。

壁溝SD-35

SD-35は、G-1グリッド中央、中部ローム層上面で検出された。わずかに残る湾曲の方向から、住居



第37図 所属住居不明壁溝（1）



第38図 所属住居不明壁溝（2）

の南東側の壁溝に相当すると見られる。北隣にSD-34、北西側約1m先にSD-33、南側約1m先に住居跡SB-32がある。残存部は、長さ約1.2m、幅19~41cm、深さ22~26cmで、断面は、逆台形を呈す。

壁溝SD-36

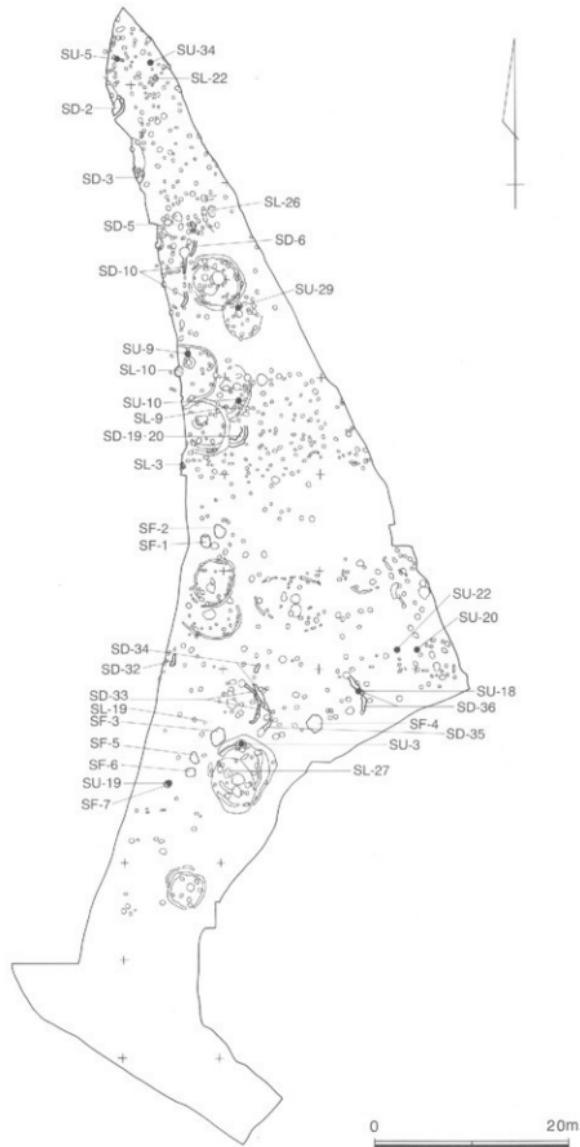
SD-36は、H-1グリッド北側の中部ローム層上面で、南北二つに分かれて検出された。湾曲の方向から、住居の東側の壁溝に相当すると見られる。残存部は、北側の長さ約2.4m、南側の長さ約1.7m、幅19~48cm、深さ22~39cmで、断面は、方形または、逆台形を呈す。

北側の壁溝の南の覆土から、埋甕SU-18が検出されているが、SU-18の掘り方と溝内覆土を分ける土層の差は、確認できなかった。SD-36とSU-18が同じ住居に所属していたか否かは、不明である。

第8表 壁溝計測表

番号	グリッド	幅(cm)	深さ(cm)	断面形	所属住跡
SD-1	E-8	19~30	35	U字形	SB-1
SD-2	E-7	25~30	4~15	U字形	不明
SD-3	F-7	50	13~18	逆台形	不明
SD-4	F-6	18~36	8	U字形	SB-6
SD-5	F-6	22~27	8	逆台形	不明
SD-6	F-6	12~23	10	逆台形	不明
SD-8	F-6	23~34	5~10	U字形	SB-7
SD-10	F-5	8~15	4~10	U字形	不明
SD-11	F-5・G-5・6	14~40	5~15	逆台形	SB-8
SD-12	F-5・G-5・6	11~54	10	逆台形	SB-9
SD-13	F-5・G-5・6	20	3~4	逆台形	SB-11
SD-14	F-4・5	14~29	16~18	逆台形	SB-12,13
SD-15	F-4	24~75	12~20	逆台形	SB-14
SD-16	F-4	18~38	10	逆台形	SB-15
SD-17	G-4	16~52	10	逆台形	SB-16
SD-18	G-4	35~47	10~15	逆台形	SB-17
SD-19	G-4	50	22	逆台形	不明
SD-20	G-4	不明	12	逆台形	不明
SD-21	F-2・3,G-2	8~30	6~27	逆台形	SB-18,19
SD-22	F-2,G-2	3~24	2~20	逆台形	SB-20
SD-23	F-2,G-2	9~23	3~23	逆台形	SB-21
SD-24	F-2,G-2	8~19	6~13	逆台形	SB-21,22
SD-25	G-2	9~23	4~16	逆台形	SB-23
SD-26	G-2	6~21	4~14	逆台形	SB-24
SD-27	H-2	7~20	2~12	逆台形	SB-25
SD-28	H-3	16~25	4~8	逆台形	SB-26
SD-29	H-2	16~20	6~10	逆台形	SB-27
SD-30	H-2	不明	8~13	不明	SB-28
SD-31	I-1・2	13~16	7~8	逆台形	SB-29
SD-32	F-2	22~32	35	逆台形	不明
SD-33	G-1	12~29	7~15	逆台形	不明
SD-34	G-1・2	14~65	11~28	逆台形	不明
SD-35	G-1	19~41	22~26	逆台形	不明
SD-36	H-1	19~48	22~39	逆台形	不明
SD-37	G-イ・1,F-イ・1	18~82	54	V字形	SB-32
SD-38	G-イ・1,F-イ・1	16~67	7~34	逆台形	SB-33
SD-39	F-口	17~44	8~19	逆台形	SB-34
SD-40	F-口	14~31	8~14	逆台形	SB-35

SD-7,SD-9は欠番



第39図 その他の遺構配置図

柱穴並び（第47図）

土地の削平、擾乱により、炉、壁溝などを消失した住居跡の柱穴の配置を残していると思われるピットの集中16例について、便宜上「柱穴並び」の名称を用い、以下にまとめた。底面の標高、大きさが同規模の複数のピットが平面的に住居の柱穴の配置として矛盾無く巡る状態の抽出であるため、あくまでも住居の可能性を指摘するという段階に止まるものであり、ピットの検出状況が過密で、組み合わせが幾通りも考えられる場合については、本項より除外した。なお、これらのピットの検出面は、いずれも中部ローム層上面である。

柱穴並びSN-1・2（第40図）

SN-1・2は、E-8からF-7～8グリッドにかけ位置する。SN-1は、6本のピット（SP-289・287・286・424・427・393）、SN-2は、5本のピット（SP-281・432・264・269・SU-34の掘り方）の組み合わせであり、南西側約3m先には、SB-1がある。

SN-1を構成するSP-289は、不整形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、107.570m。SP-287は、楕円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、107.539m。SP-286は、円形を呈し、最大径45cm、底面より最深部の標高は、107.690m。SP-424は、円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、107.555m。SP-427は、円形を呈し、最大径25cm、底面の最深部の標高は、107.540m。SP-393は、円形を呈し、最大径27cm、底面の最深部の標高は、107.596mである。

SN-2を構成するSP-281は、円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、107.697m。SP-432は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、107.679m。SP-264は、円形を呈し、最大径33cm、底面の最深部の標高は、107.591m。SP-269は、円形を呈し、最大径48cm、底面の最深部の標高は、107.579m。SU-34の掘り方は、楕円形を呈し、最大径41cm、底面の最深部の標高は、107.430mである。

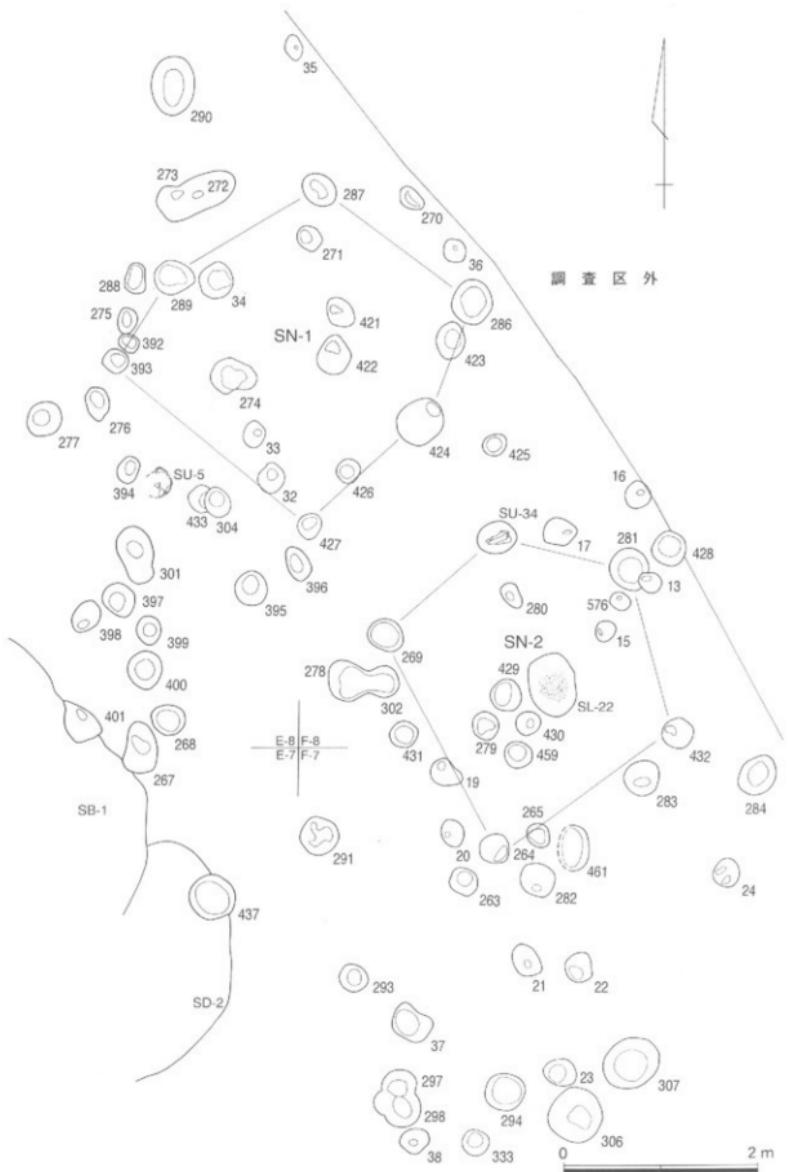
柱穴並びSN-3・4・5（第41図）

SN-3・4・5は、F-6～7グリッドに位置する。SN-3は、5本のピット（SP-303・41・25・39・294）、SN-4は、5本のピット（SP-308・309・262・266・363）、SN-5は、5本のピット（SP-469・26・540・538・471）の組み合わせである。

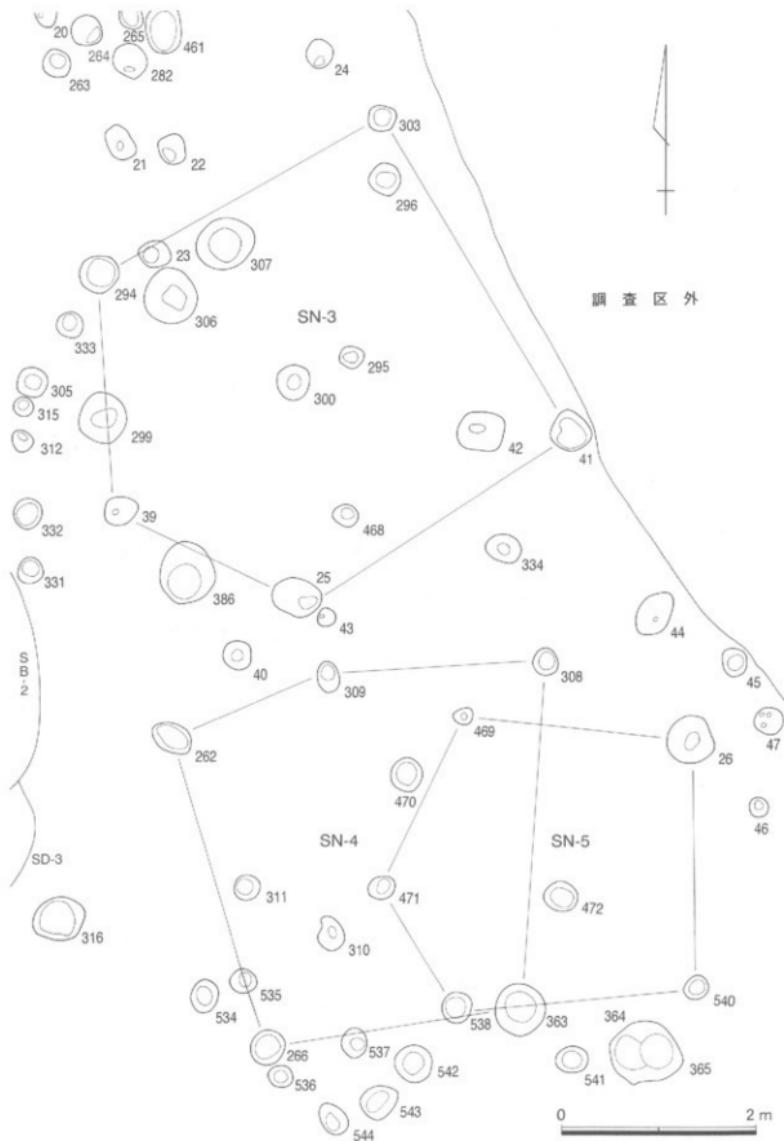
SN-3を構成するSP-303は、円形を呈し、最大径31cm、底面の最深部の標高は、107.768m。SP-41は、円形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、107.784m。SP-25は、楕円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、107.636m。SP-39は、円形を呈し、最大径33cm、底面の最深部の標高は、107.757m。SP-294は、円形を呈し、最大径38cm、底面の最深部の標高は、107.611mである。

SN-4を構成するSP-308は、円形を呈し、最大径26cm、底面の最深部の標高は、107.353m。SP-309は、楕円形を呈し、最大径32cm、底面の最深部の標高は、107.270m。SP-262は、楕円形を呈し、最大径42cm、底面の最深部の標高は、107.299m。SP-266は、円形を呈し、最大径35cm、底面の最深部の標高は、107.280m。SP-363は、円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、107.289mである。

SN-5を構成するSP-469は、円形を呈し、最大径17cm、底面の最深部の標高は、107.645m。SP-26は、円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、107.687m。SP-540は、円形を呈し、最大径24cm、底面の最深部の標高は、107.600m。SP-538は、円形を呈し、最大径31cm、底面の最深部の標高は、107.597m。SP-471は、円形を呈し、最大径26cm、底面の最深部の標高は、107.524mである。



第40図 SN-1・2



第41図 SN-3・4・5

柱穴並びSN-6・7・8・9・10（第42図）

SN-6・7・8・9・10は、G-4～5からH-4グリッドにかけ位置する。SN-6は、6本のビット（SP-458・455・590・595・598・602）SN-7は、5本のビット（594・597・621・78・591）SN-8は、5本のビット（620・622・623・617・612）SN-9は、5本のビット（SP-624・630・628・627・616）SN-10は、6本のビット（SP-512・514・648・637・636・635）の組み合わせである。

SN-6を構成するSP-458は、円形を呈し、最大径42cm、底面の最深部の標高は、107.315m。SP-455は円形を呈し、最大径26cm、底面の最深部の標高は、107.358m。SP-590は、円形を呈し、最大径26cm、底面の最深部の標高は、107.351m。SP-595は、円形を呈し、最大径34cm、底面の最深部の標高は、107.296m。SP-598は、円形を呈し、最大径34cm、底面の最深部の標高は、107.268m。SP-602は、円形を呈し、最大径60cm、底面の最深部の標高は、107.344mである。

SN-7を構成するSP-594は、円形を呈し、最大径23cm、底面の最深部の標高は、107.324m。SP-597は、円形を呈し、最大径23cm、底面の最深部の標高は、107.314m。SP-621は、楕円形を呈し、最大径28cm、底面の最深部の標高は、107.295m。SP-78は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、107.144m。SP-591は、楕円形を呈し、最大径35cm、底面の最深部の標高は、107.150mである。

SN-8を構成するSP-620は、円形を呈し、最大径27cm、底面の最深部の標高は、107.257m。SP-622は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、107.331m。SP-623は、円形を呈し、最大径34cm、底面の最深部の標高は、107.229m。SP-617は、円形を呈し、最大径35cm、底面の最深部の標高は、107.208m。SP-612は、円形を呈し、最大径37cm、底面の最深部の標高は、107.220mである。

SN-9を構成するSP-624は、円形を呈し、最大径26cm、底面の最深部の標高は、107.296m。SP-630は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、107.205m。SP-628は、円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、107.340m。SP-627は、円形を呈し、最大径20cm、底面の最深部の標高は、107.380m。SP-616は、円形を呈し、最大径24cm、底面の最深部の標高は、107.301mである。

SN-10を構成するSP-512は、円形を呈し、最大径30cm、底面の最深部の標高は、107.324m。SP-514は、円形を呈し、最大径31cm、底面の最深部の標高は、107.292m。SP-648は、円形を呈し、最大径28cm、底面の最深部の標高は、107.298m。SP-637は、円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、107.310m。SP-636は、円形を呈し、最大径46cm、底面の最深部の標高は、107.346m。SP-635は、円形を呈し、最大径31cm、底面の最深部の標高は、107.325mである。

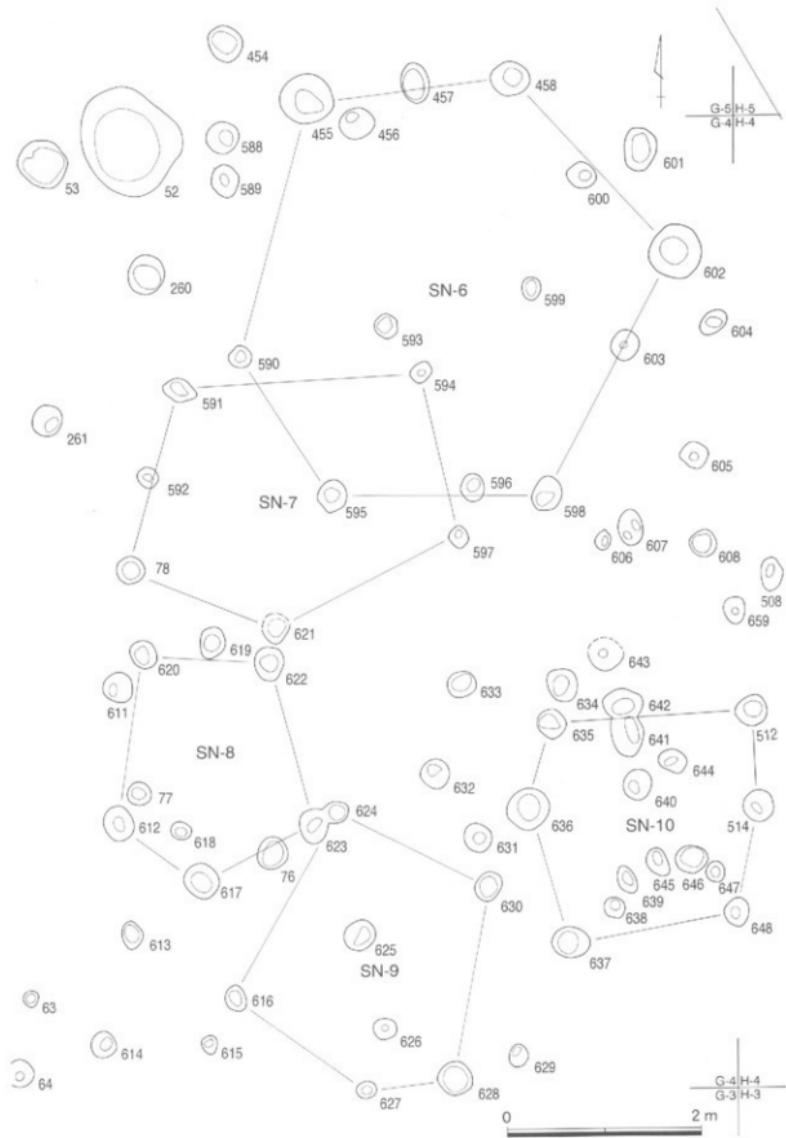
柱穴並びSN-11（第43図）

SN-11は、G-2～3グリッドに位置する4本のビット（SP-95・138・137・96）の組み合わせである。当該区域は、比較的ビットの検出が疎である。西隣にSB-18・19・20、南東側に一部重複する形でSB-23がある。

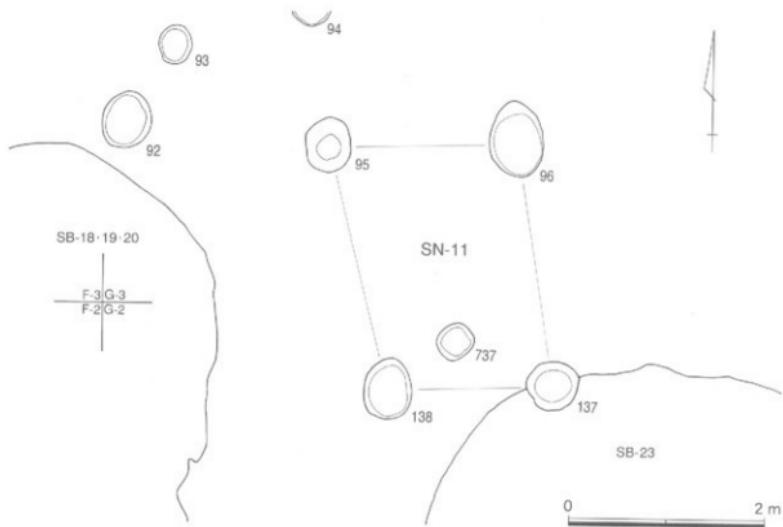
SP-95は、円形を呈し、最大径55cm、底面の最深部の標高は、107.171m。SP-138は、円形を呈し、最大径62cm、底面の最深部の標高は、107.318m。SP-137は、円形を呈し、最大径55cm、底面の最深部の標高は、107.169m。SP-96は楕円形を呈し、最大径77cm、底面の最深部の標高は107.347mである。

柱穴並びSN-12（第44図）

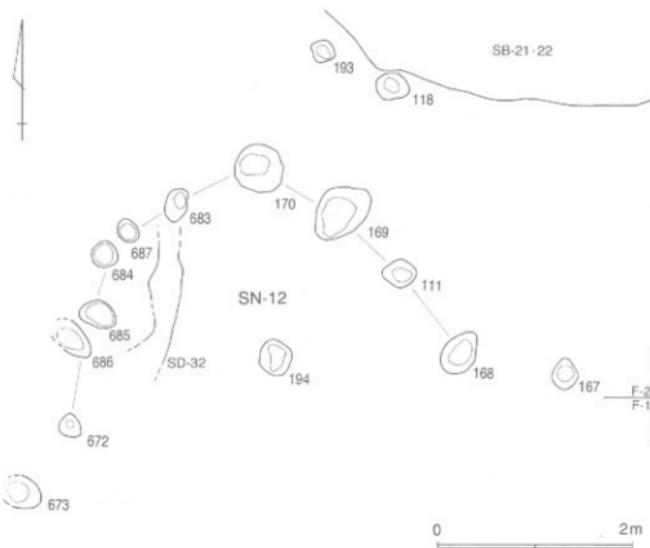
柱穴並びSN-12は、F-1～2グリッドに位置する10本のビット（SP-672・686・685・684・687・683・170・169・111・168）の組み合わせである。北東側約1m先に住居跡がSB-21・22がある。SP-686と685、684と687は、その大きさと距離から、住居の建て替えまたは、一部修繕に伴う柱穴の移動と見ることができる。小ビットが北側に推定径3.5m程度の半円を描くように配置されているが、南側では、これらに



第42図 SN-6・7・8・9・10



第43図 SN-11



第44図 SN-12

対応するようなピットは、検出されていない。また、住居跡SB-21・22のような、小柱穴の並びの外側に配置される主柱穴に相当するピットも検出されていない。

SP-672は、円形を呈し、最大径25cm、底面の最深部の標高は、106.353m。SP-686は、楕円形を呈し、最大径54cm、底面の最深部の標高は、106.303m。SP-685は、楕円形を呈し、最大径38cm、底面の最深部の標高は、106.300m。SP-684は、円形を呈し、最大径38cm、底面の最深部の標高は、106.191m。SP-687は、円形を呈し、最大径23cm、底面の最深部の標高は、106.273m。S-683は、楕円形を呈し、最大径35cm、底面の最深部の標高は、106.296m。SP-170は、円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、106.493m。SP-169は、楕円形を呈し、最大径67cm、底面の最深部の標高は、106.730m。SP-111は、楕円形を呈し、最大径35cm、底面の最深部の標高は、106.535m。SP-168は、楕円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、106.753mである。

柱穴並びSN-13・14・15（第45図）

SN-13・14・15は、G-1～2 グリッドに位置する。SN-13は、4本のピット（SP-113・802・142・115）、SN-14は、5本のピット（SP-801・233・146・144・148）、SN-15は、5本のピット（SP-222・143・155・145・806）の組み合わせである。

SN-13を構成するSP-113は、円形を呈し、最大径78cm、底面の最深部の標高は、107.264m。SP-802は、不整形を呈し、最大径60cm、底面の最深部の標高は、107.209m。SP-142は、円形を呈し、最大径45cm、底面の最深部の標高は、107.227m。SP-115は、円形を呈し、最大径45cm、底面の最深部の標高は、107.396mである。

SN-13を構成するピットは、いずれも底面の最深部が107.2～3m台と、周囲のピットに比して、ひときわ浅い標高値を示す。

SN-14を構成するSP-801は、円形を呈し、最大径50cm、底面の最深部の標高は、106.801m。SP-233は、不整形を呈し、最大径45cm、底面の最深部の標高は、106.946m。SP-146は楕円形を呈し、最大径70cm、底面の最深部の標高は、106.833m。SP-144は、楕円形を呈し、最大径60cm、底面の最深部の標高は、106.769m。SP-148は、円形を呈し、最大径70cm、底面の最深部の標高は、106.899mである。

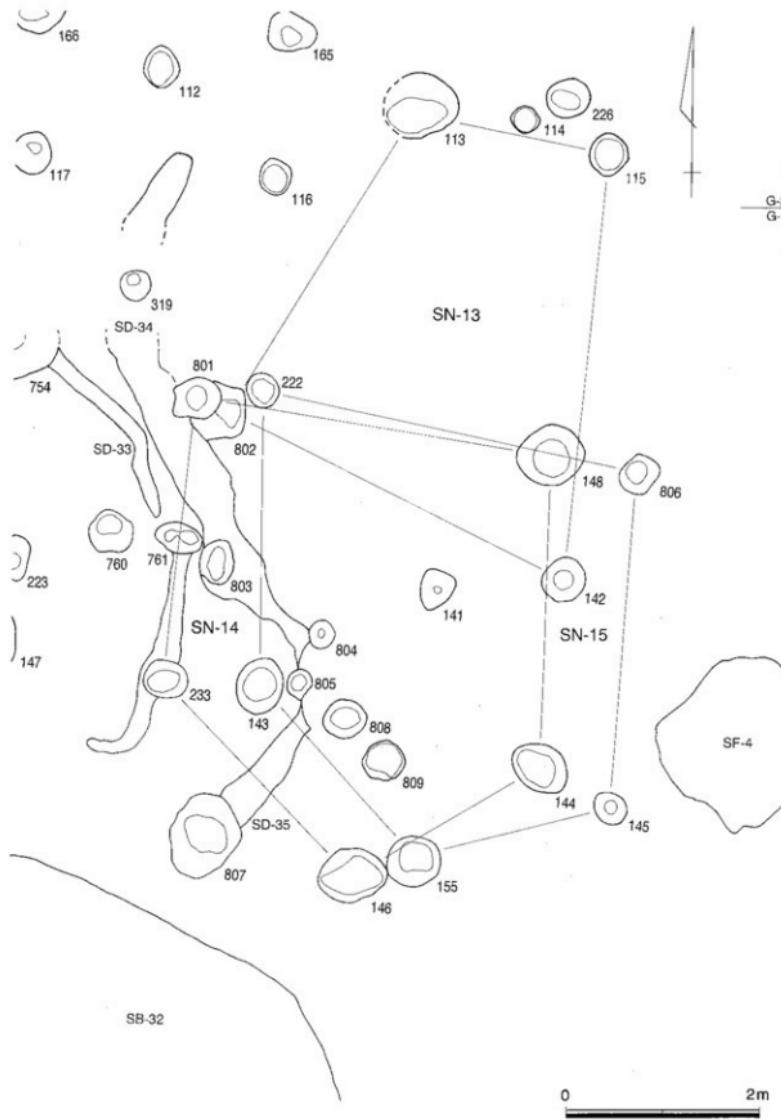
SN-15を構成するSP-222は、円形を呈し、最大径36cm、底面の最深部の標高は、106.867m。SP-143は、円形を呈し、最大径55cm、底面の最深部の標高は、107.066m。SP-155は、円形を呈し、最大径55cm、底面の最深部の標高は、106.710m。SP-145は、円形を呈し、最大径40cm、底面の最深部の標高は、106.874m。SP-806は、円形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、106.820mである。

SN-14、15は、大きさ、底面の標高値が近いピットが5箇所で二つづつ並ぶことから、住居の建て替えが想像される。

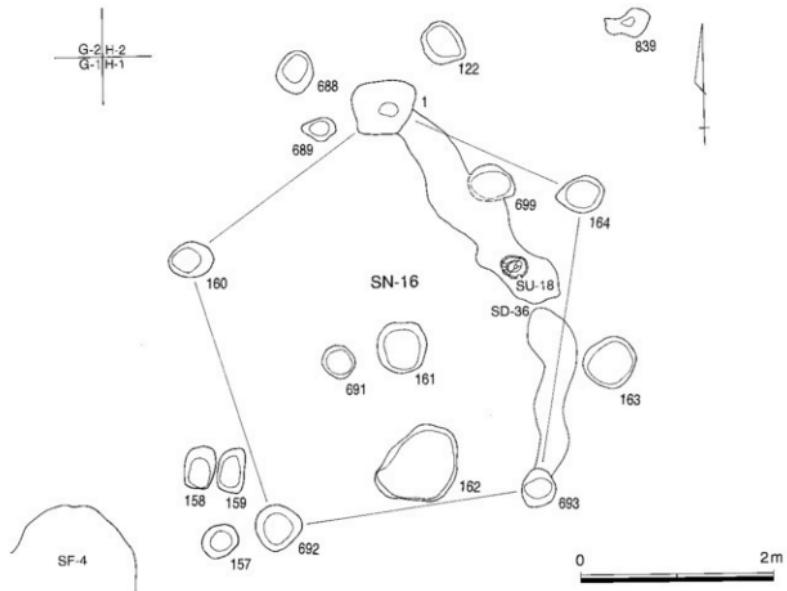
柱穴並びSN-16（第46図）

SN-16は、H-1 グリッドに位置する5本のピット（SP-1・160・692・693・164）の組み合わせである。

SP-1は、不整形を呈し、最大径71cm、底面の最深部の標高は、106.879m。SP-160は、楕円形を呈し、最大径43cm、底面の最深部の標高は、106.629m。SP-692は、円形を呈し、最大径48cm、底面の最深部の標高は、106.873m。SP-693は、円形を呈し、最大径37cm、底面の最深部の標高は、106.835m。SP-164は、楕円形を呈し、最大径51cm、底面の最深部の標高は、106.844mである。



第45図 SN-13・14・15





第47図 柱穴並び配置図

土坑（第48図）

土坑は、7基検出された。SF-1・2やSF-3・5・6のように、住居跡の北、西隣に並ぶようにして検出している例が見られる。

土坑SF-1

SF-1は、F-3グリッド南西側、中部ローム層上面で検出された。東隣には、SF-2、南側約1.5m先には、SB-18・19・20がある。残存する掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈し、最大径136cm、検出面から底面までの深さ50cmである。

覆土は、次の2層に分けられる。第1層：褐色土（最大径1cm程度の炭化物を含み、粘性無し、しまり弱い）、第2層：褐色土（土相は、第1層に準ず）。炭化物の粒径、含まれる密度は、小さくなり、褐色ロームブロックを含む）である。

土坑SF-2

SF-2は、F-3グリッド南東側、中部ローム層上面で検出された。西隣には、SF-1、南側約2m先には、住居跡SB-18・19・20がある。上面を大きく削平されており、掘り方は、平面的には、不整形を呈すると見られ、残存部の最大径138cm、検出面から底面までの深さ12cmである。

覆土は、単層で、褐色土（少量の炭化物、多量の赤褐色スコリアを含み、粘性弱い、しまり弱い）である。

土坑SF-3

SF-3は、F-1からG-1グリッド南側、中部ローム層上面で検出された。南東隣には、SB-31・32・33、南西側約2m先には、SF-5、約3m先には、SF-6がある。掘り方は、平面的には、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈すると見られ、残存部の最大径179cm、検出面から底面までの深さ30cmである。遺構内の南側には、小さな段があり、北西側には、後世の掘り込みの底部が確認できる。

覆土は、次の6層に分けられる。第1層：暗褐色土（橙褐・青灰色スコリアを含み、粘性無し、しまり弱い、一部耕作等によるものと見られる擾乱を受ける）、第2層：黄褐色土（橙褐・青灰色スコリア、多量の黄褐色ローム粒を含み、粘性弱い、しまりあり）、第3層：褐色土（炭化物、橙褐・青灰色スコリア、黄褐色ローム粒を含み、粘性あり、しまり弱い）、第4層：にぶい黄褐色土（土相は、第3層に準ず、第3層に比して黄褐色ローム粒を多く含む）、第5層：にぶい黄褐色土（橙褐・青灰色スコリア、黄褐色ローム粒を含み、粘性弱い、しまり弱い）、第6層：にぶい黄褐色土（土相は、第5層に準ず。第5層に比して黄褐色ローム粒を多く含む）である。

土坑SF-4

SF-4は、G-1からH-1グリッドにかけ、中部ローム層上面で検出された。南西側約4.5m先には、SB-31・32・33がある。掘り方は、平面的には、不整円形で、西から南側の壁の立ち上がりは、緩やかであり、断面は、皿形を呈す。残存部の最大径181cm、検出面から底面までの深さ36cmである。

覆土は、単層で、褐色土（黄褐色ローム粒、少量の炭化物を含み、粘性弱い、しまり弱い）である。

土坑SF-5

SF-5は、F-1グリッド南側、中部ローム層上面で検出された。北側約2m先には、SF-3、東側約1.5m先には、SB-31・32・33、南隣には、SF-6がある。掘り方は、平面的には、不整楕円形を呈すると見られ、残存部の最大径127cm、検出面から底面までの深さ101cmである。

覆土は、次の8層に分けられる。第1層：暗褐色土（赤・黒色スコリアを含み、しまり無し）、第2層：暗褐色土（多量り炭化物、径2cm大的ロームブロック、赤・黒色スコリアを含み、しまり無し）、第3層：褐色土（赤・黒色スコリアを含み、しまり弱い）、第4層：褐色土（赤色スコリア、多量の径2~5cm大的ロームブロック、極少量の炭化物を含み、しまり弱い）、第5層：褐色土（炭化物、ローム粒、赤色ス

コリアを含み、しまり無し)、第6層：色調が若干異なる褐色土同士の混合土(多量のスコリアを含み、しまりの強い褐色土とスコリアを含み、しまりの弱い色調が若干暗い褐色土の混合土層)、第7層：褐色土(炭化物、ローム粒、赤色スコリア、スコリアブロックを含み、しまり弱い)、第8層：褐色土(スコリアを多く含む固いロームブロック、多量の赤・黒色スコリア、少量の炭化物を含み、しまり強い)である。

土坑SF-6

SF-6は、F-イグリッド北側で検出された。北隣には、SF-5、東側約1.5m先には、SB-31・32・33、南西側約1.5m先には、SF-7がある。残存する掘り方は、平面的には、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈し、長径95cm、短径85cm、検出面から底面までの深さ50cmである。

上面では、板状の安山岩が多数検出された。南側では、長径40cm程度の石が土坑の壁の立ち上がりの延長上に立って検出され、土坑に伴う可能性を窺わせるが、焼土の検出が無いため、SF-6そのものが炉の掘り方である可能性は、低い。これら石の集中は、SF-6の埋没後または、埋没中の窓みを意識して捨てたものか、炉や集石が廃絶または、擾乱を受けた跡と推察される。

土坑SF-7

SF-7は、F-イグリッド北側で検出された。北東側約1.5m先には、SF-6がある。残存する掘り方は、北西-南東方向に長い不整形を呈する。最大径72cm、検出面から底面までの深さは、南西側33cm、東側24cmである。南西側は、径約40cm程度のピットと重複している可能性があるが、土層観察から判断できなかった。

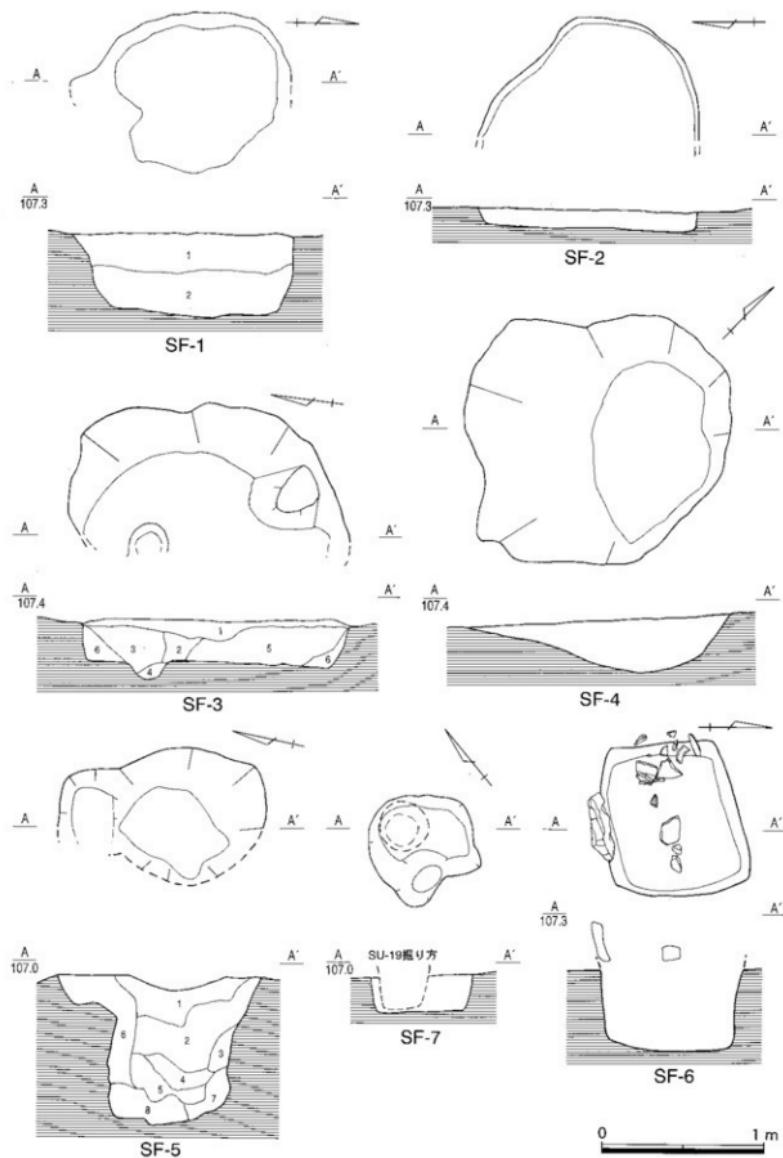
覆土は、所属住居跡不明埋甕SU-19が掘り込まれているほかは単層で、にぶい黄褐色土(少量の黄褐色ローム粒を含み、粘性あり、しまりあり)である。

第10表 土坑計測表

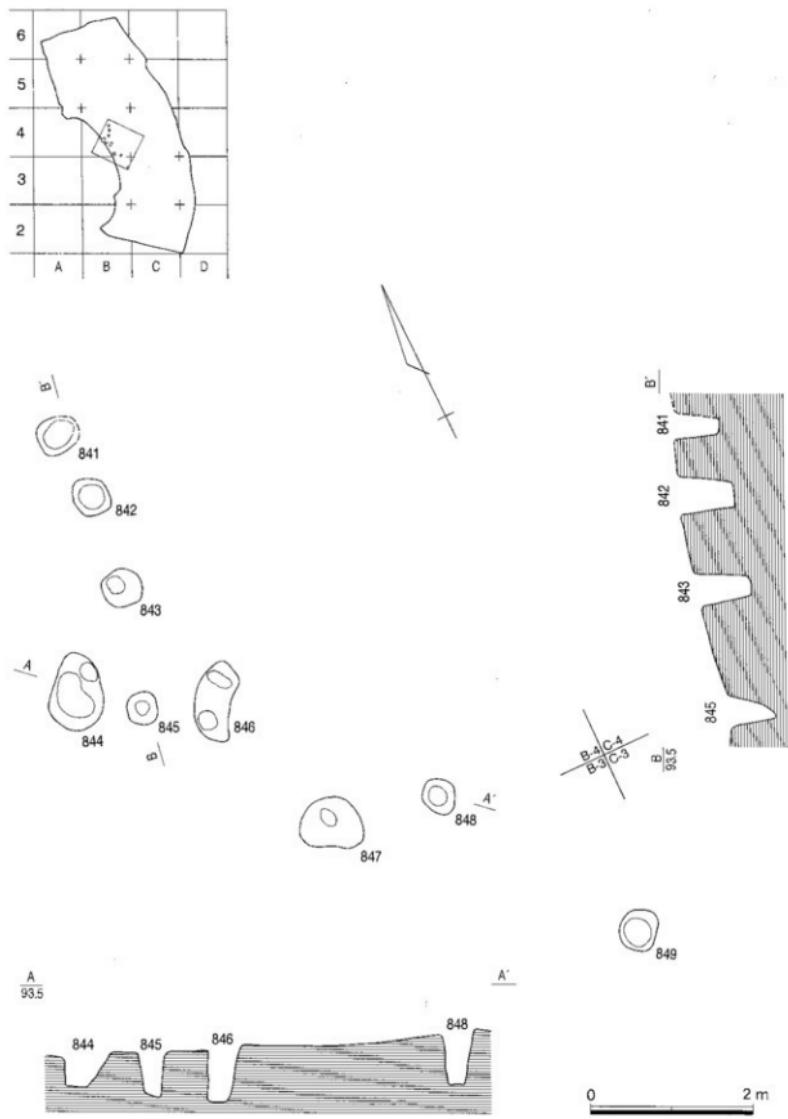
番号	グリッド	平面形	最大径(cm)	深さ(cm)	備考
SF-1	F-3	楕円	136	50	
SF-2	F-3	不整	138	12	
SF-3	F-1・G-1	楕円	179	30	
SF-4	G-1・H-1	不整円	181	36	
SF-5	F-1	不整楕円	127	101	
SF-6	F-イ	楕円	95	50	
SF-7	F-イ	不整	72	33	覆土中にSU-16が掘り込まれている

3区 検出ピット(第49図)

3区、B-3～4グリッド、東から西に下る斜面上、3区基本土層第5層上面で、時期不明のピット9基SP-841～849が検出された。これらは、北西-南東方向にほぼ一列に並ぶ。



第48図 土坑



第49図 3区検出ピット

第11表 柱穴一覧表

グリッド	S.P番号	平面形	最大径(cm)	底面の標高(m)	備考
B-3	849	円	54	92.272	3区
B-4	841	椭円	[54]	92.740	3区
B-4	842	円	54	92.536	3区
B-4	843	円	54	92.389	3区
B-4	844	椭円	96	92.211	3区
B-4	845	円	42	91.449	3区
B-4	846	不整	96	92.030	3区
B-4	847	椭円	78	92.077	3区
B-4	848	不整	48	92.277	3区
E-7	437	円	48	107.507	
E-8	32	不整	31	107.817	
E-8	33	円	27	107.712	
E-8	34	円	37	107.485	
E-8	35	椭円	26	107.809	
E-8	267	不整	56	107.500	
E-8	268	円	34	107.566	
E-8	272	不整	85	107.315	
E-8	274	不整	48	107.498	
E-8	276	椭円	35	107.236	
E-8	277	円	36	107.093	
E-8	288	不整	33	107.594	
E-8	289	不整	43	107.570	SN-1
E-8	290	椭円	60	107.483	
E-8	301	不整	60	107.127	
E-8	304	円	30	107.876	
E-8	392	椭円	24	107.441	
E-8	393	円	27	107.596	SN-1
E-8	394	椭円	26	107.476	
E-8	395	円	35	107.631	
E-8	396	椭円	32	107.560	
E-8	397	円	36	107.336	
E-8	398	円	34	107.126	
E-8	399	円	30	107.429	
E-8	400	円	40	107.464	
E-8	433	円	28	107.491	
E-イ	213	椭円	95	105.127	
F-1	149	円	50	106.575	
F-1	150	円	49	106.528	
F-1	151	円	45	106.869	
F-1	152	円	42	107.073	
F-1	153	円	52	106.980	
F-1	154	円	50	106.741	
F-1	156	円	43	106.534	
F-1	672	円	25	106.353	SN-12
F-1	673	円	25	106.229	
F-1	674	円	30	106.917	
F-2	103	円	36	106.658	SB-21主柱穴
F-2	104	円	22	106.761	SB-21支柱
F-2	105	円	23	106.579	SB-22支柱
F-2	106	円	60	106.899	
F-2	107	円	27	106.422	SB-22支柱
F-2	108	円	20	106.542	SB-22支柱
F-2	109	円	50	106.543	SB-21主柱穴
F-2	110	円	20	106.893	SB-21支柱
F-2	111	椭円	35	106.535	SN-12
F-2	118	円	37	106.505	
F-2	167	椭円	32	107.048	
F-2	168	椭円	50	106.753	SN-12
F-2	169	円	67	106.730	SN-12
F-2	170	円	50	106.493	SN-12
F-2	193	円	27	106.661	
F-2	194	円	39	106.427	
F-2	675	円	30	106.981	
F-2	676	円	33	106.892	
F-2	677	円	40	106.293	SB-20主柱穴
F-2	678	円	30	106.464	SB-19主柱穴
F-2	679	椭円	48	106.591	SB-18主柱穴

グリッド	S P番号	平面形	最大径(cm)	底面の標高(m)	備考
F-2	680	円	133	106.576	SB-18主柱穴
F-2	681	円	30	106.720	SB-21支柱
F-2	682	円	30	106.730	SB-22主柱穴
F-2	683	椭円	35	106.296	SN-12
F-2	684	円	30	106.191	SN-12
F-2	685	円	38	106.300	SN-12
F-2	686	椭円	30	106.303	SN-12
F-2	687	円	23	106.273	SN-12
F-2	762	円	30	106.638	SB-18主柱穴
F-2	763	円	23	106.910	
F-2	764	円	50	106.415	SB-21.22主柱穴
F-2	765	円	45	106.233	SB-20主柱穴
F-3	72	円	40	107.015	
F-3	83	円	30	107.034	
F-3	84	円	34	107.073	
F-3	85	円	40	106.986	
F-3	86	円	45	106.981	
F-3	90	円	35	106.885	
F-3	91	椭円	75	106.716	
F-3	695	椭円	32	107.008	SB-20の埋甌の埋り方に相当する可能性あり
F-3	696	円	52	106.706	SB-20の埋甌の埋り方に相当する可能性あり
F-3	697	椭円	40	106.745	
F-3	698	椭円	37	106.499	SB-20主柱穴
F-3	766	円	30	106.600	SB-19主柱穴
F-4	55	円	48	107.020	
F-4	67	円	48	106.720	
F-4	68	円	34	106.930	
F-4	69	円	32	107.146	
F-4	70	円	18	107.060	
F-4	71	円	43	107.109	
F-4	79	不整	39	107.020	
F-4	767	円	30	106.987	
F-4	768	円	28	106.195	SB-13主柱穴
F-4	769	円	24	106.192	SB-13主柱穴
F-4	770	椭円	37	106.293	SB-12主柱穴
F-4	772	円	35	106.543	SB-14主柱穴
F-4	773	円	37	106.833	SB-17主柱穴
F-4	774	円	33	106.692	SB-14主柱穴
F-4	775	椭円	26	106.827	SB-15主柱穴
F-4	776	椭円	36	107.090	SB-16主柱穴
F-4	777	椭円	36	106.539	SB-15主柱穴
F-4	779	円	28	106.702	
F-4	780	円	38	106.549	SB-15主柱穴
F-4	781	円	25	106.928	
F-4	782	円	24	106.800	
F-4	783	不整	45	106.730	
F-4	784	円	57	106.809	
F-4	785	椭円	54	106.500	SB-15主柱穴
F-4	786	円	35	106.701	
F-4	787	椭円	42	106.379	SB-14主柱穴
F-4	788	円	18	106.752	
F-4	789	椭円	38	106.869	
F-4	790	円	20	106.829	
F-4	791	円	28	106.758	
F-4	792	円	40	107.046	
F-4	793	円	35	106.690	
F-4	794	椭円	30	106.774	
F-4	795	円	22	106.964	
F-4	796	円	30	106.837	
F-4	797	椭円	32	107.004	
F-4	799	円	33	106.342	SB-12主柱穴
F-5	48	円	36	106.963	
F-5	49	円	52	106.952	
F-5	50	円	34	107.224	
F-5	335	椭円	46	107.265	
F-5	390	円	40	106.946	
F-5	391	円	33	106.804	
F-5	700	円	32	106.853	
F-5	701	円	56	106.914	

グリッド	S.P番号	平面形	最大径(cm)	底面の標高(m)	備考
F-5	702	円	22	107.341	
F-5	703	椭円	24	106.823	SB-10主柱穴
F-5	704	椭円	30	106.657	SB-10主柱穴
F-5	705	円	29	107.216	
F-5	706	椭円	37	106.724	SB-8主柱穴
F-5	707	円	34	107.078	
F-5	708	椭円	28	107.150	SB-9主柱穴
F-5	709	円	34	107.125	
F-5	710	椭円	35	107.059	SB-11主柱穴
F-5	711	円	28	106.840	
F-5	712	円	35	106.858	
F-5	713	円	32	106.740	
F-5	714	円	29	106.937	
F-5	715	椭円	39	106.746	
F-5	716	椭円	36	106.917	
F-5	717	円	35	107.216	
F-5	718	椭円	32	106.255	SB-12主柱穴
F-5	719	方	32	106.958	
F-5	720	円	45	106.973	
F-5	721	椭円	29	106.271	SB-12主柱穴
F-5	722	円	34	106.199	SB-13主柱穴
F-5	723	椭円	34	106.781	
F-5	724	椭円	37	106.321	SB-12主柱穴
F-5	725	不整	39	106.703	
F-5	726	円	36	106.573	
F-5	727	不整	47	106.739	
F-5	728	円	39	106.236	
F-5	729	椭円	34	106.745	
F-5	800	円	38	106.924	
F-5	821	椭円	57	106.600	
F-5	822	椭円	40	107.113	
F-5	828	円	34	107.016	
F-5	829	円	38	107.039	
F-6	27	椭円	25	107.493	
F-6	28	円	54	106.891	SB-6主柱穴
F-6	29	円	20	107.644	
F-6	248	円	38	107.360	
F-6	249	円	40	107.195	
F-6	266	円	35	107.280	SN-4
F-6	310	椭円	36	107.198	
F-6	316	円	52	107.339	
F-6	345	円	[30]	107.173	SB-5主柱穴
F-6	352	不整	33	106.930	SB-6主柱穴
F-6	353	円	35	106.779	
F-6	354	円	60	107.103	
F-6	355	椭円	36	107.213	
F-6	356	椭円	41	106.933	SB-5主柱穴
F-6	357	円	40	106.989	SB-4主柱穴
F-6	359	椭円	46	107.174	SB-4主柱穴
F-6	361	椭円	40	107.138	SB-3主柱穴
F-6	362	円	38	107.140	
F-6	363	円	50	107.289	SN-4
F-6	364	円	65	107.343	
F-6	365	円	60	107.224	
F-6	366	円	38	107.509	
F-6	370	円	30	107.427	
F-6	371	不整	125	107.001	
F-6	379	円	45	107.766	
F-6	472	円	35	107.669	
F-6	534	円	30	107.424	
F-6	535	円	28	107.228	
F-6	536	円	14	107.326	
F-6	537	円	28	107.419	
F-6	538	円	31	107.597	SN-5
F-6	540	円	24	107.600	SN-5
F-6	541	円	31	107.609	
F-6	542	円	38	107.476	
F-6	543	椭円	40	107.193	SB-5主柱穴
F-6	544	椭円	36	107.438	

グリッド	S P番号	平面形	最大径(cm)	底面の標高(m)	備考
F-6	545	楕円	[48]	107.200	SB-3主柱穴
F-6	546	円	39	107.494	
F-6	547	円	32	107.45	
F-6	548	円	52	107.454	
F-6	549	円	33	107.453	
F-6	550	円	46	107.228	
F-6	551	円	25	107.544	
F-6	552	円	39	107.221	SB-5主柱穴
F-6	553	楕円	43	107.470	
F-6	554	円	32	107.441	
F-6	555	楕円	55	107.306	
F-6	556	円	32	107.090	
F-6	557	円	34	107.247	
F-6	558	円	26	107.331	
F-6	559	円	38	107.175	
F-6	560	円	52	107.225	SB-3主柱穴
F-6	561	円	25	107.257	
F-6	562	円	30	107.256	
F-6	563	楕円	[42]	106.696	SB-4主柱穴
F-6	564	円	20	107.320	
F-6	565	円	39	106.934	
F-6	567	円	31	106.934	
F-6	568	楕円	35	107.246	
F-6	569	円	31	107.204	
F-6	570	楕円	35	107.370	
F-6	571	円	33	107.060	
F-6	572	円	33	107.106	
F-6	573	楕円	42	107.106	SB-9主柱穴
F-6	574	楕円	50	106.662	SB-8主柱穴
F-6	575	楕円	45	107.133	
F-6	576	円	27	107.139	
F-6	577	楕円	26	107.286	
F-6	578	楕円	49	106.682	SB-10主柱穴
F-6	579	楕円	28	106.732	SB-10主柱穴
F-6	661	円	42	107.133	
F-6	826	円	40	107.040	
F-6	830	楕円	38	106.850	SB-8主柱穴
F-6	836	楕円	28	107.030	
F-7	19	不整	45	107.805	
F-7	20	楕円	30	107.724	
F-7	21	楕円	37	107.884	
F-7	22	楕円	31	107.703	
F-7	23	楕円	34	107.801	
F-7	24	円	27	107.700	
F-7	25	楕円	50	107.636	SN-3
F-7	26	円	50	107.687	SN-5
F-7	37	不整	43	107.642	
F-7	38	円	28	107.714	
F-7	39	円	33	107.757	SN-3
F-7	40	円	30	107.758	
F-7	41	円	43	107.784	SN-3
F-7	42	円	47	107.686	
F-7	43	円	18	107.681	
F-7	44	楕円	50	107.685	
F-7	45	円	30	107.720	
F-7	46	円	22	107.771	
F-7	47	円	30	107.671	
F-7	262	楕円	42	107.299	SN-4
F-7	263	円	33	107.770	
F-7	264	円	33	107.591	SN-2
F-7	265	円	28	107.519	
F-7	282	円	36	107.245	
F-7	283	円	37	107.761	
F-7	284	楕円	44	107.466	
F-7	285	楕円	56	107.490	
F-7	291	円	48	107.462	
F-7	293	円	30	107.660	
F-7	294	円	38	107.611	SN-3
F-7	295	円	24	107.475	

グリッド	S.P番号	平面形	最大径(cm)	底面の標高(m)	備考
F-7	296	円	34	107.534	
F-7	297	円	35	107.467	
F-7	298	円	48	107.345	
F-7	299	円	47	107.650	
F-7	300	円	36	107.584	
F-7	303	円	31	107.768	SN-3
F-7	305	円	32	107.378	
F-7	306	円	55	107.337	
F-7	307	円	60	107.498	
F-7	308	円	26	107.353	SN-4
F-7	309	椭円	32	107.270	SN-4
F-7	311	円	28	107.113	
F-7	312	円	24	107.196	
F-7	313	円	22	107.512	
F-7	314	円	23	107.345	
F-7	315	円	19	107.572	
F-7	317	円	30	107.205	
F-7	331	円	25	107.297	
F-7	332	円	30	107.599	
F-7	333	円	28	107.262	
F-7	334	円	38	107.580	
F-7	366	円	58	106.808	
F-7	459	円	26	107.683	
F-7	460	椭円	31	107.741	
F-7	461	椭円	46	107.760	
F-7	461	不整	52	107.269	
F-7	462	円	[40]	107.030	SB-2支柱穴
F-7	463	椭円	[36]	107.079	SB-2支柱穴
F-7	464	円	18	107.214	
F-7	465	円	44	106.840	
F-7	467	円	34	107.268	
F-7	468	円	24	107.523	
F-7	469	円	17	107.645	SN-5
F-7	470	円	32	107.474	
F-7	471	円	26	107.524	SN-5
F-8	13	椭円	25	107.908	
F-8	14	円	23	107.566	
F-8	15	円	20	107.819	
F-8	16	円	28	108.011	
F-8	17	円	37	107.576	
F-8	36	円	25	107.795	
F-8	269	円	48	107.579	
F-8	270	不整	33	107.546	
F-8	271	円	26	107.327	
F-8	278	椭円	45	107.348	
F-8	279	円	28	107.622	
F-8	280	椭円	38	107.212	
F-8	281	円	40	107.697	SN-2
F-8	285	円	45	107.650	SN-1
F-8	287	椭円	40	107.539	SN-1
F-8	302	円	40	107.418	
F-8	421	椭円	35	107.577	
F-8	422	椭円	42	107.602	
F-8	423	椭円	39	107.688	
F-8	424	円	50	107.555	SN-1
F-8	425	円	23	107.771	
F-8	426	円	25	107.695	
F-8	427	円	25	107.540	SN-1
F-8	428	円	40	107.609	
F-8	429	円	37	107.694	
F-8	430	円	24	107.597	
F-8	431	円	27	107.653	
F-8	432	円	30	107.679	SN-2
F-イ	178	円	55	106.408	
F-イ	180	円	32	106.453	
F-イ	183	円	48	106.404	
F-イ	184	円	75	106.421	
F-イ	185	円	57	106.376	
F-イ	197	円	40	105.993	

グリッド	S.P番号	平面形	最大深(cm)	底面の標高(m)	備考
F-イ	198	円	26	106.018	
F-イ	199	円	45	106.292	
F-イ	204	円	35	106.073	
F-イ	205	不整	38	106.332	
F-イ	206	円	30	106.285	
F-イ	207	不整	34	106.406	
F-イ	208	円	65	106.406	
F-イ	209	円	35	106.510	
F-イ	670	円	40	106.580	
F-イ	671	円	40	106.366 SB-31主柱穴	
F-ロ	179	円	38	106.577	
F-ロ	186	円	53	106.533	
F-ロ	200	椭円	28	106.757	
F-ロ	201	円	50	106.838	
F-ロ	202	円	36	106.973	
F-ロ	203	円	48	106.687	
F-ロ	662	円	34	106.860 SB-34主柱穴	
F-ロ	663	円	40	106.759 SB-35主柱穴	
F-ロ	664	円	25	106.771	
F-ロ	665	円	44	106.522 SB-34主柱穴	
F-ロ	666	円	43	106.724 SB-34主柱穴	
F-ロ	667	円	45	106.519 SB-35主柱穴	
F-ロ	668	円	48	106.603	
F-ロ	669	円	50	106.558 SB-34主柱穴	
G-1	141	不整	43	106.869	
G-1	142	円	45	107.227 SN-13	
G-1	143	円	55	107.066 SN-15	
G-1	144	椭円	60	106.769 SN-14	
G-1	145	円	40	106.874 SN-15	
G-1	146	椭円	70	106.833 SN-14	
G-1	147	円	55	106.694	
G-1	148	円	70	106.899 SN-14	
G-1	155	円	55	106.710 SN-15	
G-1	222	円	36	106.867 SN-15	
G-1	223	不整	45	106.946	
G-1	224	円	42	106.800	
G-1	225	円	42	106.949	
G-1	233	円	45	106.927 SN-14	
G-1	239	椭円	57	107.197	
G-1	319	円	32	106.840	
G-1	752	円	30	106.680	
G-1	753	円	70	107.132	
G-1	754	円	70	107.000	
G-1	755	円	60	106.744	
G-1	756	円	35	107.070	
G-1	757	円	40	106.813	
G-1	758	円	112	106.914	
G-1	759	円	25	106.755	
G-1	760	円	43	106.858	
G-1	761	椭円	50	107.070	
G-1	801	円	50	106.801 SN-14	
G-1	802	不整	60	107.209 SN-13	
G-1	803	椭円	45	106.830	
G-1	804	円	30	106.985	
G-1	805	円	30	107.033	
G-1	806	円	43	106.820 SN-15	
G-1	807	椭円	85	106.797	
G-1	808	円	45	106.533	
G-1	809	円	45	106.781	
G-1	810	円	58	106.206 SB-32主柱穴	
G-1	811	円	35	106.430	
G-1	812	円	[50]	106.333 SB-33主柱穴	
G-1	813	不整	40	106.651	
G-1	814	不整	50	106.737	
G-1	815	椭円	35	106.761	
G-1	816	円	73	106.280 SB-32主柱穴	
G-1	817	円	55	106.670	
G-1	818	椭円	40	106.520	
G-1	819	円	30	106.736 SB-31主柱穴	

グリッド	S.P番号	平面形	最大径(cm)	底面の標高(m)	備考
G-1	820	円	20	106.247	
G-1	822	円	43	106.360	SB-23主柱穴
G-2	98	椭円	56	107.005	SB-23主柱穴
G-2	99	円	52	107.152	
G-2	100	円	45	106.755	
G-2	101	椭円	52	107.085	SB-24主柱穴
G-2	102	円	44	107.055	
G-2	112	椭円	43	107.181	
G-2	113	円	[78]	107.264	SN-13
G-2	114	円	30	107.127	
G-2	115	円	45	107.396	SN-13
G-2	116	円	38	107.098	
G-2	117	円	44	107.059	
G-2	137	円	55	107.159	SN-11
G-2	138	円	62	107.318	SN-11
G-2	165	円	50	107.030	
G-2	166	円	60	107.148	
G-2	172	円	41	107.378	
G-2	187	円	25	107.111	
G-2	188	円	25	107.262	
G-2	189	円	35	107.220	
G-2	190	円	28	107.356	
G-2	226	円	45	107.082	
G-2	227	円	37	106.933	SB-23主柱穴
G-2	234	円	35	107.080	SB-23主柱穴
G-2	240	円	40	106.848	SB-23主柱穴
G-2	241	円	53	107.102	SB-24主柱穴
G-2	731	円	30	106.755	
G-2	732	円	25	106.863	
G-2	733	円	31	106.388	SB-20主柱穴
G-2	734	不整	93	106.524	SB-21,22主柱穴
G-2	735	円	33	107.169	
G-2	736	円	26	106.888	
G-2	737	円	40	107.154	
G-2	738	椭円	30	106.868	SB-24主柱穴
G-2	739	円	40	107.185	
G-2	740	円	64	107.041	
G-2	741	円	37	106.957	
G-2	742	不整	32	106.927	
G-2	743	椭円	35	106.883	
G-2	744	円	34	106.688	SB-22主柱穴
G-2	745	円	30	106.982	
G-3	5	円	40	107.184	
G-3	7	円	29	107.298	
G-3	8	円	76	107.725	
G-3	9	円	50	107.340	
G-3	10	円	25	107.106	
G-3	65	円	25	107.225	
G-3	75	円	28	107.248	
G-3	82	円	25	107.192	
G-3	87	円	47	107.089	
G-3	88	円	26	107.188	
G-3	89	円	43	107.070	
G-3	92	円	60	107.073	
G-3	93	円	40	107.199	
G-3	94	円	38	106.996	
G-3	95	円	55	107.171	SN-11
G-3	96	椭円	77	107.347	SN-11
G-3	215	円	35	106.512	
G-3	216	円	32	106.656	
G-3	217	円	52	106.741	
G-3	218	円	36	107.065	
G-3	336	円	75	107.140	
G-3	337	円	43	107.099	
G-3	338	円	37	107.171	
G-3	339	円	45	107.180	
G-3	340	円	32	107.220	
G-3	730	円	33	106.411	SB-20主柱穴
G-4	52	椭円	72	107.171	

グリッド	S.P番号	平面形	最大径(cm)	底面の標高(m)	備考
G-4	53	円	48	107.279	
G-4	56	椭円	44	107.305	
G-4	57	円	42	107.110	
G-4	58	円	23	107.033	
G-4	59	円	24	106.951	
G-4	60	円	19	107.212	
G-4	61	椭円	36	107.125	
G-4	62	円	30	107.238	
G-4	63	円	17	107.244	
G-4	64	円	28	107.226	
G-4	73	円	28	106.965	
G-4	76	円	33	107.284	
G-4	77	円	23	107.288	
G-4	78	円	30	107.144 SN-7	
G-4	260	椭円	38	107.077	
G-4	261	円	32	106.783	
G-4	378	不整	118	107.233	
G-4	477	椭円	42	106.737 SB-16柱穴	
G-4	478	不整	30	107.271	
G-4	479	不整	78	107.106	
G-4	480	椭円	36	107.026 SB-17柱穴	
G-4	481	円	70	107.052	
G-4	482	不整	28	106.950	
G-4	483	円	25	107.225	
G-4	484	円	23	107.083	
G-4	486	円	31	107.039	
G-4	488	円	30	106.964	
G-4	489	椭円	58	107.150	
G-4	503	椭円	40	106.637	
G-4	504	椭円	28	107.060	
G-4	529	円	21	106.748	
G-4	530	円	25	107.128	
G-4	531	不整	30	107.095	
G-4	532	円	47	106.865	
G-4	533	円	32	107.025	
G-4	588	円	36	107.279	
G-4	589	円	33	107.185	
G-4	590	円	26	107.351 SN-6	
G-4	591	椭円	35	107.150 SN-7	
G-4	592	円	22	107.137	
G-4	593	円	27	107.430	
G-4	594	円	23	107.324 SN-7	
G-4	595	円	34	107.296 SN-6	
G-4	596	円	30	107.425	
G-4	597	円	23	107.314 SN-7	
G-4	598	円	34	107.268 SN-6	
G-4	599	円	25	107.407	
G-4	600	円	29	107.231	
G-4	601	椭円	46	107.384	
G-4	602	円	60	107.344 SN-6	
G-4	603	円	30	107.228	
G-4	604	円	30	107.076	
G-4	605	円	26	107.264	
G-4	606	円	20	107.414	
G-4	607	円	40	107.361	
G-4	608	円	25	107.351	
G-4	609	椭円	40	107.080	
G-4	611	円	33	107.120	
G-4	612	円	37	107.220 SN-8	
G-4	613	円	26	107.163	
G-4	614	円	26	107.017	
G-4	615	円	18	107.320	
G-4	616	円	24	107.301 SN-9	
G-4	617	円	35	107.208 SN-8	
G-4	618	円	11	107.324	
G-4	619	円	32	107.270	
G-4	620	円	27	107.257 SN-8	
G-4	621	椭円	28	107.295 SN-7	
G-4	622	円	30	107.331 SN-8	

グリッド	S.P番号	平面形	最大径(cm)	底面の標高(m)	備考
G-4	623	円	34	107.229	SN-8
G-4	624	円	26	107.296	SN-9
G-4	625	円	34	107.062	
G-4	626	円	27	107.262	
G-4	627	円	20	107.380	SN-9
G-4	628	円	40	107.340	SN-9
G-4	629	円	24	106.986	
G-4	630	円	30	107.205	SN-9
G-4	631	円	30	106.946	
G-4	632	円	30	107.184	
G-4	633	円	32	107.409	
G-4	634	円	36	107.281	
G-4	635	円	31	107.325	SN-10
G-4	636	円	46	107.346	SN-10
G-4	637	円	40	107.310	SN-10
G-4	638	円	21	107.191	
G-4	639	精円	30	107.274	
G-4	640	円	32	107.387	
G-4	641	精円	40	107.206	
G-4	642	円	45	107.146	
G-4	643	円	37	107.154	
G-4	644	円	29	107.315	
G-4	645	精円	30	107.279	
G-4	646	円	37	107.303	
G-4	647	円	22	107.377	
G-4	648	円	28	107.298	SN-10
G-4	659	円	35	107.363	
G-4	660	円	28	107.119	
G-4	824	円	28	106.780	
G-4	825	円	24	106.834	
G-4	837	精円	22	107.250	
G-5	51	円	45	107.173	
G-5	210	不整	30	107.300	
G-5	256	精円	55	107.089	SB-11主柱穴
G-5	258	精円	35	107.213	
G-5	322	精円	38	107.438	
G-5	372	不整	60	107.341	
G-5	373	不整	45	107.540	
G-5	374	不整	50	106.854	
G-5	376	円	36	107.491	SB-11主柱穴
G-5	405	円	20	107.227	
G-5	406	円	30	107.125	
G-5	407	精円	31	106.922	SB-9主柱穴
G-5	408	円	15	107.282	
G-5	409	円	27	107.399	SB-11主柱穴
G-5	410	円	29	107.477	
G-5	411	精円	29	107.365	
G-5	412	精円	33	106.831	SB-11主柱穴
G-5	413	円	26	107.354	
G-5	414	方	30	107.486	
G-5	415	精円	37	107.476	
G-5	416	不整	55	107.455	
G-5	417	精円	53	107.496	
G-5	418	円	35	107.305	
G-5	420	精円	42	107.970	
G-5	434	円	37	106.753	SB-8主柱穴
G-5	435	円	32	107.113	
G-5	436	精円	42	106.933	
G-5	451	円	35	107.469	SB-11の復元の掘り方に相当する可能性あり
G-5	452	円	30	107.004	
G-5	453	不整	65	107.380	
G-5	454	円	35	107.391	
G-5	455	円	52	107.358	SN-6
G-5	456	円	35	107.973	
G-5	457	精円	45	107.363	
G-5	458	円	42	107.315	SN-6
G-5	473	精円	40	107.204	
G-5	474	精円	55	107.834	
G-5	475	円	70	107.193	

グリッド	S.P番号	平面形	最大径(cm)	底面の標高(m)	備考
G-5	823	不整	50	107.077	
G-5	850	円	43	106.986	SB-11主柱穴
G-5	30	円	30	107.585	
G-6	31	不整	30	107.752	
G-6	181	円	38	107.492	
G-6	367	円	35	107.258	
G-6	402	椭円	42	107.173	SB-9主柱穴
G-6	403	椭円	40	107.179	
G-6	404	不整	38	107.125	
G-6	831	円	30	106.987	SB-9主柱穴
G-イ	192	円	63	106.615	SB-31主柱穴
G-イ	746	円	46	106.487	SB-33主柱穴
G-イ	747	円	37	106.150	
G-イ	748	円	63	106.120	SB-32主柱穴
G-イ	749	円	41	106.153	
G-イ	750	円	35	106.377	
G-イ	751	椭円	145	106.300	SB-31主柱穴
G-イ	798	円	21	106.402	
H-1	1	不整	71	106.879	SN-16
H-1	157	円	33	106.637	
H-1	158	椭円	46	106.516	
H-1	159	椭円	49	106.605	
H-1	160	椭円	43	106.629	SN-16
H-1	161	円	56	106.993	
H-1	162	椭円	90	106.770	
H-1	163	円	55	106.840	
H-1	164	椭円	51	106.844	SN-16
H-1	688	椭円	45	107.012	
H-1	689	椭円	36	106.982	
H-1	690	円	30	107.117	
H-1	691	円	35	107.147	
H-1	692	円	48	106.873	SN-16
H-1	693	円	37	106.835	SN-16
H-1	694	円	59	106.713	
H-1	699	円	33	107.025	
H-2	119	円	46	107.168	
H-2	120	円	45	107.321	
H-2	121	円	54	107.340	
H-2	122	円	55	107.276	
H-2	123	円	58	106.887	
H-2	125	円	57	107.253	
H-2	127	円	43	107.323	
H-2	129	円	50	107.323	
H-2	130	不整	66	107.080	
H-2	131	不整	55	107.104	SB-25主柱穴
H-2	132	円	57	107.436	
H-2	133	円	51	107.333	
H-2	135	円	60	106.993	
H-2	136	椭円	50	107.266	
H-2	174	椭円	57	107.394	
H-2	191	円	35	107.082	
H-2	220	円	43	107.212	
H-2	230	円	39	107.177	SB-25主柱穴
H-2	236	円	36	107.122	SB-25主柱穴
H-2	237	円	69	107.020	
H-2	238	円	32	107.019	
H-2	243	円	33	106.981	
H-2	649	椭円	29	107.024	
H-2	650	円	25	107.158	
H-2	652	円	43	106.560	SB-27主柱穴
H-2	653	円	47	107.114	
H-2	654	円	44	106.644	SB-28主柱穴
H-2	656	円	25	106.882	
H-2	657	円	29	107.165	
H-2	658	椭円	32	107.100	
H-3	231	不整	78	107.094	
H-3	232	円	43	107.018	SB-25主柱穴
H-3	242	円	53	107.160	
H-3	580	椭円	46	106.651	

グリッド	S P番号	平面形	最大径(cm)	底面の標高(m)	備考
H-3	581	円	35	106.590	
H-3	582	円	32	106.847	
H-3	583	円	45	106.648	
H-3	584	不整	41	107.027	SB-26主柱穴
H-3	585	不整	37	106.786	SB-27主柱穴
H-3	586	円	22	106.707	
H-3	587	不整	61	107.089	SB-26主柱穴
H-4	385	椭円	50	107.111	
H-4	505	円	51	107.167	
H-4	506	椭円	24	107.324	
H-4	507	椭円	30	107.211	
H-4	508	椭円	35	107.126	
H-4	509	円	21	107.114	
H-4	510	不整	32	107.057	
H-4	511	椭円	42	106.982	
H-4	512	円	30	107.324	SN-10
H-4	513	円	32	107.022	
H-4	514	円	31	107.292	SN-10
H-4	515	円	25	107.109	
H-4	516	円	17	107.255	
H-4	517	円	20	107.290	
H-4	518	円	27	107.247	
H-4	519	円	46	106.926	
H-4	520	円	34	107.231	
H-4	521	円	45	106.798	
H-4	522	椭円	39	107.094	
H-4	523	椭円	27	107.058	
H-4	524	椭円	40	107.170	
H-4	525	円	33	107.137	
H-4	526	椭円	49	107.069	
H-4	527	円	31	107.168	
H-4	528	椭円	36	107.162	
I-1	195	円	20	106.572	
I-1	196	円	43	106.216	
I-1	490	円	28	106.591	
I-1	491	円	23	106.598	
I-1	492	円	30	106.598	
I-1	493	円	30	106.459	SB-29主柱穴
I-1	494	円	27	106.618	
I-1	495	円	34	106.609	SB-30主柱穴
I-1	498	方	50	106.718	
I-1	499	椭円	43	106.613	SB-30主柱穴
I-2	124	椭円	63	107.206	
I-2	438	不整	70	106.905	
I-2	439	円	50	106.158	SB-27主柱穴
I-2	440	円	61	107.201	
I-2	441	椭円	58	106.831	
I-2	442	椭円	39	106.944	
I-2	443	不整	38	106.706	
I-2	444	円	36	106.505	SB-29主柱穴
I-2	445	円	50	106.529	
I-2	446	円	43	106.538	SB-29主柱穴
I-2	447	不整	70	106.332	SB-30主柱穴
I-2	448	椭円	58	106.661	SB-30主柱穴
I-2	449	椭円	49	106.772	
I-2	450	円	39	106.524	SB-29主柱穴

[] 内の数値は推定

第V章 まとめ

今回の押出シ遺跡の調査では、炉、埋甕、壁溝、土坑、柱穴と見られるピットとその並びが多数検出し、それらの遺構の組み合わせより、縄文時代中期に比定される住居跡35軒が確認された。幾重にも重複、建て替えがあり、同時期に存在した住居が数軒程度の中規模な集落であったと見られる。人々の生活の場としての存続期間は、出土する土器の年代観から縄文時代中期全般を通じた永きに渡るものであったと言えるが、遺構の覆土は、後世の擾乱を受けている場合が多く、年代を特定できる要素は、埋甕に使用された土器を除いて認められなかった。埋甕は、曾利・加曾利E式に比定されるものであり、年代的に縄文時代中期後葉に限定された。以下、押出シ遺跡の遺構で、第IV章中で詳しく扱わなかった埋甕全般の堀り方と土器の埋設状況、炉の形態の変遷、住居の配置状況の変遷について言及する。

第1節 埋甕の堀り方と埋設状況

再三述べてきているが、押出シ遺跡より検出した埋設されていたと見られる土器（埋甕）は、34を数える。土器そのものについての事実記載は、遺物編に譲り、本項では、堀り方の形態、埋設状況について言及する。

埋甕の堀り方については、埋設される土器そのものの大きさに合わせて掘り込まれたものがほとんどであるが、平面が土器に比べて広く、断面が箱形を呈する浅い土坑状になるものが少数ながら存在する。その径の大きさから、住居の出入口付近または、住居内につくられる施設とは、考え難く、その顕著な例であるSU-20と3は、いずれも所属する住居が不明であり、他の埋甕と趣を異にしている。

埋設された土器の向きは、口縁方向を上にするいわゆる正位の状態のものが殆どで、後世の擾乱を受けて、検出面が低いものは口縁部から胴部上位を欠損している。正位の状態で埋設されていたことが確認でき、土器の下部を失っているもの23点の内、割れ口が水平方向に走る丁寧な作業で土器の下部が取り除かれたものは、17点（SU-1・2・3・7・11・13・14・15・18・22・23・25・26・29・32・34）である。これら土器下部の欠損の有無について型式、大きさ等の傾向は特に認められない。SU-28は押出シ遺跡で唯一、口縁方向を下にするいわゆる逆位の状態のものであるが、第IV章第2節のSB-33の項で言及した通り重複した住居の柱穴による擾乱を受け、土器の埋設時の底部の状況は不明である。

第2節 炉の形態

縄文時代中期の住居の炉の形態変異が、時間的経過の要素を含むといった指摘は、折井敦による八ヶ岳山麓地域の炉形態の相対編年（折井1977）をはじめとし、地域的相違の要素についての言及も加味されつつ、数々の報告が為されてきた。

押出シ遺跡で検出された、炉石の配置などの特長を残す炉9基について、同じ住居や、重複する住居に所属する埋甕の年代観を基にして、その形態の変遷を以下にまとめた（第50図 炉形態変遷図。炉平面図の向きは、全て、住居の出入口と考えられる方向に対する側を下にしている。また、粗いスクリーントーンが掛かる炉石は、明らかに原位置を留めていないと目されるものである）。

それぞれの炉の年代観（埋甕の土器型式との対応）は、曾利II式に並行する炉SL-16・11・1。曾利III式に並行する炉SL-23・17。加曾利E3式に並行する炉SL-2。曾利IV式以降に並行する炉SL-4・14である。SL-5は、対応する埋甕が検出されなかつたものの、所属する住居（SB-34）内で検出された敷石

の上面、住居周辺から、櫛齒状工具によりハの字文が施文された曾利式、磨消し縄文が施文された加曾利E式に比定される土器片が検出され、縄文時代後期に比定される土器が未検出だった状況を考慮して、便宜上、縄文時代中期後葉の末期（曾利IV式以降）に比定した。

検出例が少ないため、細かく類型を設定するには、至らなかったが、押出シ遺跡の炉の形態の変遷の概略は、以下の通りである。

曾利II式並行では、枕状の偏平な炉石を立てずに配置する形態（SL-16・1）が見られるが、曾利III式・加曾利E3式並行では、これらは全く見られ無くなり、板状の炉石を立てて配置する形態のみとなる。方形で側の炉石同士の接合部に隙間を埋めるように拳大の礫を詰めている例が顕著である。曾利IV式以降並行では、炉石の配置が橢円または長方形を呈する形態（SL-4・14）が見られるようになる。

炉の規模について、所属する住居の規模、年代に起因されると考えられる差異は、認められない。

炉石の材質は、紫蘇輝石、普通輝石、橄欖石斑晶などを含む複輝石安山岩で、箱根古期外輪山や湯河原火山の噴出物として、これらが採取できる場所は、静岡県東部に広く分布する。押出シ遺跡近隣では、山田川、夏梅木川流域の露頭や川原、遺跡周辺の沢などでも採取が可能である。詳細は、付編第4節を参照されたい。

第3節 住居の配置状況

押出シ遺跡は、丘陵頂上の平坦部で集落が営まれたと見られ、丘陵頂部の擾乱土内や西側の谷部に堆積する流れ込みと考えられる遺物包含層から出土した土器の年代観から、縄文時代中期全般を通じて、人々の生活の場であったことが窺える。しかし、残存する遺構に伴う土器（埋甕）より求められた年代観は、曾利・加曾利E式といった縄文時代中期後葉のものに限定される。

調査対象区域が丘陵の西側の一部に限定され、検出された遺構群もまた、遺跡全体の一部分にすぎないと考えられることから、集落全体の空間的な変遷を攝むことはできなかった。しかし、検出された住居跡について、配置状況、埋甕の土器の年代観等から、幾つかの纏まりを捉えることができた。

(1) H-2 グリッド杭を中心とした半径12、3 mの円の弧上に北西側にSB-21・22、南西側にSB-31・32・33、北東側にSB-26・28といった埋甕に曾利II式の土器を持つ住居跡が乗るように配置される。H-2 グリッド杭周辺は、ピットなどの遺構検出の密度が他の場所に比して極端に疎である。

(2) 調査区北側、E-4～6 グリッドを中心にして、埋甕に曾利III式の土器を持つ住居跡SB-5・6・12・14・15・16が集中する。

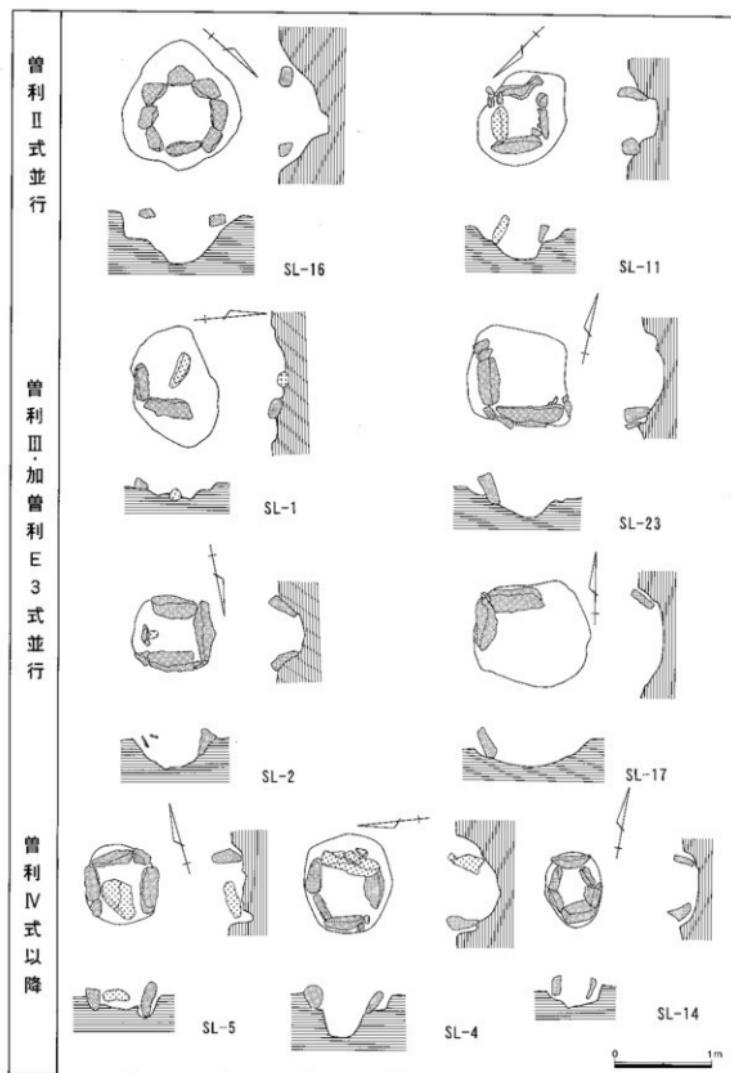
(3) ほぼG列上に加曾利E3式の土器を埋甕に持つ住居跡SB-8・17・18が南北一直線に並び、それぞれ炉または、住居の中心部と埋甕（住居の出入口部）を結んだ延長線（住居の向き）は、G-4 グリッド南側付近で交わる観を呈す。

(4) 曾利IV式以降の土器を埋甕とする住居跡は、北側（E-6 グリッドを中心とするSB-2・3・7）と南側（G～I-2 グリッドを中心とするSB-24・27）の群に二分され、(3) の例と同様にそれぞれ炉または、住居の中心部と埋甕（住居の出入口部）を結んだ延長線（住居の向き）は、G-4 グリッドの南側付近で交わる観を呈す。

これら、埋甕の土器型式別の住居の纏まりを同時期の集落の一群と仮定すると、今回調査された丘陵頂部西側に限って言えば、その変遷は、環状に住居を配置する纏まりが、その中心を北へ移し、さらに、その環を北側に拡げていった様子を追うことができる。

以上、住居跡の配置の変遷について言及してきたが、前述の通り、集落が営まれた丘陵頂部は、全体を調査しておらず、調査範囲内であっても、残存状況が比較的良好だった遺構のみが対象にされた状況

確認に留まる内容であることに注意されたい。今回の調査で特定されなかった縄文時代中期初・中葉の住居跡については、調査区外の東側に存するか、中期後葉の住居に比べ、掘り込みが浅く、遺存しなかつたかのいずれかと考えられる。



第50図 炉形態変遷図

〈参考文献〉

- 長田 實 1958 「原始社会—奥山遺跡—」『三島市誌』上巻 三島市
山内昭二 1967 『三島市千枚原遺跡』 三島市教育委員会
折井 敦 1977 「八ヶ岳南麓における縄文中期の炉形窯の変遷に関する一考察」
『長野県考古学会誌』28 長野県考古学会
漆畠 稔他 1979 『茅野B遺跡発掘調査報告書』 大仁町教育委員会
外岡竜二他 1979 『河津町見高段間遺跡 第三次調査概報』 河津町教育委員会
石川治夫他 1982 『沼津市文化財調査報告書第27集 子の神・大谷津・山崎II・丸尾II』
沼津市教育委員会
渡辺康弘他 1984 『上白岩遺跡 第III次・第IV次・第V次発掘調査報告書』
中伊豆町教育委員会
鈴木敏中他 1984 『一般国道1号三ツ谷バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』
三島市教育委員会
金子義樹 1984 「縄文時代における埋甕についての一試論」『神奈川考古』19
神奈川考古同人会
鈴木敏中他 1986 『北山遺跡』 三島市教育委員会
鈴木敏中他 1988 『北山遺跡』 II 三島市教育委員会
高尾好之他 1988 『沼津市文化財調査報告書第43集 土手上・中見代第II・第III』
沼津市教育委員会
御堂島正他 1988 『新戸遺跡』 第1分冊 神奈川県立埋蔵文化財センター
芦川忠利他 1990 『三島スプリングスC.Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書』 I
三島市教育委員会
芦川忠利他 1990 『三島スプリングスC.Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
三島市教育委員会
鈴木敏中他 1990 『十石洞遺跡』 三島市教育委員会
芦川忠利他 1992 『三島スプリングスC.Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書』 II
三島市教育委員会
御堂島正他 1992 『川尻遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター
御堂島正他 1992 『三ヶ木遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター
芦川忠利他 1994 『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡』 三島市教育委員会
長谷川 豊 1994 「静岡県における縄文時代中期の窯内埋甕について」
『静岡県考古学研究』26 静岡県考古学会

付 編

第1節 押出シ遺跡の縄文時代中期埋甕の内容物に関する調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

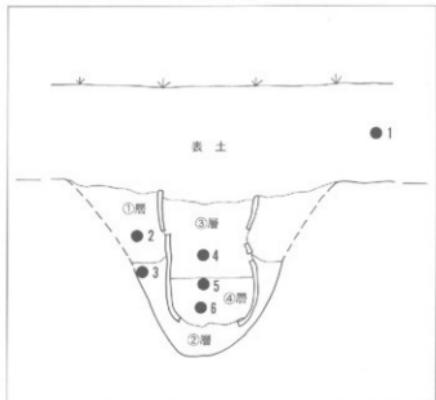
押出シ遺跡では、縄文時代中期の集落内に埋甕が検出され、遺体埋納の可能性が指摘されている。今回、この可能性を検討するために、分析調査を行なった。

ところで、遺体埋納の痕跡を自然科学的に検証する方法としては、リン酸分析が知られている。リン酸分析は、人体（特に人骨）に多量に含まれ、しかも土壤中で比較的移動しにくいとされるリン酸の含有量を測定し、その値から痕跡を定性的に把握する方法である（竹迫ほか、1981）。また、土壤中のリン酸には動物起源のものばかりでなく、植物起源のものもある。植物起源のリン酸が濃集している場合には植物起源の有機炭素量も高くなる。逆に動物起源のリン酸が濃集している場合にはんリン酸含量に対して相対的に有機炭素含量が低くなる。そのため、リン酸とともに炭素含量の値を把握することで、全体のリン酸量に対する植物遺体の影響を相対的に知ることができる。そこで、今回は有機炭素含量の測定も試みた。

1 試料

調査対象は、1区I-1グリッド出土の埋甕SU-1である。埋甕は平面プランが円形を呈する土坑に立った状態で埋設されている。土坑覆土は2層に区分され、下位がローム粒子が多い明褐色シルト（②層）、上位が褐色シルト（①層）である。埋甕内覆土は、下部に炭化物片を含む暗褐色シルト（④層）、中部に①層に似た褐色シルト（③層）が認められる。最上部の覆土は試料採取の際にはすでに掘り上げられていた。

試料は埋甕内の③層（試料番号4）、④層（試料番号5・6）から採取した。また、対照試料として土坑覆土の②層（試料番号3）、①層（試料番号2）、現表土（試料番号1）を採取した。分析の際はこれら6点を分析試料として用いた。



第51図 埋甕 試料採取位置



試料採取状況

2 方法

分析は、土壤標準分析・測定法委員会編（1986）、土壤養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO₃）5mlを加えて加热分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）10mlを加えて再び加热分解を行なう。分解終了後、蒸留水で100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（P₂O₅）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）を求める。

有機炭素量については、風乾細土試料の一部を微粉碎し、0.5mm篩を全通させた微粉碎試料を用いる。微粉碎試料1,000mg前後を清澄し、助燃剤（酸化コバルト）5.0gと混合する。混合試料をサンプルボーダーに乗せ、CNコーダー（柳本制作所製：MT-600）に挿入する。挿入された混合試料をキャリアガス（He）気流中で950°Cに加熱燃焼する。発生した燃焼ガスを純化させ、CO₂およびN₂の組成にする。次いで希釈、分取の工程を経て、TCD検出器により炭素及び窒素の濃度を測定する。この測定値から、乾土あたりの有機炭素量（T-C%）を求める。

3 結果

結果を表1に示す。

埋甕内試料のリン酸含量は、対照試料とした試料番号2・3よりも高い値を示すが、有機炭素含量も高い。また、特に下部の試料でリン酸含量が高くなるわけではない。現表土より採取された試料番号1はリン酸含量、有機炭素含量ともに他の試料よりも高い値である。

表1 埋甕のリン酸・有機炭素含有量

試料名		リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	有機炭素 C%	土色	土性
対照試料	1 (現表土)	13.12	5.02	10YR2/3 黒褐	L
	2 (土坑覆土①層)	1.85	1.89	7.5YR2/3 極暗褐	L
	3 (土坑覆土②層)	1.28	1.00	7.5YR3/4 暗褐	L
埋甕内覆土	4 (③層：上部)	2.17	1.85	7.5YR2/3 極暗褐	L
	5 (④層：中部)	2.36	2.07	7.5YR2/3 極暗褐	L
	6 (④層：下部)	2.18	1.98	7.5YR2/3 極暗褐	L

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林草農林水産技術会議監修、1967）による。

土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の判定法による。

L：壤土（砂と粘土を半々に感じる）

4 考察

土壤中に自然に存在するリン酸含量、すなわち天然賦存量は $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ で最大でも $5.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ と推定される (Bowen, 1983 : Bolt and Bruggenwert, 1980 : 川崎ら, 1991 : 天野ら, 1991)。今回は、現表土で天然賦存量よりも高い値であったが、埋甕内覆土と土坑覆土は低い。また、対照試料よりも土坑覆土の含量がやや高い値であるが、有機炭素含量も高い。そのため、土坑覆土には植物に由来するリン酸が混入していることが示唆される。以上の結果を見る限り、埋甕内では動物遺体由来と考えられるリン酸の濃集は確認できず、人骨などの遺体を埋納した可能性は低いと判断される。

本地域では当該期の埋甕について遺体埋納の可能性を検討した可能性を検討した例はあまりなく、今後とも資料を蓄積していく必要がある。

〈引用文献〉

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen,H.J.M. (1983) 環境無機化学—元素の循環と生化学一。浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社
[Bowen,H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M. (1980) 土壤の化学。岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 309p., 学会出版センター [Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M. (1976) SOIL CHEMISTRY], p.235-236.
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壤標準分析・測定法。354p., 博友社.
- 川崎 弘・吉田 隆・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p. : P.23-27.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖。
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定。ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, 156p. : p.39-40, 博友社.
- 竹迫 純・加藤哲郎・坂上寛一・黒部 隆 (1981) 神谷原遺跡への土壤学的アプローチ。神谷原 I, p.412-416, 八王子市鴨田遺跡調査会。

第2節 押出シ遺跡の1区で検出された竪穴住居跡（SB-8） の年代観と構築材について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

押出シ遺跡の1区で検出された竪穴住居跡（SB-8）は、出土遺物などから縄文時代中期に比定されると考えられている焼失家屋である。この住居跡からは、住居構築材の可能性がある炭化材が出土している。

本報告では、出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、住居の構築時期に関する資料を得る。また、樹種同定を併せて行い、用材に関する資料を得る。

1 試料

試料は、SB-8から出土した炭化材5点（試料番号1～5）であったが、試料番号2は遺存状態が悪いため分析試料から外した。樹種同定は残る4点を対象とし、放射性炭素年代測定は試料番号4の1点を対象とした。各試料の詳細は、樹種同定結果・年代測定結果とともに、表1に記した。

2 方法

（1）放射性炭素年代測定

a) 前処理

乾燥、粉碎したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に塩酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400°Cに加熱）にした。蒸し焼きにした試料は、純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭素カルシウムとして回収した。

b) 測定試料の調製

前処理で得られた炭素カルシウムから、真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン3mlに、シンチレイターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とした。

c) 測定

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰返す、計1,000分間行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と、自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定した。

d) 計算

放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5,570年を使用した。

（2）樹種同定

木口（横断面）・柱目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。



第52図 SB-8 炭化材試料採取位置図

表1 炭化材の放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果

遺構名	推定年代	資料番号	用途など	樹種	年代値	誤差		Lab. No.
						+	-	
堅穴住居跡(SB-8)	縄文時代中期	1	住居構築材?	クリ	-----	-----	-----	-----
		3	住居構築材?	クリ	-----	-----	-----	-----
		4	住居構築材?	クリ	3,650	340	330	PAL-378
		5	住居構築材?	クリ	-----	-----	-----	-----

注. (1) 年代値: 1,950年を基点とした値。

(2) 誤差: 測定誤差 2σ (測定値の95%が入る範囲) を年代値に換算した値。

3 結果

放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果を、表1に示す。年代測定値は、3650y.B.P.であった。一方、炭化材の樹種は、全てクリであった。解剖学的特徴などを、以下に記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔縁部は1~4列、孔縁外で急激にやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。

4 考察

(1) 住居の構築時期について

炭化材の年代測定値は、3650y.B.P.であった。東海地方から関東地方では、これまでにも多くの遺跡で、炭化物や貝等を用いた放射性炭素年代測定が行われている(キーリ・武藤, 1982; 野内, 1990等)。その結果と比較すると、今回の年代値は縄文時代後期の年代値に相当し、出土遺物などから推定される年代より、新しい時期を示す。

本地域では、沼津市雌鹿塚遺跡で、弥生時代の住居跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定が行われているが、その結果は推定値よりも古い縄文時代後期~晩期の年代を示していた(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1990)。この結果と今回の結果は逆のケースであるが、何らかの要因により、実際よりも新しい年代値が得られた可能性が高い。

なお、測定試料とした炭化材は4点の中では最も状態が良好であったが、測定試料としては必ずしも十分な量ではなかった。そのため、本来行う水酸化ナトリウムによる煮沸等を省略している。その結果、東村(1990)で指摘されているように、後世の汚染を完全に除去できない可能性などもあり、これらの要因により実際よりも新しい年代が得られた可能性がある。今後、さらに多くの事例を蓄積することで、各時期の年代などの詳細を明らかにしたい。

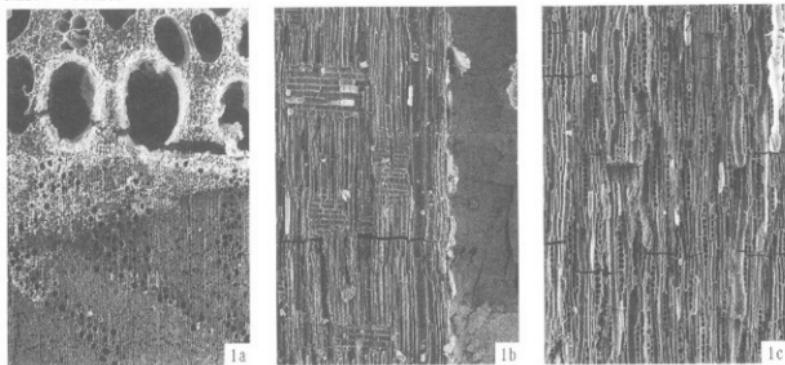
(2) 用材について

住居構築材の可能性がある炭化材は、全てクリであった。縄文時代の住居構築材にクリが多く用いられる例は、東日本地域を中心に多くの事例が知られている(千野, 1983, 1991; 高橋・植木, 1994)。

静岡県では、三島市観音洞遺跡で縄文時代中期末(加曾利E4式期)の住居跡から出土した炭化材に、クリが認められている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1994)。これらの結果から、本地域では、縄文時代中期頃の住居構築材にクリが多く利用されていた可能性がある。

このように、縄文時代にクリが多く利用される背景には、栽培によってクリの収量を安定させるとともに、収量の減少した老木を木材に利用した可能性が指摘されている(千野, 1983; 辻, 1997)。本遺跡周辺においても、同様の行為が行われた可能性があるが、資料数が少ないので断定には至らない。今後、さらに同時期の資料を蓄積して、詳細を明らかにしたい。

図版1 炭化材



1. クリ（試料番号1） a：木口， b：柾目， c：板目

200μm: a
200μm: b, c

〈引用文献〉

- 千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生 一南関東地方を中心に一。東京都埋蔵文化財センター研究論集, II, p.215-42.
- 千野裕道（1991）縄文時代に二次林はあったか 一遺跡出土の植物性遺物からの検討一。東京都埋蔵文化財センター研究論集, X, p.215-249.
- 東村武信（1990）改訂 考古学と物理化学, 212p., 学生社。
- キーリ C.T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代。加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究 I 縄文人とその環境」, p.246-275, 雄山閣。
- パリノ・サーケイ株式会社（1994）雌鹿塚遺跡の自然科学分析結果。沼津市文化財調査報告書第51集「雌鹿塚遺跡発掘調査報告書 I 遺構編 一狩野川西部流域下水道事業処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一」, p.153-170, 沼津市教育委員会。
- パリノ・サーケイ株式会社（1994）観音洞遺跡出土炭化材の材同定報告。「静岡県三島市 五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡II 一グランフィールズC.Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書一」, p.480-481, 三島市教育委員会。
- 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択。PALYNO, 2, p.5-18.
- 辻 誠一郎（1997）三内丸山を支えた生態系。岡田康博・NHK青森放送局編「縄文都市を掘る 三内丸山から原日本が見える」, p.174-188, NHK出版。
- 野内秀明（1990）三浦半島における縄文時代の¹⁴C年代測定値について。横須賀市博物館研究報告（人文）, 35, p.59-71.

第3節 押出シ遺跡の踏査記録について

はじめに

押出シ遺跡は、戦前よりその存在が知られ、踏査が幾度となく行なわれている。以前は、押出シ遺跡周辺を1つの遺跡として捉えていたようであるが、現在では、「押出シ遺跡」と浅い谷を挟んだ西側の「押出シA遺跡」の2つの遺跡に区分される。踏査記録については、それぞれの時期により記述に多少の変化が見られ、また現在では入手、閲覧が困難なものもあるため、以下に再録し、押出シ遺跡の参考資料としたい。

(1) 静岡県『静岡縣史』第1巻 1930年(昭和5)

「狩野川下流に於ける遺跡」

(前略) 錦田村も遺跡多く、大字川原ヶ谷・道満塚付近では石皿・磨製石斧を、字安倍野は磨製石斧を、大字谷田字ケンペイは石鎌・石皿を、大字玉沢は土器・石鎌・磨製石斧・凹石・石匙を、大字市山は土器を出土し、塚原新田も遺跡として知られている。然るに市山の坂小学校付近で厚手式土器にして弥生式に近似したものを出し、玉沢付近では薄手土器が発見されていることは、共に注意すべき事である。(後略)

(註) ここに記載されている。「安倍野」は押出シ遺跡の北方にある阿倍野集落であり、現在、阿倍野周辺では押出シ遺跡を含め、いくつかの遺跡が確認されている。このため、この「阿倍野」がどの遺跡を指していたか不明である。しかし、三島市東部の錦田地区には遺跡が多いことが古くから知られていたことがわかる記録である。

(2) 静岡県『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第12集 1937年(昭和12)

堀田美桜男「田方郡三島町付近箱根山麓の先史時代遺跡」

錦田村阿倍野字押出し

本遺跡は寺屋敷より約1km西南方に下りたる台地上にあり、本台地は西南に向いて突出し、付近周囲より一段と高くなりて独立せる如き觀あり。遺物の散布区域は大体35m×40m位の範囲にしてその散布量は寺屋敷程度多量ならず、石器としては打製石斧、敲石、石鎌等を探集せり。石鎌はすべて黒耀石製にて逆刺形及び三角形式のみにして、鋸歯状のもの一個あり、特異のもの認められず。

採集せる縄文式土器破片中、前期縄文式土器と認むべきものなく、中期縄文式土器中の勝坂式、加曾利E式に相当するもの、後期縄文式土器としては堀之内式に類すべきもののみなり。

土器破片中口縁部にて朱を塗抹せるもの1(加曾利E式に類す)、周囲を磨りて梢円形とするもの1個あり。

猶、交互斜めに篆書の斜線を表せるものあり、之は籠目を表現せるものならん。加曾利E式に類するもの也。

(註) この記録が「押し出し」という名称の初見である。押出シ遺跡の位置や、石器・土器について具体的に述べられ、遺物が表採されることなどが示されている。

(3) 三島市『三島市誌』上巻 1958年（昭和33）

錦田遺跡群 8 押出シ遺跡

阿倍野部落の南側に東から西へ向かって突出し、一段と高くなった独立丘陵のごとき観のある台地が遺跡である。標高160m。報告書によれば遺物散布地域もさして広くなく、量も余り豊富ではなかったようであるが、現在は遺物量は極めて豊富である。当時より、耕作が深く及び「マサウチ」が行われた結果であろう。箱根台地のように、縄文式遺物が、マサの中に存在する地域では、耕作の如何によって、遺跡の表面の状態は随分と変化するのである。

土器は中期縄文中の勝坂式、加曾利Eが主体をなし、それに後期の堀之内式が混在している。加曾利E式中に、口縁部に朱を塗ったものがあったと報告されている。

打製石斧、磨製石斧（乳棒式、定角式、小型定角式）石鎌（黒耀石製逆刺形、三角形）石皿（大形のものが多い）磨石、石匙等のほかに、いわゆる石器時代勾玉と称せられる有孔装飾品が発見されている。

この遺跡で注意すべきは、ヘギ石や扁平な安山岩や丸石が畑の周辺に多く見られることである。これは前述の千枚原遺跡に発見されたものと同様な、敷石住居址が推定されるのである。耕作者の言にも土中に石が群在していたというから、敷石住居址のあったことは確実であろう。

（中略）三島市には、奥山遺跡にも敷石の一部が断面に露出し、押出シ遺跡にも存在が推定されるので敷石分布圈の重要な役割を担うものといわなくてはなるまい。いずれも中期と後期と重複する遺跡で、千枚原のものは加曾利E式の新しいものに属する。この構造から見ても、三島市の中期縄文文化が中部山岳地帯及び南関東と深い関連を持っていることが理解されるであろう。（後略）

（註）これによると、位置と遺物についての記述はほぼ昭和12年の『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』を参照しながら、新たな踏査によって得られた情報を追加している。標高については、現標高が108m前後と、大きくかけ離れているため、記載の誤りと考えられる。なお、昭和30年代～昭和40年代頃、三島市の遺跡は錦田遺跡群・北上遺跡群・小沢遺跡群の3つの群を形成するとしている。しかし、後の三島市教育委員会による分布調査の結果、三島市の箱根山麓全域にわたって遺跡が分布することがわかり、現在では遺跡群という呼称は用いていない。

(4) 静岡県教育委員会『静岡県遺跡地名表埋蔵文化財包蔵地一覧』1961年（昭和36）

縄文文化遺跡

遺跡名：押出、所在地：三島市阿倍野・押出、地形：丘陵、編年：中・後期、

遺物：打製石斧・磨製石斧・石鎌・石皿・磨石・石匙

参考文献：三島市誌・静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告

(5) 静岡県立蘿山高等学校郷土研究部『ねぼうと』1号 1964年（昭和39）

「考古班—三島近郊遺跡踏査一」

私たちは身のまわりにある三島市近郊の縄文遺跡を『三島市誌』を中心として、踏査し遺物を探集しました。その目的は、それらの遺物を通して原始人の生活様式を多少なりとも理解したいためでありましたが、あまりかんばしい結果は得られずに終わりました。（中略）

4月28日 初音ヶ原、押出、阿倍野、カシラガシ、奥山遺跡

クラブ第一回の表面採集に箱根台地へ行く。（中略）次の目的地押出遺跡に行く。しかし初音ヶ原A遺跡と同じ様に採集困難だった為に思ったより遺物が少なかった。採集物は土鍤？1、石匙？1、打製石

斧2、石鎚3。そこより東側の舌状台地の様な遺物の少なく規模の小さい(以前に石鎚を数個採集した。)阿倍野遺跡へ行き、石鎚1を採集する。ここも麦で採集困難だった。(中略)

10月6日 初音ヶ原、押出、カシラガシ、奥山遺跡

(中略) そこから数分離れた押出遺跡へ行く。そこでは大部分表面が露出していたが、打製石斧の破片1と石鎚1のみを採集しカシラガシへ向う。

「三島市近郊の先土器時代の遺跡と遺物」(個人研究)

最近、先土器時代(無土器時代ともいいう)の研究が盛んに行なわれている。我が郷土においても明治大学が初めて学術的に愛鷹山山麓に先土器遺跡を発掘して、ナイフブレイド等を出土し、愛鷹山山麓に先土器遺跡があるとして注目される様になった。それでは縄文早期の多い箱根台地に於てはどうであろうか、前より沼津商業高校も研究をしているが、我々も先土器遺跡を三島市誌等を参考として縄文時代早期の遺跡などを踏査してみた。

踏査日誌(1963年度) (中略) 1月20日 押出 黒曜石ブレイド? 1 (中略)

押出遺跡 押出遺跡は縄文時代中期にかけての遺跡であるが、ある日、まさうちの後に行き合せ、まさがごろごろしている中より黒曜石製のブレイドと思われるものを1つ採集した。正確なことは不明。(後略)

(註) 昭和30年代後半から昭和40年代前半にかけて、高等学校の郷土研究部が遺跡の踏査や発掘調査への参加を活発に行なっていた。押出シ遺跡においても、1963年(昭和38)から1965年(昭和40)頃に県立蓮山高校郷土研究部によって何回か踏査され、遺物の表探が行なわれた。詳細は不明となっているが、採集された石器・土器は現在も蓮山高校に保管されている。また、個人研究で採集された石器は「秋本蔵」と記載していることから個人蔵となったようである。

(6) 静岡県・静岡県教育委員会・静岡県文化財保存協会「静岡県埋蔵文化財包蔵地地名表」1965年 (昭和40)

内容は(4)と同じ

(7) 静岡県立蓮山高等学校郷土研究部「山いも」第2号 1965年(昭和40)

「考古班—三島市近郊の縄文遺跡踏査一」

私たちは去年と同じように三島市近郊の縄文遺跡群をまわり表面採集に精を出した。これは非常にじみなことであるが、考古学をはじめる者にとっては大切なことであると思う。(中略)

10月11日 初音ヶ原A・B・C、押出、カシラガシ、奥山遺跡

(中略) 次の採集地押出遺跡も同様で石鎚3を採集したにすぎない。今度は麦が刈り終ってからこようと思う。(後略)

(註) 当時、押出シ遺跡周辺では麦が作られており、地表面が見えなかつたため、遺物の表探ができなかつたようである。

(8) 静岡県教育委員会「静岡県埋蔵文化財包蔵地調査カード」 1970年(昭和45)

種別: 縄文、時代: 縄文、名称: 押出シ遺跡

所在地: 三島市谷田字押出シ1771・1772・1774~1776・1750-43~54

土地所有：民有、地目：畑、立地：山稜

出土品：勝坂式土器・加曾利E式土器・堀ノ内式土器・加曾利B式土器・打製石斧・磨製石斧・石鎌・

石匙・石皿・磨石

調査日：昭和45年8月、調査者：秋本真澄

(9) 静岡県教育委員会「静岡県遺跡地名表」 1979年（昭和54）

三島市、種別：散布地、遺跡名：押出シ遺跡、時代：縄文中期、所在地：谷田押出シ、地目：畑地、

出土品：縄文土器・石斧（打・磨）・石鎌・石皿・磨石等

(註) ここで、時期について縄文中期に限定されている。この時点では、押出シ遺跡において後期の土器が見出されなかったことを示している。

(10) 静岡県教育委員会「静岡県遺跡地名表」 1988年（昭和63）

遺跡名：押出シ遺跡、時代：縄文（中）、種別：散布地、所在地：谷田押出シ、地目：畑地

遺構・遺物：縄文土器・石斧・石鎌・石皿

遺跡名：押出シA遺跡、時代：縄文（中・後）、種別：散布地、所在地：谷田字亀ヶ窪、地目：畑

遺構・遺物：縄文土器

(註) これは押出シ遺跡を「中期の土器が出土する押出シ遺跡」と「中期から後期の土器が出土する押出シA遺跡」とし、昭和40年頃まで1つの遺跡と認識されていたものが、実際は2つの遺跡であったことを明確にしている。

第4節 押出シ遺跡検出の炉石・敷石の石材採取地について

はじめに

押出シ遺跡の発掘調査では、縄文時代中期後葉に比定される遺構内より、火成岩からなる石材(炉石、敷石)が多数検出された。これらの石材採取地を推定するために、周辺部で野外調査を実施し、得られた岩石試料と遺構検出の石材の比較検討を行った。

遺跡の立地・地質概要

押出シ遺跡は、西側の箱根古期外輪山噴出物と東側の湯河原火山噴出物の基盤の境界付近に位置する。その上部は、箱根新期鰐石流、ローム層からなり、急斜面の丘を形成する。

箱根古期外輪山は、第一期成層火山体形成期(約50～25万年前)に噴出した溶岩(玄武岩・安山岩)と火山碎屑物の互層からなる外輪山を形成し、湯河原火山は、箱根火山より噴火活動が古く、溶岩(主に橄欖石複輝石安山岩)と火山碎屑物の互層からなり緩斜面の裾野を形成する。

本遺跡の東西に大場川の支流である山田川と夏梅木川が流れる。

山田川は、遺跡の西側を流れ、箱根古期外輪山南端部を深く削り、渓谷を形成する。また、上流から中流域にかけては、湯河原火山噴出物の末端の露頭を見ることができる。大場川までの下流域は、三島扇状地(約2800年前に堆積した黄瀬川泥流層を基盤とした河川堆積物により形成)上を貫流する。山田川の礫構成は、源流から上流域にかけて箱根古期外輪山系のもので構成され、上流以降、湯河原火山系のものが多く混入するようになる。

夏梅木川は、上流から中流域にかけて湯河原火山溶岩の露頭が多く見られ、大場川までの下流域は、三島扇状地上を貫流する。夏梅木川の礫構成は、湯河原火山系のものと、少量の箱根古期外輪山系のもので構成される。

山田川、夏梅木川の上・中流域は、深い岩盤の浸食された渓谷を流下するため、大きな川筋の変化は、今日まで無かったと見られる。

野外調査について

押出シ遺跡から出土した炉石、敷石に使用された石材は、角が鋭く、表面にざらつきや凹凸のある角礫・亜角礫(10～60cm程度)と表面のざらつきの少ない亜円礫・円礫(10～30cm程度)で構成される。形態や表面の状態より、角礫・亜角礫は、流水の影響を受けることが少ない露頭周辺から、亜円礫・円礫といった転礫は、川原から採取されたと考えるのが適当である。また、火山の別による噴出物(石質)の差異は、明らかであり、特定の石材を採取できる場所は、必ずしも限定されてくる。野外調査は、沢地川、山田川、夏梅木川、来光川、冷川流域及び遺跡周辺の沢の計33箇所で実施した。しかし、沢地川、来光川、冷川流域で採取された岩石試料は、遺跡から出土した石材と同様の外観特徴を持っていなかつたため、ここでは割愛する。また、三島扇状地の基盤となる黄瀬川泥流層は、当時(縄文時代中期)まだ形成されていなかったため、三島扇状地上を貫流する山田川、夏梅木川の大場川合流部周辺は、予め調査対象から外した。

石材の観察・分類方法

押出シ遺跡の遺構を構成する炉石、敷石と野外調査で得られた岩石試料は、風化や受熱の影響の無い新鮮面を観察面とし、肉眼と実体顕微鏡(20倍)で確認した外観特徴(色調、斑晶)を基に分類を行った。

石材の分類・特徴

1. 紫蘇輝石斑晶の目立つ複輝石安山岩の一群 (a ~ k)

- 1-a 色調は、黄灰色。多孔質。紫蘇輝石粗粒斑晶（3 mm程度）が目立つ。
- 1-b 色調は、灰色。紫蘇輝石粗粒斑晶（1～3 mm程度）が非常に目立つ。
- 1-c 色調は、灰黄褐色。微細な多孔質。紫蘇輝石斑晶（2 mm程度）を少量含む。
- 1-d 色調は、灰色。紫蘇輝石粗粒斑晶（7 mm程度）が目立つ。
- 1-e 色調は、灰色。紫蘇輝石粗粒斑晶（5 mm程度）が非常に目立つ。
- 1-f 色調は、赤みがかった灰色。紫蘇輝石粗粒斑晶（5 mm程度）が非常に目立つ。
- 1-g 色調は、紫がかった灰色。紫蘇輝石粗粒斑晶（5 mm程度）が目立つ。
- 1-h 色調は、緑がかった灰色。紫蘇輝石晶（1 mm程度）を少量含む。
- 1-i 色調は、紫がかった灰色。紫蘇輝石斑晶（1～3 mm程度）を少量含む。
- 1-j 色調は、灰色（eに比して暗色）。紫蘇輝石粗粒斑晶（4 mm程度）を少量含む。
- 1-k 色調は、灰色。紫蘇輝石斑晶（1 mm程度）を少量含む。

2. 普通輝石斑晶が少量見られる複輝石安山岩の一群 (a・b)

- 2-a 色調は、紫がかった灰色。普通輝石、紫蘇輝石粗粒斑晶（1～7 mm程度）を少量含む。
- 2-b 色調は、紫がかった灰色。普通輝石、紫蘇輝石粗粒斑晶（5 mm程度）を少量含む。

3. 斜長石斑晶が非常に目立つ複輝石安山岩の一群 (a～g)

- 3-a 色調は、紫がかった灰色。輝石斑晶（1 mm程度）が少量、斜長石斑晶が非常に目立つ。
- 3-b 色調は、灰色。輝石斑晶（1 mm程度）が少量、斜長石斑晶が非常に目立つ。
- 3-c 色調は、灰色。多孔質。輝石斑晶（1 mm程度）が微量、微細な斜長石斑晶が非常に目立つ。
- 3-d 色調は、暗灰色。輝石斑晶（1 mm程度）が少量、微細な斜長石斑晶が非常に目立つ。
- 3-e 色調は、赤みがかった灰色。微多孔質。輝石斑晶（1～2 mm程度）が微量、斜長石斑晶が非常に目立つ。
- 3-f 色調は、灰黒色。輝石斑晶（1～2 mm程度）が微量、斜長石斑晶が非常に目立つ。
- 3-g 色調は、暗灰色（dに比して暗色）。普通輝石、紫蘇輝石斑晶（1～2 mm程度）、斜長石斑晶が非常に目立つ。

4. 橄榄石複輝石安山岩の一群 (a～d)

- 4-a 色調は、紫がかった灰色。橄榄石粗粒斑晶（4～6 mm程度）が非常に目立つ。
- 4-b 色調は、紫がかった灰色。橄榄石斑晶（2 mm程度）が非常に目立つ。
- 4-c 色調は、暗灰色。橄榄石斑晶（1 mm程度）を少量含む。
- 4-d 色調は、暗灰色（cに比して暗色）。橄榄石斑晶（1 mm程度）を少量含む。

5. 無斑晶緻密安山岩の一群 (a・b)

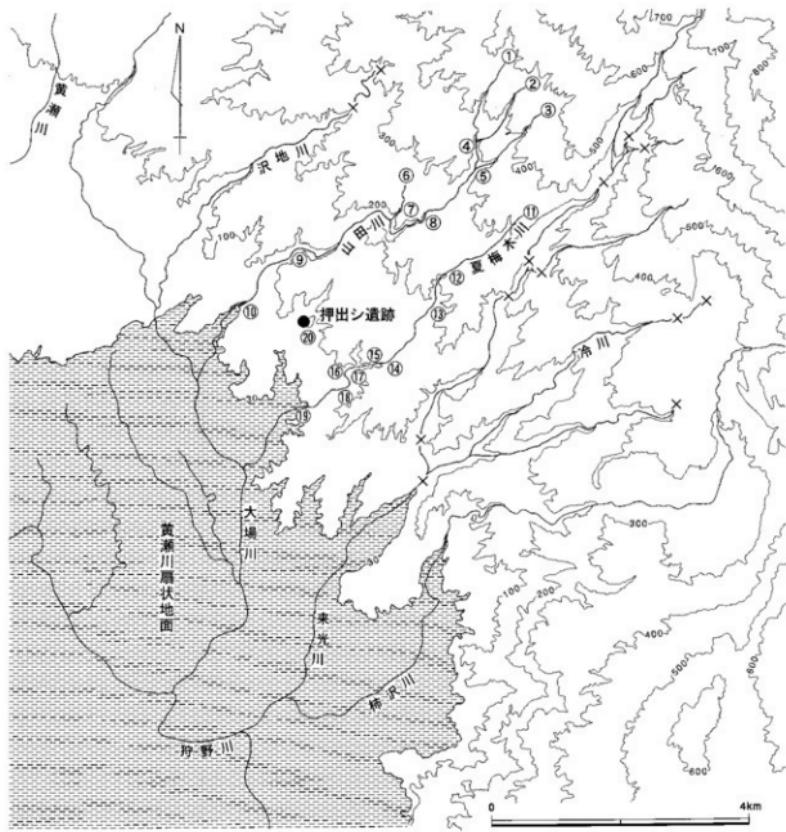
- 5-a 色調は、灰色。緻密質。斜長石斑晶（1 mm程度）を微量含む。
- 5-b 色調は、暗灰色。緻密質。斜長石斑晶（1 mm程度）を微量含む。

石材採取地の推定

野外調査で得られた岩石試料と炉石、敷石の比較を行い、その外観特徴（石質、礫の形態、大きさ）より、石材採取地を推定した。観察方法は、肉眼、実体顕微鏡と共に偏光顕微鏡によるプレパラート法を用いた。

野外調査時の石材採取箇所と押出シ遺跡石材利用状況

石質	野外調査時の石材採取箇所 (Y=山田川流域 N=夏梅木川流域 S=遺跡周辺の沢 —=野外調査で未確認)	石材検出構造と利用状況 (◎=炉石 2点以上・敷石10点以上)
1-a	Y②③④⑤⑧⑨⑩	炉石に利用 SL-11◎・12
1-b	S⑩	炉石に利用 SL-7
1-c	—	炉石に利用 SL-5
1-d	Y⑥⑦⑧⑨⑩	炉石に利用 SL-16◎ 敷石に利用 SB-34◎
1-e	Y⑥⑦⑧⑨⑩	炉石に利用 SL-14 敷石に利用 SB-34◎
1-f	Y⑥⑦⑧⑨⑩	炉石に利用 SL-12◎・17
1-g	Y⑥⑦⑧⑨⑩	炉石に利用 SL-4◎・12◎・14◎・17・23◎
1-h	S⑩	炉石に利用 SL-7 敷石に利用 SB-34
1-i	N⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑯⑯⑯	炉石に利用 SL-11 敷石に利用 SB-34
1-j	N⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑯⑯⑯	敷石に利用 SB-34
1-k	—	炉石に利用 SL-12
2-a	S⑩	炉石に利用 SL-1・2◎・11・17
2-b	S⑩	炉石に利用 SL-2◎・23◎
3-a	Y⑨⑩	炉石に利用 SL-1・4・23 敷石に利用 SB-34
3-b	N⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑯⑯⑯	敷石に利用 SB-34
3-c	N⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑯⑯⑯	炉石に利用 SL-14
3-d	—	炉石に利用 SL-14
3-e	—	炉石に利用 SL-11◎
3-f	—	敷石に利用 SB-34
3-g	S⑩	炉石に利用 SL-4◎ 敷石に利用 SB-34
4-a	N⑯⑰⑯⑯	炉石に利用 SL-1・5◎・16◎・17◎ 敷石に利用 SB-34
4-b	Y⑥⑦⑨⑩	炉石に利用 SL-12・17・23◎ 敷石に利用 SB-34
4-c	Y⑥⑦⑨⑩	炉石に利用 SL-4・16◎・17 敷石に利用 SB-34
4-d	S⑩	炉石に利用 SL-7・11 敷石に利用 SB-34
5-a	Y①⑤⑥⑦⑧⑨⑩	敷石に利用 SB-34
	N⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑯⑯⑯	
5-b	Y①⑤⑥⑦⑧⑨⑩	炉石に利用 SL-4・11
	N⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑯⑯⑯	



第53図 押出シ遺跡周辺の河川及び岩石試料採取実施地点

①～⑩=山田川流域の岩石試料採取地点

⑪～⑯=夏梅木川流域の岩石試料採取地点

㉚ =押出シ遺跡西側周辺部沢の岩石試料採取地点

× =その他の岩石試料採取地点

まとめ

野外調査（第51図）の結果、山田川中流域（⑥～⑧）や夏梅木川中流域（⑯～⑰）に炉石・敷石の石質と特徴が類似した露頭が集中していることが判明し、露頭の崩落箇所や周辺の沢で、角礫・亜角礫を採取することができた。また、山田川中・下流域（⑧～⑩）、夏梅木川上～下流域（⑪～⑯）や遺跡周辺の沢（⑰）で亜円礫・円礫が豊富に見られた。調査地点⑨や⑯より下流では、露頭は見られず、川原の礫は、円礫と砂礫で構成され、角礫・亜角礫の入手は、不可能であった。

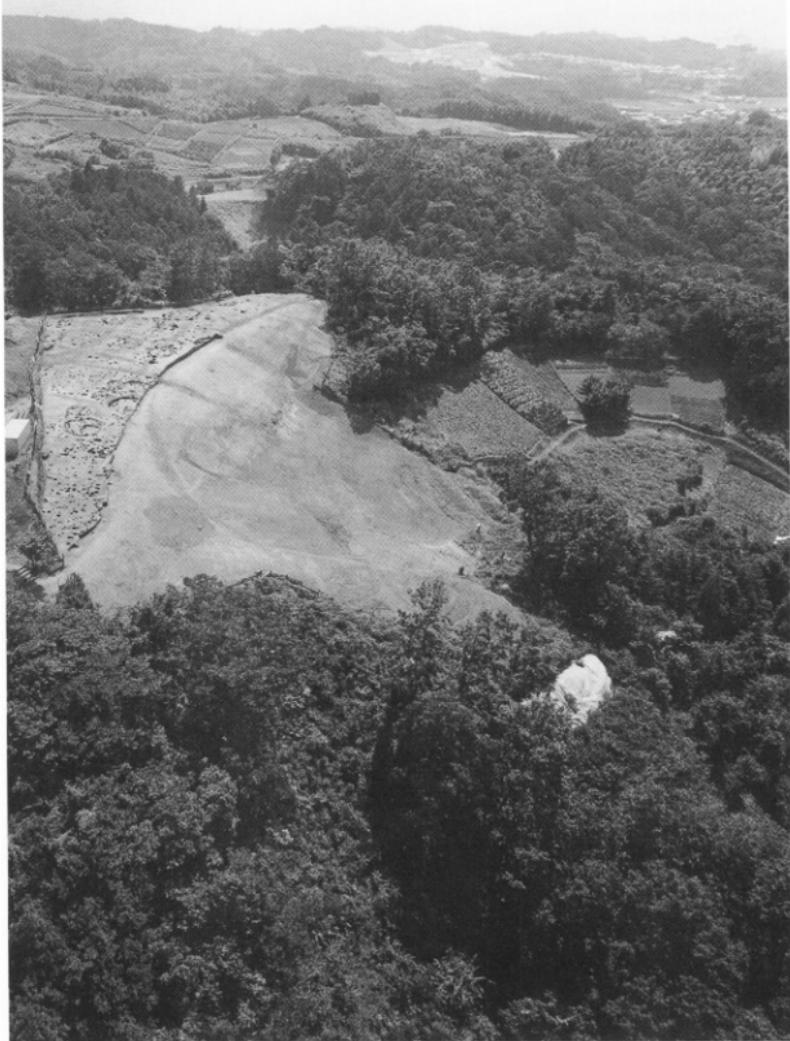
以上の結果から、角礫・亜角礫は、山田川中流域（⑥～⑧）の露頭周辺と夏梅木川中流域（⑯～⑰）の露頭周辺で入手した可能性が大きく、亜円礫・円礫は、山田川、夏梅木川の上流域以降の川原や遺跡周辺の沢の転礫であると見られる。これらの場所は、遺跡から4kmの範囲内にまとまる。

炉石には、山田川流域で採取される紫蘇輝石斑晶の目立つ複輝石安山岩（1-a・d・f・g）、橄欖石複輝石安山岩（4-b・c）、夏梅木川流域で採取される橄欖石複輝石安山岩（4-a）、遺跡周辺の沢で採取される普通輝石斑晶が少量見られる複輝石安山岩（2-a・b）が、敷石には、山田川中流域で採取される紫蘇輝石斑晶の目立つ複輝石安山岩（1-d・eなど）が多用されていることが判明した。

〈参考文献〉

平林武	『箱根熱海両火山地質調査報文』	震災予防報告	1898
(1953年製本)			
御静岡県出版文化研究会	『フィールドワーク 静岡の地学』	静岡教育出版社	1978
黒田吉益・諫訪兼位	『偏光顯微鏡と岩石鉱物』第2版	共立出版株式会社	1983
大森昌衛・端山好和・堀口万吉	『日本の地質3 関東地方』	共立出版株式会社	1986
益富壽之助	『原色岩石図鑑』	保育社	1987
袴田和夫	『箱根火山』	箱根町立大涌谷自然科學館	
		朝箱根観光公社	1987
植村武・山田哲雄	『日本の地質4 中部地方I』	共立出版株式会社	1988
久城青夫・荒牧重雄・青木謙一郎	『日本の火成岩』	静岡波書店	1989
高木照正	『石器・石材の研究(I) -沼津市及び周辺遺跡出土石器-』 『沼津市博物館紀要』15	沼津市歴史民俗資料館 沼津市明治史資料館	1991
柴田徹・山本薰・鈴木素行	「武田石高遺跡から出土した石材の石質と石材採取地についての考察」 『武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生編』		
		助ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集	1998
高橋正樹・小林哲夫	『フィールドガイド 日本の火山② 関東甲信越の火山II』	築地書館	1998

写 真 図 版

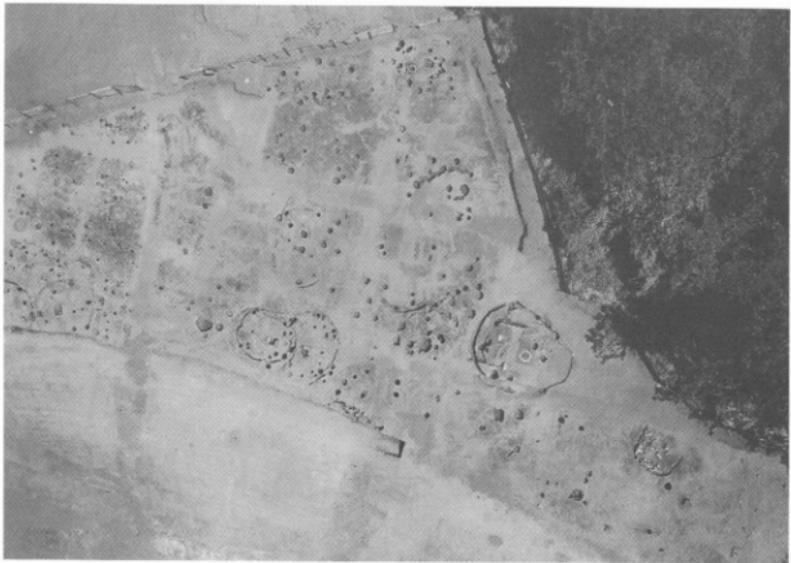


押出シ遺跡遠景（北より）

図版 2



1. 1区 北半部全景 (西より)



2. 1区 南半部全景 (西より)



1. SB-1 SD-1 全景（西より）



2. SB-1 遺物出土状況（西より）



3. SB-2 全景（西より）

図版4



1. SB-6 SL-7 (西より)



2. SB-4 SU-2 (北より)



4. SB-6 SU-4 (北西より)



3. SB-5 SU-31・32 (北東より)



5. SB-7 SU-35 (南西より)



1. SB-8・9・10全景（南より）

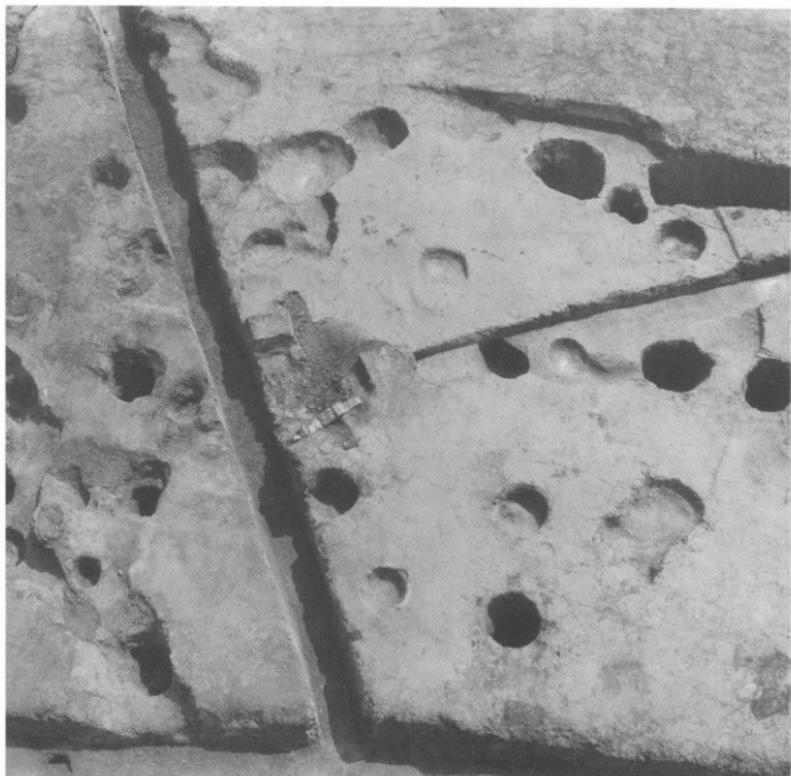


2. SB-10 SL-24（南より）



3. SB-8 SU-24（西より）

図版 6



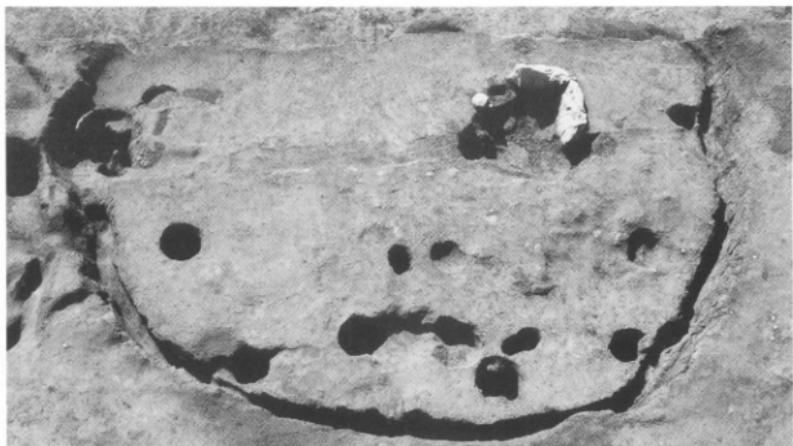
1. SB-11全景（西より）



2. SB-11 SL-20（東より）



3. SB-11 SL-20断面（北東より）



1. SB-12・13全景（東より）



2. SB-12 SU-23（北より）



4. SB-13 SU-27（北より）

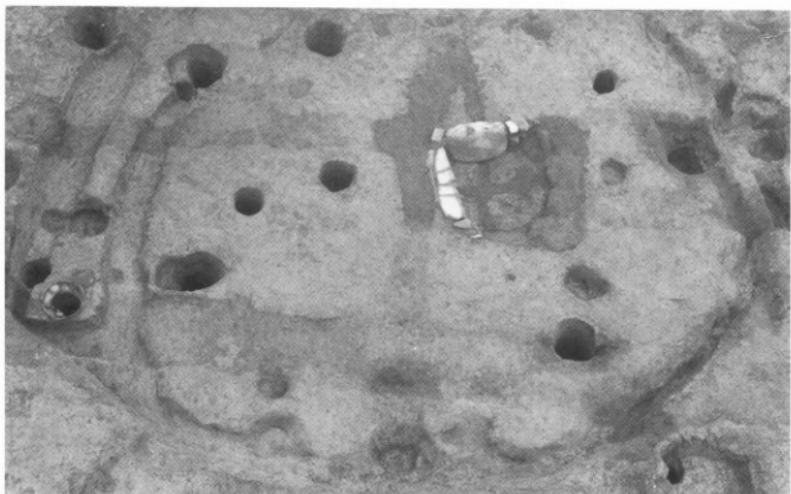


3. SB-12 遺物出土状況（北より）

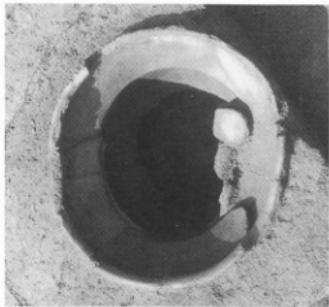


5. SB-12・13 SL-17（東より）

図版8



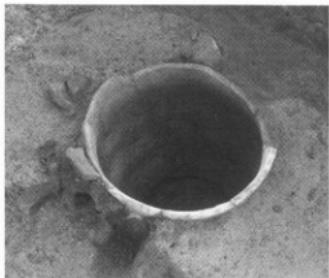
1. SB-14・15全景（東より）



2. SB-14 SU-26（南西より）



3. SB-14 SL-23（北より）



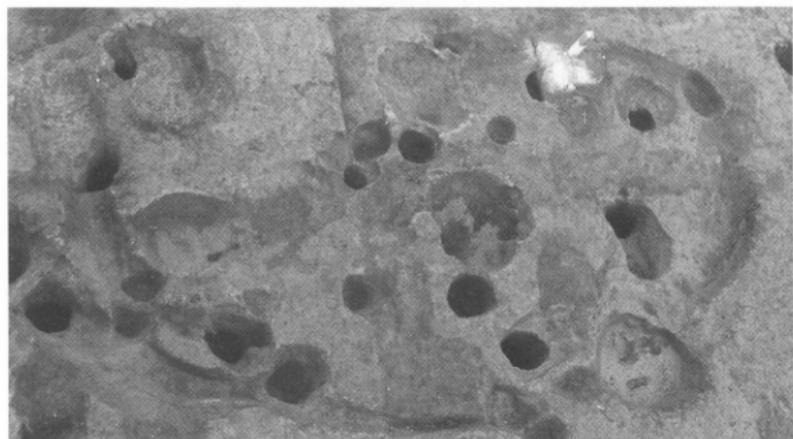
3. SB-15 SU-25（南より）



5. SB-15 SL-18（北東より）



1 . SB-12・13・14・15・16・17全景 (東より)



2 . SB-16・17全景 (東より)

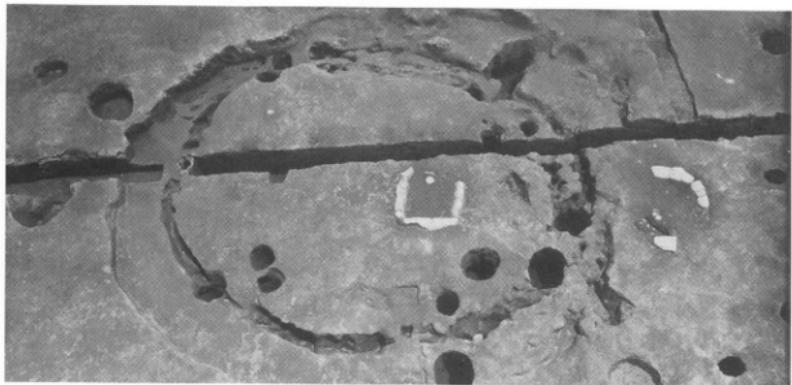


3 . SB-16 SL-21 (西より)



4 . SB-16・17 SU-7・8 (南西より)

図版10



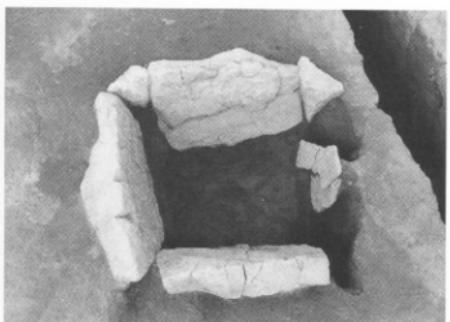
1 . SB-18・19・20 (西より)



2 . SB-18・19・20 (北東より)



3 . SL-11 (北西より)



4 . SL-2 (南より)



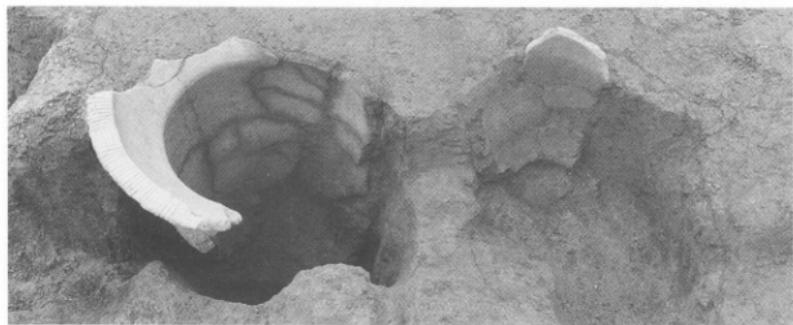
1. SB-18・19・20 (左) とSB-21・22 (右) の重複 (西より)



2. SB-21・22 (北東より)

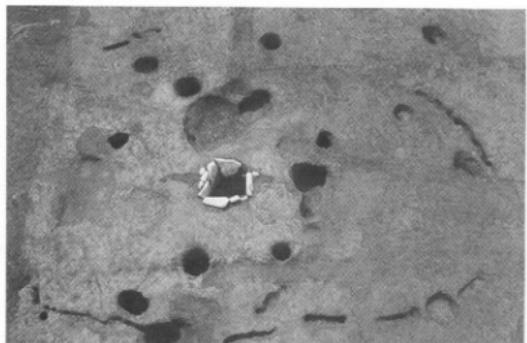


3. SL-1 (南より)

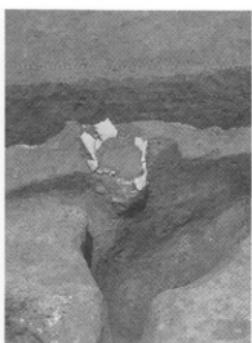


4. SU-12 (左)・13 (右) (東より)

図版12



1 . SB-23 (右) • 24 (左) (北より)



2 . SU-17 (東より)



3 . SL-4 (南東より)



4 . SL-12 (南より)



5 . SB-25 (南より)



1 . SB-26 (南より)



3 . SU-15 (南より)



2 . SB-27・28 (南より)



4 . SU-14 (南より)

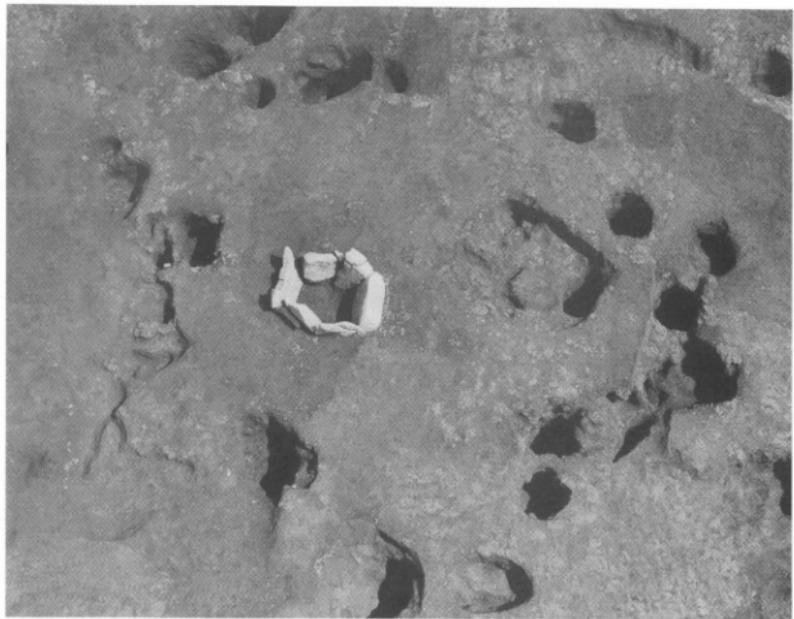


5 . SU-16 (北より)



6 . SL-32 (西より)

図版14



1 . SB-29・30 (西より)



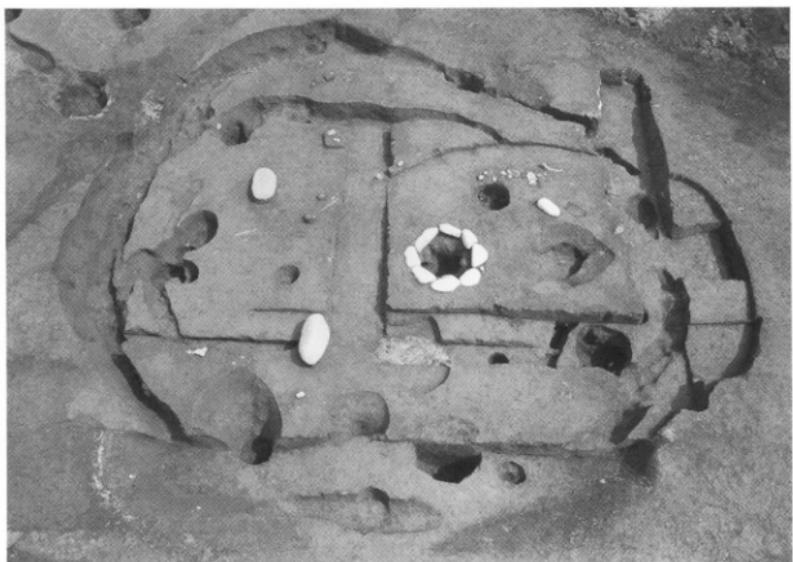
2 . SL-14 (東より)



3 . SL-15 (南より)



4 . SU-1 (南より)



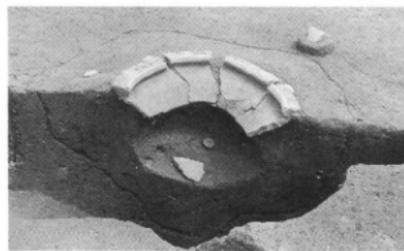
1 . SB-31・32・33 (西より)



2 . SL-11 (南西より)



3 . SL-16 (東より)



4 . SU-21 (西より)

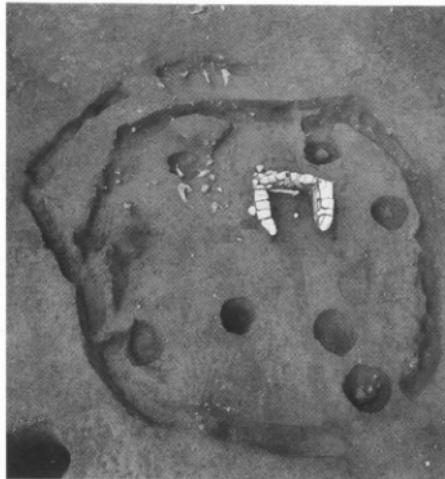


5 . SU-28 (北より)

図版16



1. SB-34 敷石検出状況（東より）



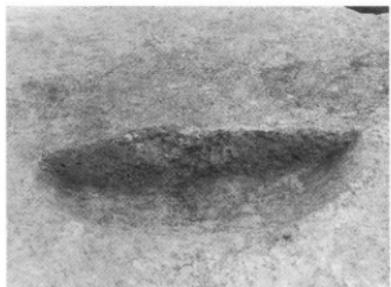
2. SB-34・35（南より）



3. SL-5 半裁状況（北東より）



4. SL-5（南より）



1 . SL-22 (西より)



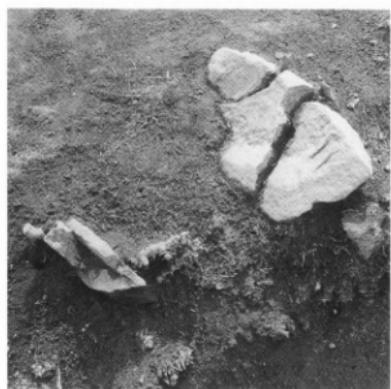
2 . SL-19 (西より)



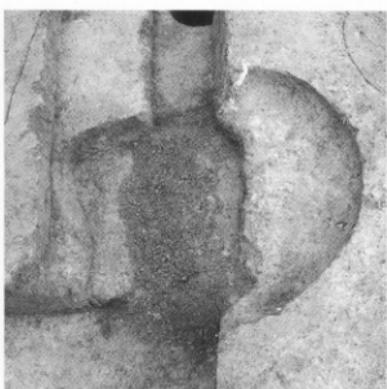
3 . SL-10 断面 (西より)



4 . SL-10 (西より)



5 . SL-3 (西より)

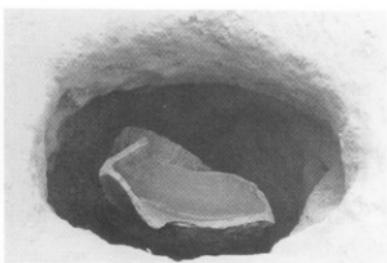


6 . SL-27 (北より)

図版18



1 . SU-5 (西より)



6 . SU-34 (北より)



2 . SU-10 (東より)



7 . SU-9 (北東より)



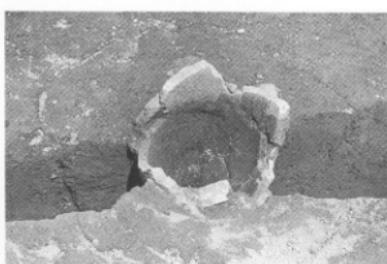
3 . SU-20 (南より)



8 . SU-18 (南より)



4 . SU-3 (南より)



9 . SU-22 (南より)



5 . SU-19 (南より)



1. SF-1 (北東より)



2. SF-2 (北西より)



3. SF-3 (西より)



4. SF-4 (南より)



5. SF-5 (西より)

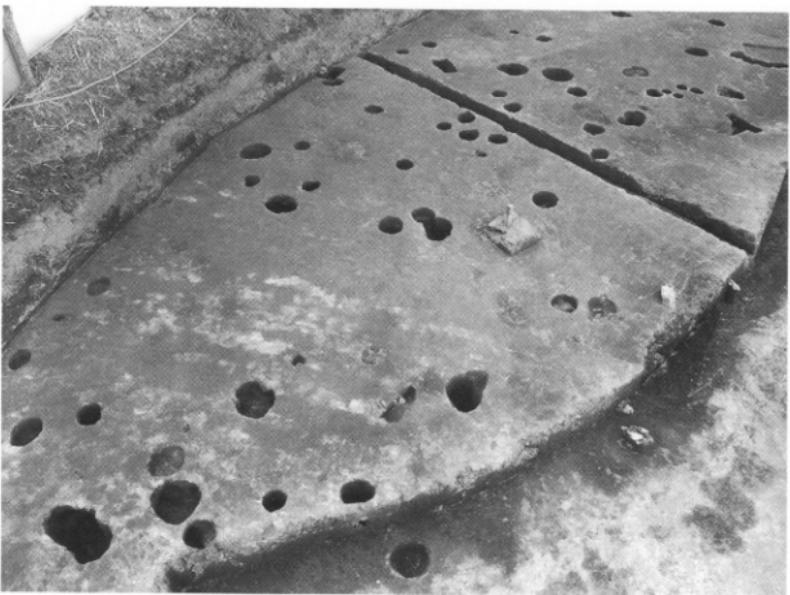


6. SF-6 (南より)

図版20



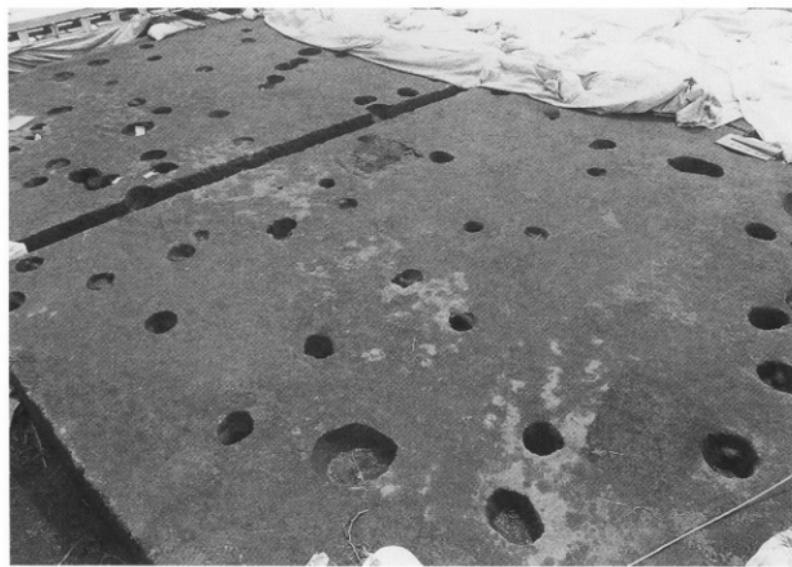
1. F-4・5、G-4・5、H-4 ピット群（東より）



2. E-7・8、F-7・8 ピット群（北西より）



1. E-7、F-7 ピット群（北東より）

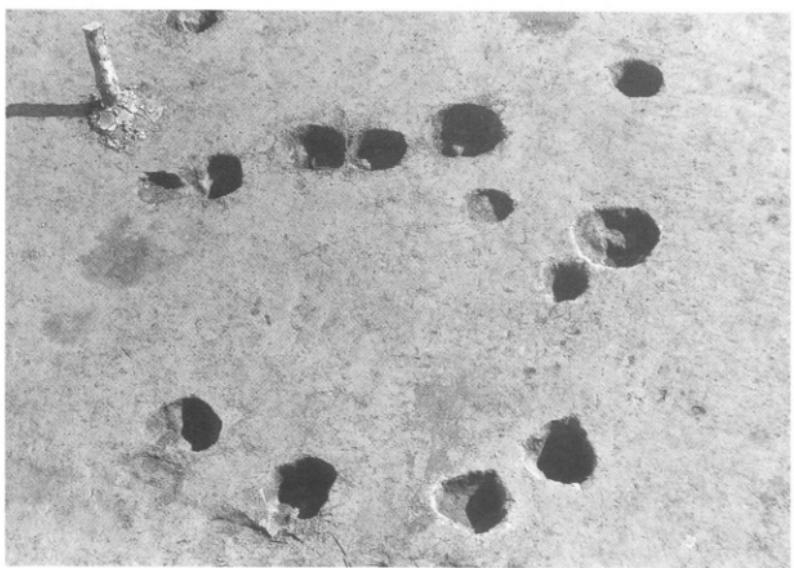


2. G-4 ピット群（北東より）

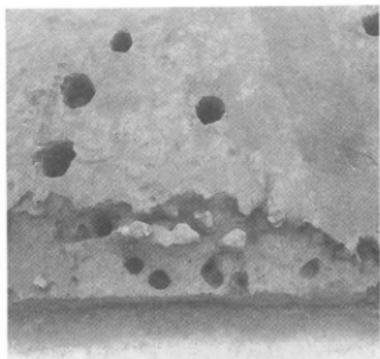
図版22



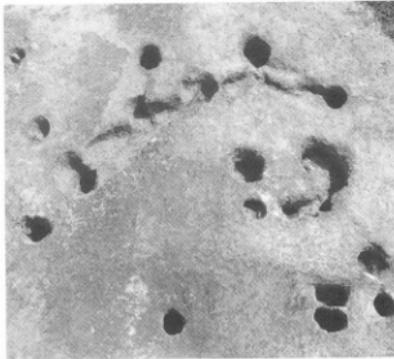
1. G-4 ピット群（北西より）



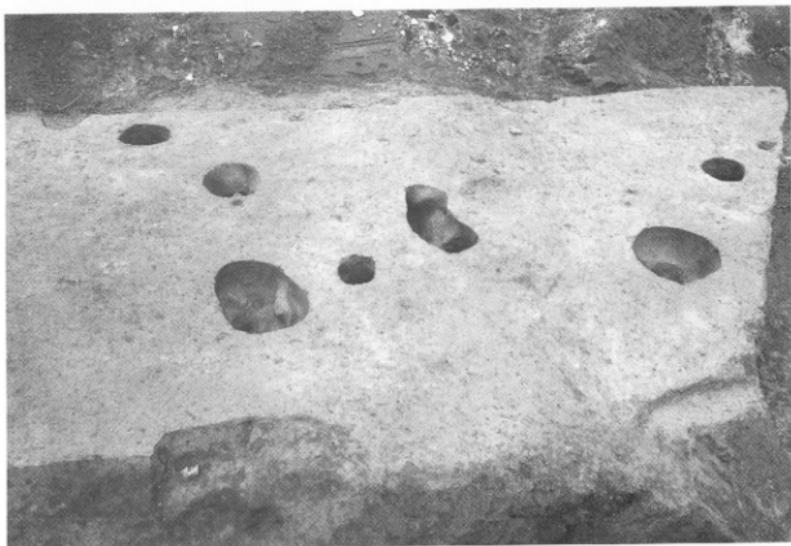
2. G-4 ピット群（北より）



1. SD-32 SN-12 (西より)



2. SD-36 SN-16 (西より)



3. 3区 検出ピット (西より)

<現地調査参加者>

笹原千賀子	岩崎しのぶ	水上 綾子	湊 嘉秀	森嶋富士夫		
青島 邦夫	青柳 行子	秋本 慧子	阿部 晴美	池上 繁	池田波津代	石川美保子
稻垣 光晴	井上 義一	上郷 京三	上村 次雄	内野 栄一	梅原 實	遠藤 淳
遠藤 祐子	遠藤 嘉子	岡林八重子	小畠 幸代	加藤 早苗	河辺 直	神田 純美
木村 瞳美	久保田親則	桑島 孝	近藤 博	齊藤舜一郎	相良 昭	佐藤 修一
佐藤 政美	柴田美佐子	島田 丽子	杉沢 昇	杉本 織恵	鈴木 秋夫	鈴木 博美
鈴木 宗矩	高木 幸子	高梨 孝	高梨 吉勝	高原 恒男	田川美恵子	竹下 栄二
竹下 賢次	田代 秀樹	田中 君子	種石 悠	土屋みどり	椿 孝江	露木智津子
内藤 直	中込みね子	永坂 松江	中山 文雄	禁瀬 調子	橋本 文雄	林 雅子
林 美幸	早瀬 亮介	福島とき子	福田竹二郎	藤井 章夫	藤原 常雄	舟山八代江
増山 讓治	松下千鶴子	向笠かよ子	山田 喜久恵	山田 瑞子	山本 光枝	山本 良作
横田 瞳子						

<整理作業参加者>

中嶋 郁夫	水上 綾子	伊澤 幸恵	鈴木 輝美	湊 嘉秀	森嶋富士夫	
井出 香織	稻葉 芳美	遠藤 美鈴	大川佳世子	大谷 真紀	押尾と志子	小畠 幸代
加藤 恵子	川口 幸子	神田 繼美	後藤 俊江	齊藤 晋	重信美知子	柴田美佐子
清水 光子	白井なみ子	杉本 織恵	鈴木 里江	鈴木 洋子	高田みゆき	土屋みどり
椿 孝江	豊島智恵子	中込みね子	林 美幸	舟山八代江	堀江 久代	三上 織江
村川 裕子	湯川 由巳	横田 瞳子	和途 美紀			

<調査協力者>

調査では次の方々に御指導、御助言を賜った。厚くお礼申し上げる。(敬称略)

- 池谷 信之 (沼津市教育委員会)
- 漆畠 稔 (大仁町教育委員会)
- 柴田 徹 (東京都立青山高等学校)
- 鈴木 敏中 (三島市教育委員会)
- 山崎 克巳 (磐田市教育委員会)
- 山本 薫 (筑波大学)

報告書抄録

ふりがな	おんだいしせき いこうへん							
書名	押出シ遺跡 (遺構編)							
副書名	平成8・9年度東駿河湾環状道路建設埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書							
シリーズ番号	第111集							
編著者名	望月由佳子 濱田由美子 岩名建太郎 水上綾子 森嶋富士夫 (パリノ・サーヴェイ株式会社)							
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL054-262-4261							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
おんだいしせき 押出シ遺跡	しづおかけんあしまし 静岡県三島市 やまとすけおとせ 谷田字押出シ 1772	22206		35度 07分 23秒	138度 56分 58秒	19960401 19971013	7,250	東駿河湾環 状道路建設 工事に伴う 埋蔵文化財 発掘調査業 務
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
押出シ遺跡	集落跡	縄文時代 中期後葉	住居跡 敷石を伴う住居跡 2軒 土坑 7基	33軒	繩文土器・石鉄・打製石斧 磨製石斧・磨石・凹石			
	包含層	縄文時代 中期			繩文土器・石鐵・石斧 磨石・敲石・石皿・石匕 凹石・石錐・石錘・石棒 土偶・土製円盤・土器片錐			

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第111集

押出シ遺跡

平成8・9年度東駿河湾環状道路建設
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成11年3月31日発行

編集行
発行

財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20

TEL 054-262-4261(代)

印刷所

黒船印刷株式会社

〒422-8033 静岡県静岡市葵区2丁目4-25

TEL 054-286-0236(代)